

蓮「確な證據に成ります物が一箇御座いましたのを、残念な事には私が失してしまいましたので御座います。」

管又は手を拱こまぬいて熱と考へて居た。

管「然し、私は未だ其事を十分に信じては居りませんので。それはもう世間でお噂を致すやうな事は萬々無いと承知致しては居りますが、一方の事も確たしかに慥かうと突止めた譯では御座いせんのですから。」

管「で、どうか其の事實を檢しらべまして、貴方の汚名せうめいを雪いで上げたいと存じて居ります。」

蓮「御深切の程難有う存じます。常人の私は申すには及びません、兄上も然ぞかし喜びますで御座います。」

管「いえ、伯爵は如何な事でも私の致します事は、決して御意には入らんので御座います。」

繪蓮は之に答へて何をか言はんと爲るのを、管又は忽ち打消して、

管「もう大分遅いやうで御座いますから、私は是でお暇いとまを致します。」

蓮「然やうなれば、只今馬車の支度を致させますから。」

管「もう其には及びません。不破瀬が居りますから、他あれと一緒に還ります。」

餘り速急すみやくに起たれたので、繪蓮は嬰踢おんげきして殆ど爲す所を知らざるのであつた。管又は一禮して戸口を出やうと爲たが、卒にはかに立復たちもどつて、利喜三の寐ひたひて居る額せつふんに接吻した。

管「あれ、まあお可愛らしいぢや御座いせんか、又御様子がお悪いやうで御座いましたら、御遠慮いとひは要りませんから、何時なんどきでもお迎を下くださいませ、私は直すに参ります。」

蓮「何から何まで御深切に難有う存じます。本に今夜の御恩は……………」

管「然やうなら御機嫌宜よろこう。」

管又は階子はしこの口まで來ると、送出んとて後に踵つひく繪蓮を制して、

管「お子様には十分御注意を遊あそびまして——些ちつとも御油断はなりませんで御座いますよ。少の間も貴方がお傍を離れるのは宜う御座いせん、どうぞもう其でお構かま無く。」

蓮「はい、然やうなら是で御免を蒙ります。」

寒牡丹

雷又は階子を下り行く、繪蓮は子の寢臺の傍に返つたが、旋て門外に出た主従の話聲が聞ゆるので、窓の戸を推啓けて見送れば、降積む雪を衝いて、真先に進む不破瀬の跡を踏みつき、効々しくも雷又は歸り行くのである。

蓮「噫、何と謂ふ善い人であらう！ 噂には聞いて居たが、成程可羨しい心掛、那では人の懐くのも無理は無い。明日は兄様の處へ此事を書いて上げなければならぬ。」

(十四)

此の雪中の往診後七週間、約過ぎての事であつた、夕暮の六時頃雷又は近き邊を散歩して居ると、十歳ほどの貧しい姿の娘が来て、懇懇に彼の前に一禮して、

娘「奥様、内のお祖父さんが大病で難澁して居りますから、どうぞ御光來をお願い申したいもので御座います。」

雷又は直に娘と同道して其家を見舞つた。一目して毎日の麵包にも事缺くと見ゆる生活の状態。唯一間の家の隅に瘠瘠ひたる老人が病苦に惱んで居るのであつたが、雷又は入來るのを見て、纒に目禮した。

老「奥方様、どうぞ御免あそばして下さいまし、體が痛みまして御挨拶を致しまする事も出来ませんので御座りまするから。」

雷「あゝ、可うございますよ。大分切ないやうだが、何處がお悪いのですね。」

老「はい、私は近年リウマチズムが持病で御座りまして、時々其處此處が痛みますので御座りまするが、格別臥りますやうな事は從來とんと無いので御座りましたが、今年の寒氣で遣られましたものと見えまして、はい、御覽の通身動も出来ません始末で難澁いたして居ります。近所の方が色々御深切にお世話を作つて下さいまして、恚云ふ大病はお醫者様に診て戴いてお薬を飲まなければ可けない、それには御別荘の奥方様にお頼み申上げれば、甚麽病氣でも復るから、早速お願ひ申した方が可からう、と箇様に申されますので、誠に失禮とも何とも申上げやうも御座りませんが、如何にも惱みまして、はい、我慢が致しきれませんので、恐入りまして御座りますが、お迎を上げまして御座ります。早速御出下さいまして難有う存じまする。」

雷又は此の手も觸れられぬほど汚れたる病人を丁寧に診察して、

替「どうも此の病氣は長引くもので、半月や一月で舊の體もとからだに成ると云ふ譯には行きませんがね、決して案じ
る事は無いので、唯氣を長く療治をしなければ成りませんよ。」

老「もう私も六十七で御座りますで、今度は是でお暇やすみで御座いませうと存じます。」

替「何の、不斷ふたんが達者たつしやだから、那樣氣遣そんなきづかひは些も有りません。薬は私が何日までとも上げますから、氣長に辛
抱しておいなさい。」

老「はい、はい、それは御難有う御座ります。もう此齡としで御座りますで、命の惜い事は御座りませ
んが、唯一ただ一人の孫めが未だ年弱の十一では、私も死ぬに死なれませんが御座ります。はい、お蔭様を以ちま
して孫め迄助ります。これ、奥方様に能う御禮を申上げないか、お祖父ぢいさんの分ぶんまで申上げるのだぞ。」

老人は涙を流して喜んだ。

扱此の老人は村の記録きろくと謂るゝほど、土地に有つた事は一から十まで知つて居るのである。替又は心中に、
圓職生まるせうの一件も此の老人は必ず知悉ちしつするであらうから、追つては之を調べるならば、如何なる活證いさしやうこ據を得
んも知れず、と大に喜んで家に還つた。

支關を入ると駈出かけでて来たのが不破瀨である。

不「何處へお越で御座りましたが、方々へお迎を出しましたので御座ります。」

替「何ぞ急用ですか。」

不「是非御覽に入れまする物が御座りますので、一刻も早くと存じまして。」

替「何ですか。」

不「先づ御居間へお出遊ばしまして。」

何事とも知らねど、不破瀨の切きりに勇ゆうんで居るのを見れば、替又は決して悪い心地の爲るのではなかつた。彼
と共に居間に入れば、燈あかしの下に一通の書狀が置いて在る。

不「那の御書面で御座ります。」

替「はあ、何處から。」

と言ひながら手に取上げれば、希めづしくも西伯利亞から替又は宛てた書信たよりである。彼はなかく嬉しとよりは、
寧ろ可憐おそろしきやうにて胸が轟とどろいた。「一ひとび手に爲し文を又置いて、其の表書うはがきを熟と眺めて居ると、

不「私も是でやうく安心を致しまして御座ります。後程又御書信の模様を伺ひに出ますので。」
 不破瀬は獨り欣々として出て行つた。蕾又は又其の文を取上げたが、進んで開封する勇は無いのである。伯爵は何と申うて今更己に宛てて書信を爲たのであるか。若し書信を爲る必要が有ると爲たならば、其事は善か、悪か。彼は己を仇の如く念へる夫の文を受取る事を望まざるのであつた。けれども封を切つて、恐るく讀下せば、案じたやうなものではなくて、繪遠の子の急病を救ひくれたる厚志を謝し、次いで不斷に心着けて金品を送らるゝ爲に、幽囚の苦の幾分を忘るゝ、又不在中の家政整理に就ては一方ならず盡瘁せらるゝ趣、段々忝なく存する。因つて茲に感謝の誠意を表すと書いたのである。
 固より彼を憎み、疎んじ、恨み、罵る文面でこそなかつたが、其の感謝の誠意を表すと云ふも只形式的一應の挨拶、心にもあらぬ他人行儀を書聯ねたのである。蕾又は覺えず其文を卓子の上に投出した。
 十五箇月間の此苦勞は誰が爲にしたのであるか。尋常一樣ならざる我身の上の十五箇月の苦勞は、實に他の新婦の半生の爲す所にも過るのである。如何に茲に在らぬ夫なれば我が爲す所を目に暗ぬとて、人を恨むにも程こそ有れ、兎毛の露ばかりも真心の籠らぬ此文は何事ぞや。簡程までに盡せども、蕾又は誠は尙足ら

ざるかと、身を顛はせて忍音の涙を搾つた。

扱之に返事を送らねばならぬ、何と書いたものであらう。思ふまゝ此恨を言はうか、可憐く其の獨を守らうか、但は此心の底を明さうか、と取つ舍つ思案に昏るゝ折から不破瀬は入つて來た。

不「如何で御座りましたか、御文の参ります所を見ますれば、殿様の御機嫌もいよくお直り遊ばしましたので御座りませう。」

蕾「いえ、未だ御心は解けませんのです。」

不「はッ。然やうでは如何様な御文で？」

蕾「いえ、何有、それは、私へ御禮を有仰つてお寄越し遊ばしたのでは有りませうけれど……」
 不「いや、然やうなればもうお疑ひ遊ばします所は御座りません、はッ。恚して御文をお遣はしに相成るのは、もう何よりの證據で、殿様には眞底から其の思召が御座りませんでは、義理にも何か作ると云ふ御性質では被居れません。私は存じて居りますが、全體吳城家には其の御氣風が代々お有り遊ばしまするので、實に先殿様などは別して其れがお劇しい方で御座りましたが、御當主様も猶且幾分か其の何が

御座りますので御座りますから、もう簡様にお文の参ります以上は、はッ、私がお請合を致します。「然う聞けば蓄又も嬉しくない事は無いので、」

蓄「それでは殿様はお喜び遊ばして居られるのであらうか。」

不「勿論の事で御座ります。未だ先の長い事で御座りますゆゑ、其内には段々と好い御便も御座りませう。何に致せ、誠に結構な儀で御座ります。いや結構と申しますれば、近々に皇室に御慶事が御座りまするやうな噂で、然やう致せば、是非特赦令が出るに申す事に御座りますが、お聞及ば御座りませんか。」

蓄「いえ、一向聞きませんが、然云ふ噂が有りますか。」

不「はッ。専ら噂を致します。特赦令へ出ますれば、殿様にも定めて其の御沙汰にお預り遊ばす事で御座りませう。ええ、もう私は今から樂に致して居ります。」

特赦令と聞いた蓄又の胸の中は、嬉しくもあり、又可思くもありで、伯爵が放免されて還らるゝのは、固より賀すべき事ではあるが、扱己は如何に成るのであらう。善くも留守せし妻として愛せらるゝであらうか、將

た家を奪へる敵として憎まるゝのであらうか。彼は己の飽くまで夫を愛するに引易へて、伯爵の飽くまで己を愛せざるを知るのであつたから、捨て夫の還り来る日は、則ち己が悲劇の場に登る時であると想ふほど、獨り心を傷むるのである。

彼は此夕寝られぬままに筆を取つて、西伯利亞への返事を認めた、其の文面は、眞率に意中を披いて、未だ曾て告げざりし所を始て具に言送つたのである。

翌日は此の夫の文の末に「多謝」の二字を書加へて之を繪連の許へ送つた。繪連からは別紙に、此様な嬉しい事は無いと云ふ旨を簡單に書いて、送還して來たのである。

扱彼の毒害に遭ひし利喜三も何の障無く日に増克復して、蓄又が前後四回の往診を要せしのみで、然ばかり事の大なりしにも似ず、極めて小く納つた。

十日ほど経つ内に雪は融け、道は固つて、日和は續く。波斯野夫人は例の白馬の車を驅つて蓄又を訪問した。段々の話の末に、

波「先達而は御妹御様のお宅では取だ事で御座りましたな。」

蕾「何で御座いますか。」

波「御承知では被在おらつしや いませんので？ 先頃那の利喜三様が急病で既にお殆あよな かつたので御座いますよ。御存ごぞんじ 御座ごぞ いませんですか。」

蕾「其事は存じて居ります。」

波「何で御座いますか、人の噂では毒を上らせられたとか申すでは御座いませんか。」

蕾「然やうで御座いますか。」

波「何か食あがり物に毒が入れて在つたとかで、本にお可哀あらい なのは利喜三様で御座います。」

蕾「然やうな事を人が申して居りますので御座いますか。」

波「はい、然云ふ評判で御座います。那の方は誠にお氣の毒で、誰一人御交際を致す者も無く、又御本人も他ひと に御面會をなさらんもので御座いますから、自おのと色々な噂を立てるので御座います。」

蕾「で、誰が那の子供衆こどもぐら に毒などを飲ませたと申すので御座いますか。」

波「大方御存でも御座いませうが、お配耦つれあひ の圓磯生まろそよま 様が御歿おなくなり になつたに就ても、まあ可厭いや な噂が有るので御

座います。

そこへ又今度の事で御座いますから、依樣繪蓮様のやうに、皆申して居りますので。」

蕾「然して毒を飲せた子供衆が、奈何致して助つたので御座いませう。」

波「それは子供衆の體が丈夫であつたからで御座いませう。」

蕾「然やうなれば私が悉くはいお話を致しませう。實は繪蓮様は子供衆が急病だと有仰おつしや つて、夜中に私の處へ駈付けてお出になつたので御座います。私は父が陸軍の醫官で御座いましたので、少々は其道は習ひまして、應急の手宛てあてを致すぐらゐの事は心得て居りますので、それから直に繪蓮様と御一緒に參つて、薬を上げたので御座います。」

波斯野夫人は之を聞いて啞然あせんとした。

波「それでは貴方が、あの、其時御療治を遊ばしたのです？」

蕾「然やうで御座います。で、繪蓮様も大相お喜で、其事を西伯利亞の方へお知せになりましたものですから、昨日那方あちらからわざく禮狀れいじやうが参りましたやうな譯で、」

波「あの、伯爵様から那方へ御文が？」

と夫人は更に、啞然たるのであつた。彼は此の訪問中に計らざる二件の驚くべき新聞を得て、人にも傳へまほしく勿々、此を辭し去つた。

雷又は此日の夕方に彼の貧きリウマチズム患者を見舞つて、間二日行かずに居たのであるが、三日目の朝彼に孫娘が息迫き迎に來て、老人の容體が急變したと告るので、取る物も取敢へず之に趣いた。患者は僅の間に見遠へるばかり衰弱して、既に氣息も奄々たる様子であつた。枕頭に雷又の座するのを見て、孫娘に言付けて、室の戸を閉ぢ、窓を鎖切らせで、

老「お前も少の間那方へ行つてお在、而して人の來ないやうに番を爲て居なよ。」

娘が出て行くと、老人は其の病室けたる目に熱と雷又の顔を眺めて、暫くは苦しみ息を噓いて居たが、老「奥方様、私は是非貴方様に申上げたいことが御座りまするので、是は貴方様より外には誰にも話されません秘密の事件で御座ります。然ぞかとお様にて御迷惑では御座りませうが、どうぞ最少々此方へお寄り下さいますて。」

人の將に死んとするや、其の言ふこと善し、彼は此の病苦を推して、知何なる秘密を語らんと爲るにやあらん、と雷又は幾分か可恐きやうにも覺えつゝ、椅子を進めて患者の身近に寄つた。

老「此の事件が秘密に成つて居ります爲に、無實の罪を被せられて、とんだ難儀を遊ばしてお在の方が有るので御座ります。私は疾から何も彼も様子は知つて居るので御座ります。其を話しました所が村中に誰も取擧げてくれる者は無し、罷り間違へば、随分命を取られかねませんゆゑ、實は今日まで口を拭つて居りました。が、那方様なれば此事を申上げて、村に居ります悪人を滅して載くのは目前と、はい、箇様に存じまして、わざと御運を願ひましたので御座ります。」

雷又は愈よ恐れ、愈よ怪み、覺えず固睡を嚙んで耳欝つるのであつた。

老「定めて御存じでも被在いませうが、那方様の御妹様に當る圓磯生様の奥様は旦那様を殺害あそばしたと云ふ村中の噂で御座りますが、あれは全く虚妄で御座ります。はい、繪蓮様はお可哀さうに濡衣を着せられて御座るので、其の下手人は外に在るので御座ります。」

老「冬の半の事で御座りましたが、其年は何年にも無い殿い寒さで、焚物は例年の五層倍も要るやうな譯、其上に又其の寒さが長く續きましたから、貧乏人は甚麽に困りましたか知れませんか。貯へて置きました焚木は使ひ切つて了りましたので、或晩此の村端の莫斯科街道の森へ枯枝を拾ひに私が参つたので御座りまする。」

患者は甚しく喘いで、言を繼ぎ得ぬのである。雷又は枕頭に在る水を取つて彼に飲ませた。

雷「少しお休みなさい。」

老「はい。宵から参つて咩と云ふほど拾ひ聚めて、其を桶に積みましたが、雪は深し、寒さは烈し、手足は切れて落ちさうなので御座りますから、えつちら、おつちら曳張つて、些の五六間も出たかと思ひます頃、前面から人の來る様子、誰か此邊の者が通るのであらうと存じましたが、何と無く様子が怪う御座りましたから、私は木の陰に隠れて居りますと、段々此方へ寄つて参りますので、窺と視ますと、あの諸座なので御座りまする。」

はてな、今頃何爲に諸座が這處處へ來たのか知らん、而して彷徨と何か搜して居るやうな鹽梅。日頃から性

の善くない那奴の事で御座りますから、是は又碌な事を爲るのではなからう、と猶忍んで居りまするとな、旋ての事に車の音が致しまして、森の中へ馬車を引込んで参つた者が御座りました。」

益す出で益す奇なる患者の物語に、雷又は彼と俱に其身を雪の木陰に潜めて、親く賭るが如く覺ゆる餘、今更に息を凝し、目を瞪つて、如何に〜と焦心に待つのである。然るに老人は手眞似をして又水を求むるので、雷又は親切に一口の露を與へた。

老「然やう致しますると、其の馬車は私の忍んで居ります鼻の先に駐りましたが、其時の可憐さ——と申すものは、いや、もうお話にも成りは致しませぬ。」

馭者と諸座と二人懸りまして其の馬車から下した者は、何かと思ひましたら全で死んだも同然に正體の無い大の男。其が貴方様、見ると繪蓮様の旦那様なので御座りまする。」

雷又は聞くさへに蓮跳りて濁を覺え彼の水を取つて、吭を濕したのである。

老「然し、其時は未だ確に呼吸が御座つたので、何ぞ催眠薬でも奴等は使つたので御座りませうか、すうすうと肝を掻いてお在のやうで御座りました。其晩は誠に好い月で御座りましたから、何から何まで手に取る

やうに見えましたが、其の馭者は驚利と申して、其頃圓磯生様に居りました奴で御座ります。只今では波斯野夫人の馭者を致して居りますので、で、兩箇の奴は誰も聞いて居る者は無いと思つて、大聲で話を致しまするで能く聞えました。馬車が着きました時に、諸座の申しますにはお前に百ルウブル遣るから手傳を爲る。若し否だと言ふなら、お前も一緒に殺して丁にはや成らねえが奈何だ。驚利は駭きまして、馬車の中の圓磯生様をお起し申しましたので御座ります。然う致すと、諸座が申すには、旦那の目が覺されるものなら覺して見ろ、那の珈琲を飲んだからには、百年経つたつて目の覺事は無えのだ。然うやつて今駢を掻いて居るけれど、それで段々落入るのだ。實はもう死んで居るのだ。お前に手傳へと言ふのは、旦那を殺せと云ふのぢやねえ、もう死んで居るのだから、片附ける手傳さへ爲れば可いのだ。譯の無い事だから俺の言ふ事を聴け、然う爲りや直に百ルウブルになるのだ、と賺したり、嚇したり致して、到頭まる納得させましたので御座ります。それから暫く又話を致して居りましたが、旋て二人して圓磯生様を擔ぎ出して、他の方へ持つて参りました。」

管「お前さんは黙つて其を見てお在のかい。」

老「黙つて見て居たい事は無いので御座りますが、何を申すも他は兩箇で屈竟の若い者、此方はこの年寄單身で御座りまするし、殊には、今申します通り、圓磯生様は最早死んで御座らしやるので、出るには出られず、實は頭へながら見て居りましたで御座りまする。」

直に二人は復つて参りましたから、圓磯生様の御軀を何處に奈何したのであらうと思ひまして、窺と覗いて他の方を見ますると、何でも雪の上へ轉して在るので御座ります。兩箇は馬車の中へ入つて彼此一時間ほど待つて居りましたらうか、諸座が、もう大概可からうと申しまして、又兩箇が行つて、圓磯生様を擔いで参つて、而して馬車の中へお入れ申したので、其時にはもう駢の聲もなさらず全く息は絶えてお在のやうに御座りました。」

管「それでは、何ですな、圓磯生様は死んでお歸りに成つたのですな。」

老「はい、もう諸座の家で何ぞ飲されなすつた時に、はや事切れてお在なされたので御座りませう。」

管「して見ると、諸座夫婦の者が毒殺を爲て置いて、而して其罪を繪蓮様に塗付けた譯なのですな。」

老「はい、其に相違は御座りませんとも。那の諸座と云ふ奴は、吾が弟を殺した位の悪黨で御座りまするか

寒牡丹

ら、油断の成る奴では御座りませぬ。」
一部始終を聞訖つた雷又は稍口氣を嚴にして、

雷「何爲お前さんは其趣を直に翌日にも告訴を爲なかつたのです。潔白な繪蓮様が悪名を貰せられて、那しに御難儀をなすつてお在のを、高みで見物して居と云ふのは不埒ではありませんか。其も知らぬなら是非も有りません、現に其場を見て居ながら、今日まで口を拭つて居るとは、其手傳を爲たも同罪です。何爲直に告訴をなさいませんでした。」

其の惱める病よりも猶忍ぶに苦しみ悲悔の色は、忽ち患者の面に上るのであつた。

老「扱其處で御座りまする、兩箇の奴が馬車で歸つて行くのを待つて、私も直に出掛けましたので御座りまするが、長い問雪の中に屈んで居りましたので、悉皆寒さに中りまして、宅に歸りますると、もう其限動く事も奈何する事も出来ません始末で、四日許りと申すもの横に成つたまま御座りました。究竟其が此の病氣の因なので御座りまして。それで、私も訴へやうか、奈何致さうかと考へましたのは、只今申上げまする通の病氣で段々日數は經ちまするし、現に其場を見たとは申すものゝ、是ぞと云ふ證據が有るではなし、

寒牡丹

罷り間違つて此の裁判が奴等の勝と成りました日には、何日か私は殺されるに極つて居りまする。圓磯生様には重々お氣の毒とは存じながら、そのまゝ一月經ち、二月經ち、私は到頭何も知らぬ顔で居りますれば、有らう事か、有るまい事か、あれは繪蓮様が毒害を成つたのだ、と云ふ途方も無い世間の取沙汰。嗚呼、勿體もない、家來の爲に且那樣をお殺されなされた上、那樣無實の罪までお被せられなされる繪蓮様の御心中は其麼であらう、と私はお可傷く、奈何も慚も成りませんで御座りましたが、猶且己の意氣地無から思切つて告訴も致さず、はい仰せの通、私も謂はば奴等の味方を爲たも同然の大罪を犯しましたので御座りまする。

私も此の病氣ではもう助りません、私が亡い後には、誰一人諸座や鴛利の悪事を知る者無く、那の善い御方の繪蓮様が夫殺の悪人に成つてお了ひ遊ばすのが、餘り御不便に存じまして、又私が其を知りつゝ隠して居りましたばかりに、那して悪人は榮え、善人のお方が御難儀を遊ばすのだと思ひますると、其が障になりまして、奈何も心易く目が眩られませんので、此の日頃段々の御厚恩を戴きまする、私の爲には誰有い知識の貴方様へ此の懺悔を致しまする。はい、是で氣分も清々と致し、快く往生が出来ますで御座ります

る。」

雷「好く話して下さつた。お前さんの病氣も決して今死ぬの、何のと云ふ氣遣は無いのですから、私に委せて氣長に療治をなさい。」

雷又は藥を與へて、暫く看護して居る間に、患者は穩に眼を催し初めたので、彼の孫娘に後の手宛を懇に言置いて此家を出たのである。

途を急いで來ると、少く距て繪蓮が利喜三を伴れて遊歩から歸る。後、姿を見掛けたので、雷又は畑を横截つて、跡を追ひながら連に呼んだ。今誰有つて村中に己を見返る者も無きに、白晝大道を憚らず我を呼ぶは何人ならん、と繪蓮は歩を止めて、やをら頭を回せば、雷又は日傘を擎して、少女などのやうに然も氣輕に走つて來るのである。

兩箇は手を握つて笑を交した。利喜三は珍しがつて叔母様くと絡み付く。其子を中間に傘を並ぶる後影は喉道を悠々と行くのであつた。

蓮「何地へお出で御座いました。」

雷「些と其處まで病人を見舞に。」

蓮「いつもまあ御奇特な事で御座います。」

雷「今日私は好い事を聞きましたので、遠からず貴方のお體を潔白な者に致して御覽に入れます。」
繪蓮は忽ち色を變へた。

「何と有仰います！ そんなら貴方は那事に就て何ぞお聞き遊ばしましたので御座いますか。」

雷「はい。貴方も御存じの無い、それはもう悉しい事を聞込みました。犯罪者の名も、犯罪の場處も、又現に其を暗たと申す證人まで。」

繪蓮は聞いて喜ぶと謂ふよりは驚き、駭くと謂ふよりは呆るゝのであつた。

雷「何處からお聞き遊ばしました。」

其聲は頗つて居た。

雷「其は何れお話を致しますが、まあ貴方もお喜び遊ばしませし。」

蓮「難有う存じます。然う致して私の嫌疑が解け、夫の難が討たれましたらば、私は其場で死にましても憾は

寒牡丹

御座いません。此上とも何分貴方の御力添を願ひまする。」

雷「屹とお受合ひ申しましたから、御安心なすつて被在いませう。」

蓮「重ねく御恩に預りまして、何とお禮の申上げやうも御座りません。兄も然ぞかし喜びまして、貴方の御心が解りますで御座いませう。」

雷又は忽ち悄然として頭を垂れたが、利喜三の嬉々として兩箇の前後を走り回り、籠を放れし鳥の如く勇み悦ぶのを見て、

雷「利喜三様は大相御元氣で御座いますこと、お子供衆は何でも是でなくては可けません。」

蓮「いええ、誠に暴れ者で困り切るので御座いますが、那以來滅多に戶外へ出しませんもので、今日は珍しくてならないので御座います。」

雷「貴方がお伴れ遊ばして、日に一度づつは御運動にお出掛け遊ばすやうになさいます。然も御座いませんと、お子供衆の爲に不健康で御座いますよ。」

蓮「私も然う致したいと存じますのですが、外へ出まするのは、敵の中に行くやうなもので御座いますから、

好い心持が致しませんので、ついく億切に成りまして。あれ、些と御覽あそばせ、那處を通る男が立住つて熱と視て居るで御座いませう。那の通で、私の姿さへ見れば、無遠慮に眺めて、二人なれば呷く、三人なれば悪口を吐くと云ふやうな譯で、私は其が辛さに門の外へも出かねるので御座います。本に情無い身の上で、貴方お察し下さいませう。」

雷「其のお辛いのも最少時の事で、旋てお逢ひなさる者が皆帽子を脱るやうに成りまする。」

蓮「然うなりましたらば、甚々に好い心持で御座いませう。」

打語ひつゝ行くほどに、はや兩箇の別るべき道は間近に逼つたので、雷又は忙しく話頭を轉じて、

雷「貴方に、あの、雫利とか申す馭者が居りましたで御座いますか。」

蓮「はい、居りました。始終、良人の馭者を致して居りましたので。」

雷「私は其者を召使はうと思ふので御座いますが………」

言ひも終らぬに繪蓮は覺えず聲を放つた。

寒牡丹

蓮「那の雫利を！」

寒牡丹

雷「然やうで。唯今では波斯野夫人の所に居りますさうで御座いますね。」
蓮「何で貴方は那麽者を？」

雷又は彼の驚くを見て軽く笑を浮べた。兩箇は今恰も岐路わかれみちに立つて居るので、

雷「悉くはしいお話はお近い内に、利喜三様然やうならば。」

と彼は兒の手を握つて可憫なつかしげに振つた。其母は又彼の手を把とつて、更に可憫なつかしげに握り緊にぎむるのであつた。

(十五)

一日吳城伯爵夫人は始て波斯野夫人を其家に訪うたのであるが、彼は夢ではないかと驚き感ふばかりに喜を極めた。

元を糺せば非職軍醫の娘の雷又であるが、今は堂々たる吳城家の伯爵夫人、而も篤行とくかうと才識さいしきとを以て一郷の輿望よぼうを負へる其の貴人の來訪を受るのは、領内にある者の無上の光榮と爲する所である。「好うこそお越し下さいました。」

と波斯野夫人は履げきを倒さかしまにして遊むかぶる有様であつた。

波「何ぞ格別の御款待おもてなしを致しませんければ相成りませんので御座いますが、何分避爾にはかの御越おこしで、手前に用意も御座いませぬゆゑ、失禮のところは幾重にも御詫を申上げます。」

雷「いゝえ、決して然やうな御心配を遊あそばしませんやうに。今日は少々伺ひたい事が御座いまして上りました。」

波「何なりとお聞け下さいまし。」

先づ始は四方山よもやまの物語から起して、馬の談はなしに及んだ。波斯野夫人は至つて馬好うまずきで、乗馬を多く持つて居るから、早速に伯爵夫人を厩うまやに案内した。彼此と馬を見ながら話して居る間に、雷又は其に控へる取者馬丁ぎしやばていの容貌ようぼうに注目ちゅうもくしたのであるが、中に一人勝すぐれて兇險きやうけんの相を帯びたる取者を見出した。

雷「那の者は何と申します。」

波「他あは驚利と申して、元は圓磯生様に御奉公致して居りましたので、
恚いら言いひつゝ兩箇ふたりは厩うまやの前を去つた。」

寒牡丹

波「誠に生來しやうらいが宜う御座いませんで、誰も那の男とは仲が悪いので御座います、私なども大きに持餘して居ります。」

蕾「然やうで御座いますか。實は私の馭者は聖セントピータスブルグ彼得堡から連れて参りましたので、土地は不案内なり、それに、齡としが少し若過わかすぎまして、疾とつから一人適當なのが有らば欲ほしいと存じて居るので御座いますが、那者をお譲り下さる譯には参りませんか。」

波「あれでお役に立ちます事ならば、御隨意にお召連下さいます。其代りお断り申上げて置きますが、性質の宜からん奴で御座いますから、随分お使ひ難にくう御座います。」

蕾「其點は含んで居ります。然やうならば私へお遣し下さいます。」

波「唯今申聞けます。」

兩箇は奥庭に入つて、其處へ驚利を呼寄せて、右の旨を言渡した。

蕾「お前が来ておくれなら、月給は二十ルウブル上げませう。」

驚「はい、御主人様さへ御承知で御座りますれば、私は如何様とも。」

(十六)

彼のリウマチズム患者の老人は其姓を近小野ちかおのと云ふのであつたが、殆ど死なるとばかり危篤なりし病勢も幸に日一日と薄らいで、夏四週間の後には左にも右にも斯世の者と成つたのである。彼は此の餘命を繼ぐを得て、本復ほんよくの上は老後の思出に、後世安樂の爲サンセルジの靈場れいぢやうに詣でんことを發願はつぐわんした。因て蕾又に向つても始終此事を口にして、杖に縋すがつてなりとも獨り歩まるやうに成り次第發足したいと、はや病の癒るのが待遠で堪へられぬのである。蕾又は或時彼を慰めて、

「サンセルジ詣まよひならば私が爲せて上げる。遠方の事ではあるし、病氣擧句の軀ひやうきあひくで歩いて行くのは無理だから、いよく行くとならば、車でお詣まよひの出来るやうに爲て上げる。」

近小野親仁は之を聞くと、寢臺から轉ころもげ落ちんばかりに喜んだのである。而して兩眼に涙を浮べて、

寒牡丹

老「はいく、お蔭様を以ちまして危い命を助りました上に、サンセルジ詰まで爲せて遣つて下さりますとは、はい、冥加に餘りました親仁めで御座ります。氣では何の様に念ひましても、最早箇様に老い朽ちましまして、何の御役にも立ちますのでは御座りませんが、相當の御用を勤めまして、はい、屹度御恩報は仕りまする。」

蕾「お前さんが良くなつたら、頼みたい事もありますから。」

老「はいく、もう其は何なりとも仰せ付りたう存じまする。」

蕾「就ては、後來の養生が大事なので少し體の具合が良くなると、誰も輕本を遣りたがるもので、それから疾返したら爲方が無い。今が大切の處なのに、此に居ては手宛が達さかねるし、第一、地は濕ける、四邊は不潔で、極養生の爲に成らんから、私の邸に一間空いある部屋が有るから、其へお引越しなさい。」
老人も然までに恩を被るのは理由なしと、再三再四辭退したのであるが、蕾又が強ひて勸むるので、遂に其意に従ふ事に成つた。

翌日老人は吳城家の一間に引取れて、手宛萬端殘る方無く、午前二回、午後二回、夜中に二回と、怠

らず蕾又が見舞つて、看護に手を盡すのであつた。此に二週間許り過す間に老人は益々克復して漸く起居の自在を得るまでに成つた。

或朝伯爵夫人は來診の次手に、

蕾「お前さん 往日談の有つた驚利が邸に來て居るのを知つてお在だらうね。」

老「はい、存じて居りまする。」

蕾「それでは今私が此へ呼ぶから、お前さんは驚利の前で 悉皆那の談を爲て下さい。」

老「はい、何の話で御座りますか。」

蕾「森の中でお前さんの嗜た話。」

老「那の話を驚利の前で、奥方様、そればかりは奈何ぞ、奈何ぞお免し遊ばして下さい。」

老人は恰も活膽などを抜れんと爲るを慄るやうに、此を先途と、ひらさら詫びる。

蕾「いえ、少も氣遣する事は無いので唯那だけの話をお爲なれば可いのですから。決してお前さんに迷惑の懸るやうな事は爲ません、私が附いて居るから。」

寒牡丹

老「では御座りませうか、那の話を致します事だけは、はい、どうぞ御免下さいませうやうに。」
 輒く動くまじき老人の氣色、雷又は不興の體で、姑く唇を結んで居た。

雷「お前さんが言はんなら、それで宜い。サンセルジへ參詣も爲せまいし、以來はお前さんの世話も爲まいから、然うお思ひなさい。第一、此間お前さんは何とお言ひだ。其時に私が告訴しなかつたばかりに、繪蓮様のやうな善いお方に那云ふ悪名を貢せて、見るもお可傷い憂き目にお遣せ申すのだ。知つて言はないのは彼等と同罪ゆる、今日と云ふ今日は懺悔を爲る、と立派にお前さんはお言ひではなかつたか。其の無實の罪を被てお在の繪蓮様をお助け申したいから、鶯利の前で話をしてくれるやうにと私も頼むので、肝腎のお前さんが證人に成つておくれでなかつたら、奈何して繪蓮様の明が立つのです。繪蓮様の明が立たなかつたら、何處にお前さんの懺悔の効が有るのです。」

能く考へて御覽なさい、お前さんの一言で繪蓮様の御難儀が助かるのですよ。其を奈何あつても言はんと言ふのは、自分に痛くも痒くもなければ、他は奈何でも管はん、と云ふお前さんの了簡なのです。然した心掛では縦んばサンセルジ詣を爲た所で、逆も天國へ往くことは出来ません。其のサンセルジ詣も爲せてあげ

る約束では有りましたが、無駄な事だから止ませう。お前さんも此世で人を助けなかつたから、彼世へ往つて神様に助けられんのは當然の事です。然う覺悟なさい。」

生きて一たびサンセルジの靈場を拜せざる者は、死して必ず地獄に墮つ、と云ふのが彼等の等しく信仰する所であるから、老人は一も二も無く屈服して、雷又は命の儘ならん事を誓つたのである。因て、雷又は手始として、此の老人と鶯利とが相近くやうにと計つて、稍七日ほど経る間に、鶯利の折節彼の部屋に出入るのを認めたので、はや時分は好しと、或日兩箇の物語り居る所へ入つて、先づ何氣無き體に言を掛けて、扱弗と思付いたやうに、

雷「鶯利、お前は以前因機生様に勤めて居たさうだが、それは何日頃の事かね。」

疵有つ脚の鶯利は有繋に色を動したが、

鶯「然やうで御座います、彼是四年許前に相成ります。」

雷「然うすると、且那樣の御存生中だね。」

鶯「は。は。」

寒牡丹

雷「おゝ、然うく、御不幸の有つた日には聞説お前が御供をして居たのだつたねえ。」
 驚「はゝ。」

彼は彌々顔色を變じて、可思しげに他を顧みるのであつた。

雷「では、旦那様は何處でお殺り遊ばしたか、知つてお在だらう。」

驚「何處でと有仰いますと？」

雷「息をお引取になつたのは何處だと聞くのだ。」

驚「それは何方で御座いましたやら、お宅に還りまして、始て氣が着きましたので御座います。」

雷「途中で何もお話などはなさらなかつたかい、旦那様は。」

驚「始終何で御座います、旦那様はお話などをなさる事は御座いませんでした。」

雷「先方を出て還る迄に何位時間が掛つたのかねえ。」

驚「其は暇と覺えませんでした。御座いました。」

雷「それでは他を何時頃に出たのだね。」

驚「彼此晩の六時時分でもあつたらうかと存じます。」

雷「六時に出たと爲て、家へ着いたのが十時半だと言ふのだね、然すると、僅一里許の路に四時間半も懸つたのかい。」

雷又は熱と馭者の顔を噴めた。

驚「些と諸座の所へお立寄になりました。」

雷「其外には何處へも寄道は爲なかつたかい。」

段々に問詰めらるゝ驚利ははや大事露顯の端緒、と毫も安き心は無く、吐く息さへも亂るゝのであつた。

傍に聴き居る老人は、我が身の上にあらねど、如何に成行く事ならん、と是も妙からず胸を騒がせて、自ら身の疎むやうに覺えつゝ控へて居た。

驚「はい、別に何處へも廻りは致しません。」

雷「屹と然うかね。」

驚「はゝ。」

寒牡丹

寒 牡 丹

鶯「お前は其晩此の老人を見掛けなかつたかい。いや、お前の方では知るまいが、此人は森の中でお前達の爲る事を悉皆見て居たのだよ、話も悉皆聞いたのだよ。」

又を揮ふが如く鶯の眼は鋭き光を放つて老人を一瞥した。然れども、其は憎しとばかり彼を見たのではなくて、吾を忘れて形相の變るまでに驚き懼れたのでもあつた。

鶯「此の親仁が那樣事を申したので御座いますか。いや、親仁、手前は俺に何の遺恨が有つて、取でもねえ、まあ、那樣事を言やがるのだ。さあ、もう一遍此で言つて見ろ、儼は活しちや置かねえから。」

心弱く怯けて居た老人も、恚う言れては黙つて引込んで居らるゝのではない。

老「何だぞ！ もう一遍言つたら活しちや置かねえ？ 長生をすれば可笑な事を聞くもののだらう。俺より

はお前の笠の蓋が飛ばねえやうに氣を着けなせえよ。」

鶯「何、何、何だぞ！」

老「俺は、那晩森へ燃料を拾ひに行つて、お前方の悪事を残らず見て居たのだ。諸座が待つて居る處へお前が馬車を率いて來て、正體も無い回磯生の旦那様を兩箇が肩を下して、雪の中へ放り出して置いた

のは、那は何だ。悉く言へなら、未だ幾多でも悉く言つて聞かせやうが、是だけ言つたら澤山だらう。」

其夜の事を知る者は、梢の雪か、空の月、目の有る者は馬の外に、誰も居るのではなかつたに、親仁の之

を知るからは、正しく現場を見たのであらう。此者が證人と成り、伯爵夫人が表に立つて告訴された日には、逆も道るゝ路は無いが………と鶯は窮命の淵に立つのであつた。其時鶯又は言を和けて、

鶯「鶯利、然し、お前は下手人ではないと云ふ事は判つて居るのだが、罪と謂つても輕い。其を飽くまで隠して居れば、主人を毒殺した大悪人の諸座と同罪に成つて、其の處刑を受けなければならんよ。

此に恚云ふ證人が出たからには、甚麼にしても蔽みおほせる事は克はんのだから、潔く白狀して、お前も罪の輕くなつた方が可いではないか。お前の方で明に恚々だと言つて了へば、私の方でも出来る丈盡力して次第に依つたらば随分無罪放免にも成らうと考へる。」

鶯利は屹と思案して、

鶯「然う何も彼も御存じの上は、打覆けて申して了ひます、私は實の處、諸座の嬖子が何を飲せ申したか、那樣事は一向知らないで御座います。那の森の中を抜けて歸らうと致しますと、諸座が先廻をして

寒牡丹

待つて居りまして、馬車の前へ來まして、且那樣を下せと言ふので御座います。而して雪の中へ放り出して置けと申しますから、私は那樣事は出來ないと申しますと、突如ピストルを出して、言ふ事を聽かなげりや殺して丁ふ、と恚ふ申します。私も濟まない事とは思ひましたけれど、否だと言へば一撃に遣られるので御座いますから、餘義無く應と申しましたので。それから且那樣をお出し申しますと、酷く酔つてからにお寐みなすつてお出のやうで御座いましたが、一時間ばかり雪の上へ臥してお置き申す内に、身動一つなさらずに、そのまゝ凍死を遊ばしたので御座います。なあ、爺さん、其に相違無になあ。」

老「まあ、餘り遠無いけれど、少し違つて居るやうだのう。」

驚「何！ 何處が違つて居る。」

老「お前は百ルウブル貰つたらう。」

驚「うむ、然う、あの時那樣約束を爲たつて。」

老「後で貰つた事は貰つた。」

老「それぢや同じ事だ。」

驚「然うだ、同じ事は同じ事だ。」

老「何を言つて居るのだ。」

管又は敢て口を開かず、端然として驚利に打向ふのであつたが、彼は自ら其威に壓るゝ心地して、

驚「へい、奥様、恚う白狀致しましたからには、何分お慈悲を願ひます。全く以ちまして百ルウブルの金なんぞに目が味れた譯でも御座いませんで、つい、其の、命が惜さに、諸座の手傳を致しましたので、決して那奴と始から共謀に成つて遣つた事ではないので御座いますから、實は、へい、疾から後悔して居るので御座います。」

管「本來なれば、お主の爲には血を流しても争はなければ成らんのを、第一命が惜さに悪事に與するばかりでなく、金を貰ふと云ふのは怪しからん事で、お前の罪もなかく救難いのであるが、其通り前非を悔いて白狀した廉に免じて、私は何も言ふまい。けれども、お前は是から其筋へ自首して出なければ成りませんよ。」

寒牡丹

寒 牡 丹

驚利は忽ち蒼くなつて頭へた。

驚「それぢや私は依様西伯利亞に送られるので御座いますか。」

雷「いや、それは私が甚麼にしても特赦を願つて上げるから、左に右潔く自首するのです。」

驚「へい、畏りました。どうぞ、まあ奥様の宜いやうにお指圖を願ひます。唯今で御座いますから申上げますが、其の以來私は實に可厭な心持で、每晚陸に寐られませぬので御座います。お陸様で今日から氣が清々致しまして、へい、壽命が延びましたやうで御座います。」

雷「神は決して懺悔した者を罰しません。其代圓磯生の奥様の爲にお前は此事に就て十分に働かなければなりませんよ。」

驚「へい、屹度一生懸命に働きます。」

雷「はあ、宜い。今日はもう其で用はないから那方へお出で。」

驚利の去つた跡に、雷又もやをら起たんと爲れば、

老「奥方様、どうぞ私をサンセルジへお詣にお遣りなすつて下さいまし。」

雷「遣つてあげるから安心なさい。」

(十七)

驚利は其性善を好む者でなかつたが、又決して殺人の大罪を犯して懼れざるほどの兇漢ではないので、一旦は諸座の脅迫に遣つて、無道の悪事に與したやうなものゝ、彼は百ルウブルの爲に主を害する事を思はぬのであつたから、其惡を悔い、罪を懼るゝも速に、樂まざる日と寐ねざる夜とは、此の幾年の間絶えず彼を苦めたのである。

然るに、計らずも雷又の糾問する所と爲つて、舊惡終に露顯の其時こそ、彼の森の中にピストルを差付けられし可恐さに、優るとも劣るのではなかつたが、扱白狀して了つた後の清爽として心地は、世間に況ふべきもの有りとも覺えぬばかり。尙伯爵夫人は特赦を願つて、無罪放免に爲んと云ふのであるから、彼は速に天地廣く、山も野面も見もの皆樂く、殆ど夢むる如き想で獨り村端の川縁を彷徨行いて居た。

背後から聲を掛ける者が有るので、何心無く振向けば、彼の諸座が荷車を曳いて今村へ歸つて來たのである。驚利は折も折とて惡い奴に逢つたと思ふから、些と顔で會釋を爲たまま、急行に抜けやうとするのを、

寒 牡丹

諸座は濁聲揚げて、

諸「おとく、待ちねば、驚利。えと、おい、待ちねばと云ふに。」
驚「何ぞ用か。」

諸「用かも無えもんだ。こう、異う他人扱に爲るない。お前又何だつて俺を見ると逃げるんだ。えと、おい、逃げるやうな譯が有るのか。」

驚「何も逃げは爲ねえ、用が有るから急ぐんだ。」

諸「嘘を吐け！ お前は何ぢやねばか、此頃吳城の別荘へ行つて居ると云ふぢやねえか。那の夫人は成上り者で、なか／＼吃へる代物ぢやねえのだから、お前氣を着けなくちや可けねえぜ、えと、おい、本當に。」
驚「何を氣を着けるのよ。」

諸「此奴は唐變木だな。一件よ、それ。」

驚利は苦笑を爲るのみであつた。

諸「笑ひ事ぢやねえぜ。本當に氣を着けてくんねえよ。」

驚「心配しなさんなよ、暴露する時には暴露るんだ。」

諸「可厭な事を言ふない！ お前様子が變だぜ、えと、何だつて那樣に突兀するんだ。俺はお前に然う爲れる譯は無え積だが、それとも有るんなら、異う所置振で爲ねえで、截然と言つて貰はうぢやねえか。」
驚「何も那樣事は有りはしねえ。」

諸「無えなら、何も然う不景氣な面貌を爲て居るには當るめえ。」

驚「俺は此の二三日些と加減が悪いんだ。」

諸「然うか、そりや好くねえな。病氣は何でも風托して居ちや可けねえ。久しぶりで杯一遣らうぢやねえか、丁度此間滅法良い焼酎を買つたのだ。なあ、おい、一緒に來ねえ。」

驚「折角だが、今日は用が有るから、いづれ又御馳走にならう。」
諸「まあ、可いやな、寄つて行きねえよ。」

切に留むるも聽かず、驚利は路を轉せて、遂に彼と別れた。

諸座は如何にも合點の行かぬは彼が仕打、尙やと眉を擧めつと、曳き行く車の足元重く、家路を指して憎

寒 牡丹

寒 牡丹

々歸る。

門口に出て居た女房は、驚から歸り來れる諸座の案じ顔なるを見て、

女「お前さん、奈何ぞ爲たのかい、顔色が悪いぢやないか。」

諸「うむ、今其處で鶯利の野郎に逢つたのだ。」

女「那の畜生が奈何したのさ。」

諸座は其の始末を語り聞せたのである。女房も同じやうに聲を上げて、

女「そりや困つたね。那麽奴の事だから何を爲やがるか判らないよ。お前さん、こりや氣を着けものだよ。」

諸「然うよ、何とか一工夫しにやなるめえ。」

夫婦は内に入つて、有間は無言であつた。旋て如何なる密談を爲たものか、良一時間ほど有つて、女房は黙然と出て行つた。

裏道傳ひに繪蓮の居室の横手に出て、勝手口から内の様子を窺つたが、直に庭口へ廻ると、恰も繪蓮が利喜三を連れて散歩に出るのに會つた。

寒 牡丹

女「おや、奥様、御運動で御在いますか。坊様、今日は。」

女「はい。あの、奥様、恐入りまして御座いますが、是から御運動にお出で遊ばしますのなら、お次手に些と私の方まで御越を願ひますで御座います。先日中上げましたで御座いますが、あの、井戸で御座いますね、此の照續きで段々水が減りますばかりで、貴方様、何にも恁にも爲様が無いんで御座いますね、此分御座いますと來週になりましたは、早速牧場の畜に困りますので、もう今から其が胸に支へて居るで御座います。且那樣のお在の頃もお願ひ申しまして、今度樋を掛けて川の水を引くやうに爲て遣らうと云ふ御意で御座いました、斷然然やうな事に爲て戴きませんと、逆も遣り切れませんで御座いますよ、はい。就きましては、どうぞ些と御檢分にお出を願ひますで御座います。」

蓮「あゝ、そんなら歸途に廻つて見ませうよ。」

時は土曜日の夕方で、百姓達は例よりも早く野良を切上げて、皆湯浴せんと町に聚る頃であつた。露西亞の習俗として、到る處入湯と鞆とは樂を取る機械の缺く可からざる者に成つて居る。因で、湯屋の混雜は夥

寒 牡丹

しいもので、何處どこの門口も人波を打つばかりに群集して居る。

散歩から歸途の繪蓮は片手に草花の束を提げ、利喜三の手を牽いて此に來掛つたが、村の者の大勢居るのを見て、得も謂はれず不快を感じるのであつた。彼等は如何に吾身を疎うとみ、嫌ふとも、神に對いして愧づる事無き吾に於て何か有らんと念じつゝ、此の群衆の中を軽く會釋あしやくして過ぎた。とは謂ふものゝ、彼は覺えず煩の熱し、胸の轟とどろくを禁じ得ずして、唯早く此の難關を過さんとばかり、傍目わきめも轉らす急ぐのであつた。其子は忽ち足を止めて、

利「母さま、此處に井戸が有りますよ。」

と言ふなり寄つて行くから、繪蓮も後に跟ついて、井戸の中を窺ひ見れば、諸座の妻の言に差はず、驚くべき減水の量である。

蓮「成程、まあ、是では大變だが、何處の井戸も這麼か知らん。」

利「母さま、那地あつちのへも行つて見ませうよ。」

と利喜三は匆々いそいそと先へ行く、母も轉じて又其井を試むると、前のと同斷の有様であるから、中を窺ひつゝ暫

く考へて居た。

其人の影さへ見れば直に叫こゝろく村人なれば、此體を見て何かは尤とめざらん、早くも一人が口を切つた。

「何なに爲て居るんだらう、彼地あつち此地の井戸を覗のぞいて何に成るだ。可笑おかしな事する人でないか。」

彼等は目牽き、袖牽き、皆細の爲す所を怪むのであつた。更に言ふ者が有る、

「何ぞ井戸に禱いたつて居るだな。惡黨あくたうめ、又何ぞ巧たくらまうと思つて——今度は誰殺だれころすだ。花持つて井戸の中覗のぞいて、禱いたつて居るに違え無えだ。」

「大方せんた那樣事だらう。何處まで太え匹婦あまだか知れた者でねえ。」

一同湯浴ゆあみの事は忘れて、繪蓮にのみ注目して居る處に、湯屋の男が出て來て、

「さあ、皆さんお入りなさい。」

(十八)

此夜利喜三は感冒かんぼうの爲に發熱はつねつして甚しく苦んだので、繪蓮は通宵看護した上に、翌朝も其の枕頭を離れずに介抱するのであつた。然う恙やうする間に九時半ともなつて、會堂に於る最初の祈禱の鐘が鳴り度つた。

右の始末で繪蓮は參詣が克はぬから、下婢一人を留めて、家内の者一同を出し遣つて、其身は兒の傍に附いた居たのであるが、明方から漸く安眠するを得た利喜三は、此時機嫌好く目を開いて、はや恙無き體であつたから、起して服を更めさせ、膝立の整ふ間窓際の椅子に倚せて、三々五々と絶間無く會堂へ行く人通を見せつ眺めつして居たのである。旋て人は益す出盛つて、恰も隊を成したるやうに絡繹として過る折から、一人の男が立顯れて、何やら叫びながら其の群の中へ入ると見れば、忽ち彼の周邊に堵の如く人立がした。利「母さま、あれは何でせう。」

蓮「何だか解らないけれど、何か有るのだらうねえ。」

見る／＼群集は彼の男の言に勵されたりと覺しく、速に打響動むのであつた。繪蓮は何事ならんと、急いで下婢を見せに出した。

利「母さま、行つて見ませう、何か面白い事があるのですよ。」

蓮「未だお前は風に當ると悪いのだから、外へ出てはなりません。」

利「母さま、それぢや何でせう。」

繪蓮も是は何事とも測りかねたので、遠目ながら具に其の様子を視て居ると、怪むべし、群集の眼は次第に此方に向つて、手をもて指すもあれば、何やら言るも有る。繪蓮は然る覺無しと思へど、例の己を憎む村人の事なれば何を爲んも知れずと、急に窓の扉を鎖て了つた。其時大勢の叫聲は一層高く聞えたのである。利「母さま、奈何したのですね。」

繪蓮は猶硝子越に外の景況を覗へば、彼の群集は我門近く推寄せせる。箇は抑何故なるか。彼の一箇の男有りて群集を煽動せしは、即ち或者に頼まれたる或者である。然らば或者は如何なる事を口に籍いて彼等を煽動せしか。

此朝村人は起出で、怪しからぬ椿事を目撃し、又怪しからぬ損害を蒙つたのである。事は即ち、忽然として一夜の中に彼等の飼犬が斃れ、鶏が斃れ、山羊が斃れ、犢が斃れ、其他の家畜が故無くして多く斃れたのである。人々の疑ひ惑へるに乗じて、是こそ昨日圓磯生夫人の井戸に禱つた修法の致す所である、と彼の男が流言を放つたので。愚直なる村人は然なきに憎める繪蓮の事とて、右から左に之を信じて、一度に騒ぎ出したのである。

「然うだく、昨日の夕方草花持つて、子供連れて、村中の井戸を残らず覗き行いたのは、那時毒薬を入れ
て廻つたのだ。那奴には毒薬が附物だ、第一旦那を其で殺し、過日は子供を殺し掛けたでないか。」
「今度は俺達を殺殺にでも爲る氣だらう。」

「毒薬と來たら那奴の爲業だ。然う思へば、毎晩夜深まで二階の窓に火光が映して居たのは、的然毒薬を調
合して居ただ。」

「今朝會堂へも詣らずに内に居るのは、依樣紙有つ脚で出られねえのだ。」

「其と云ひ、此と云ひ、這麼騒擾を持上げたのは圓磯生夫人に違有りませんね。」

「こりや皆さん打遣つては措けませんよ。」

「誰が打遣つて措くものだ。」

氣早の一人が躍り上つて、

「殺して丁へ！」 と音頭を取れば、

「殺せ、殺せ！」 と口々に呼はる六七十人の同勢は、揉みに揉んで繪蓮の門に雜踏した。

此の氣立まじき叫喚と、凄まじき物音とに膽を冷したる家内の男女は、命有つての物種と、皆何地へか遁散

つて、残るは繪蓮母子のみ。推寄せたる村人は割れよとばかり圍を叩き、圍を揚げて、今にも闖入せんす勢。
繪蓮は見の手を牽いて恐るゝ色も無く戸口に顯れたので、群集は驚破と又一時、

「殺せ！」 「殺せ！」 と盛に絶叫するのであつた。繪蓮は先づ儼に彼等を胸して、

蓮「貴方達は奈何なすつたのです！ お言ひなされる事が有らば聽きますから、靜になさいまし。」

「黙りやがれ！」 「打殺すぞ！」 「磔柱！」 「撲き倒せ！」 「大悪人！」 と八方より矢を射る如く飛

來る雜言。然れど未だ暴れ出でず手出しを爲る者は無い。

蓮「私は皆さんに何を致しました。罪が有らば、如何やうとも皆さんの存分に成りますから、譯を言つて聞せ
て下さる。」

「お、譯を言へなら、私が言つて聞せませう。」

と正面に立つた五十前後の分別有り貌に構へた男が、屹と繪蓮を上竄に睨んで、

「お前様はな、昨日村中の井戸へ毒を入れさしやつたらう。いふや、瞭然と知つて居ますわ。現在那の水を

寒牡丹

掻吃つた牧場の畜類は何處のでも、今朝皆瘡れて居たですわ。お前様は何で那樣怪しからねえ寇を作さる。さあ、挨拶なせえまし。」

寐耳に水の雜題に、繪蓮は幾と辯解に困じたのである。

蓮「何を證據に那樣事を？」

と呆るゝ顔を睨付け、彼の男は、昨日繪蓮が村中の井を見廻りしは、正しく其が爲なりと固く主張するのであつた。繪蓮は在様を言聞せたが、彼等はなかく信ずるのではない。

「薬袋も無い事言はしやるな。お前様が唯見廻つて行かしたばかりの水を飲んで、それで畜類が死にまするか。何と言つても、毒を入れたのはお前様に違有りませんわ。」

繪蓮は段々言を盡して其妄を辯じたのであるが、言へば言ふ程彼等を激して、今ははや手の着けやうも無い。此上は如何にとも愚民の欲するまゝに爲よかし、と身をば抛つ覺悟の繪蓮は、聲張揚げて天を仰ぎ、

蓮「御神は何事をも知し召す、妾は唯御神の昭々なる裁判を冀ふ。」

凜然たる彼の意氣を見て、有繫に我寄つて倒さんと爲る者も無く、仍口々に言るのみであつた。人數の中に

隠れたる諸座口忽ち大聲を出して、

「焼いて了へ、家ぐるみ焼いて了へ！」

「焚殺せ〜！」と之に和する聲は彼の指圖を待ちたる如く四方に起り、見る間に木片、枯枝の類を特集つて、窓下に積上る。群集は存に鬨を揚げて勢を示すのであるが、繪蓮は震ひ懾ると利喜三を俾と引寄せて自は極めて冷然と彼等の悪作劇を蔑視して居た。時に迢に一輛の馬車有りて、二頭の馬の足掻も空に、此方を指して疾驅し來るは誰。彼は覺えず足を翹げて望み祝た。

隣々たる響を揚げて、競ひに競へる車は、此の群集を野草の如く推分けつゝ、無二無三に繪蓮が立てる階段の下に乘着けた。ひらりと内より顯れたるは吳城伯爵夫人である、續いて病後の近小野は疲曳と下立つ、馭者の聲利は護衛として引添ふのであつた。

今や一擧して此家を焚燬さんと悍り切つたる村人も、少頃は目を張り、氣を飲めて、自ら其の何故とも覺えずして、空しく此の一行を迎ふるのである。

雷又は己の前に人々の心を奪れて鳴を鎮めたるに乗じ、清朗なる聲を勵して、

寒牡丹

「皆さんは奈何なすつたと云ふので御座います。圓機生様に罪が有らば、國法が之を罰します、決して皆さんの手は藉りません。又皆さんも之に干る權利は御座いませんのですよ。強て然やうな狼藉が爲たれば、何方も西伯利亞へ行く覺悟で作さいます。」

此の西伯利亞の一語は尤も聴く者の膽を寒からしめたのである。其身は暖かる一處女の分を以て、威名ある吳城伯爵閣下の罪を奏し、易き事、掌、なんどを反すが如く其人を絶域の雪に放ちたる雷又の口より出でし西伯利亞なる語は、彼等に取りては、實彈の填装せらるるを睹たりし銃を以て擬せらるると一般であつた。時に一人屈せずして、

「憚りながら、西伯利亞へ行く覺悟なさるが可えのは、私共よりは其の圓機生の奥様で御座るてや。昨日の事じや、村中の井戸へ毒を打込んで、有らう事か、有るまい事か、私共を「統墨殺」に爲うと云ふ可恐い事を巧まじやつたは其方じや。放つて置けば私共の命が亡うなるに因つて、皆が逆寄にして敵の命を取りに来たのに、何の不思議も御座らんでや。」

「然うじやく。」 「其通じやく。」

雷「うむ、それがは繪蓮様がお前さん方の井戸へ毒を入れたから、其の返報に命を取りに来たとお謂ひなされるのですか。」

「知れた事で御座りますわ。」

「それが無理で御座るかよ。」

雷「では、倘し井戸に毒を入れたのは繪蓮様ではなくて、罪人は外に在ると知れたら、皆さんは其者の命をお取になるで御座いませうね。」

其意を測りかねて、卒に言を出す者は無い。

雷「皆さん如何がです、どうぞ御返事をなすつて下さい。」

「罪人は外に在ると有仰るがですか。」

「外に在ります。私が唯今指名致しますから、皆さんで直に捕縛をなさいまし。」

一同は湖の湧くが如く響動いたが、彼ならずして村人の中に誰かは然る嫌疑を受くる者あらん、語れ、聞かんと、各顔を見合せて又一時打鎮つたのである。雷又は聲高く、

寒牡丹

雷「其の罪人は諸座夫婦であります。」
皆息の根の止るばかりに驚いた。

雷「それには歴とした誑人が此に兩箇まで居ります。さ、お前方は公衆の前で立派に誓を作さい。」
聲に應じて近小野と鶯利とはやをら群集の前に立出でた。兩箇は言を揃へて、

「我等は御神に誓つて伯爵夫人の唯今の被仰に詐無い事を證明致しまする。」

鶯「諸座は御主人たる圓機生様を遊をお進め申した擧句、無惨にも雪の中で凍死をお爲せ申したで御座います。」

近「其は現に此の親仁が見て居りましたので、彼の罪は道れぬ所で御座います。諸座は右の如く御主人を吾手に掛けて置きながら、其罪を奥様に嫁り付けて了つた、重々の大悪人で御座います。」

鶯「村の衆は然云ふ事とも御存無く、何咎も無い奥様に悪名を付けて、主殺の諸座を安々と活けてお置になるで御座います。其は皆彼が巧んで致した事で御座います。」

此時阿修羅王の暴れたる如く諸座が躍出ると想の外、彼の妻が血眼に成つて其へ願ながら、

妻「嘘も好加減にお吐きなさい！ 他に悪名を付けるとはお前さん達の事だ。内の人を罪に陥さうと思つてからに、まぎく〜と證人まで拵へて、那樣嘘八百を並べるとは、顔に似合はない可憐い人だ。さあ、何でお前さん達は然う内の人を目の替にして罪に陥さうと爲なされるのだ。大方内の人居たらお前さん達の邪冤にでも成る事が有るからだらう。滅多な事を爲て他に難を付けやうとして、各自の襦袢を出さねえやうに用心を爲るが可い。而して昨日井戸の中へ毒を入れたのは私達だとは、何處に那樣證據が有ります。奥様こそ用もないのに那邊中の井戸を覗いてお行きなすつたぞや御座いませんか、村の衆は皆さん御存じですよ。さあ、此の人達を活して置いちゃ、村中の者の命が殆い、皆さんで早く奈何かして下さいませう。」
恚ても仍深く繪蓮を疑へる村人は再び哄と鬨を作つて人も家も焚かんと争ひつゝののである。
あはや繪蓮の氣絶せんと爲るを、雷又は聡と弓手に扶けて、
雷「さあ、焚くなら私も一緒に焚いて御覽なさい！」

この斯人の陰身には常に皇帝陛下の添へると信ずる村人は、後の祟を懼れて、敢て卒に手を下す者も無い。雷又は大音揚げて、

寒牡丹

雷「皇帝陛下の御名を借りて恐多い儀ではありませんが、皆さん一同で此女と諸座の兩人を速に捕縛なさい！」
言下に諸座夫婦は大勢の中に押取籠られた。折から息促き駈着けたのは家従の不破瀨である、夫人を見て、
那へくと指す方より、又もや砂煙を蹴て走り来る馬車が有る。何人ならんと目を側て群集の待つ處へ、
曳々と乗込み來りて立顯るのを見れば、手薬煉引いたる數名の警察官、即座に夫婦の者を擄取る。
全く氣を失つて家の内に昇入れられた繪蓮は、此時漸く人心の付いて、傍に附添ふ不破瀨の顔を見て、
蓮「奈何なりました。」

不「もう御心配には及びませんで御座います。彼等は拘引されて参りました。」

門前の稍鎮るのを待つて、今内に入來たる雷又の姿を見るより、繪蓮は舌を忘れて嘔起きたが、
蓮「雷又様！……」とばかり嬉しさを餘つて泣顔れたのである。

(十九)

其の夏の末に及んで諸座夫婦の罪科は判決せられて、西伯利亞の鑛山に懲役と成つた。之に由つて繪蓮が積
年の嫌疑も釋けて、村人は今更に彼等の極悪非道を憎むと與に、此に濡衣を着て干す由も無かりし人の身の

上をいとし憐みて、又夫の在りし世の如く等閑ならず思はるゝのであつた。此の事件以來雷又と繪蓮との間
は、影の形に於けるやうに親密となつて、元是一家の兩家と成つたのが、還更に合して兩家の一家と成つた
有様で、互に相倚り、相扶けて、憂を語り、喜びを分つて居た。

諸座夫婦の判決の有つた日繪蓮は雷又を訪うて、夜に入るまで物語に耽つた。繪蓮こそ青天白日の身と成つ
て、今は心に懸る雲も無いのであるが、彼等が西伯利亞へ送らるゝと云ふに就けても、雷又が胸は潰るゝの
である。談は自から其に移つて、

蓮「然う貴方のやうに怏々思つてばかり被在るものぢや御座いませんよ。兄を始彼土に行つてお出の方達も、
貴方の御厚意で安樂に暮して居るので御座いませう。貴方のお盡し遊ばす丈の事は、十分盡してお在るので
御座いますから。其の御心は必ず先へも通じますで御座います。其が解らんやうな人達では御座いません。
先頃の事に就きまして、私は悉く始末を書いて兄の處へ遣りましたので御座いますが、昨日彼土から返事が
達きまして、懇々もお禮を申してくるやうにと、大相喜んで居りました。」

雷又は夫にして倘し然ほどに喜ばしく思ふならば、何故已に對して一封の書を吝むのであらう、未だく憤

は釋ぬのであると考へた。

蓮「それから聖彼得堡の伯母からも、貴方には段々お禮を申さなければならんと申して居りましたが、いづれ近い内にお文を上げますで御座いませう。」

蕾又は頭を低げて之に謝した。

蓮「御承知か存じませんが、聖彼得堡では貴方の御評判の高いことは非常なもので、兩陛下までお噂を遊ばしませて、貴方の事をお褒になつて在せられると申す事で御座います。然やうな譯ですから、今貴方が彼地へお歸り遊ばさうものなら、甚麼に交際社會から尊敬あそばされるか知れませんが御座います。」

蕾「私はもう彼地へは歸りません。」

蓮「あれ、貴方は何をお泣き遊ばすのです。何爲すつたので御座います。」

蕾又は顔を掩ひつゝ嗚噎して言ふ能はざるのである。實に繪蓮の見て訝る如く、彼は如何なれば今卒に泣くのであるか。曩に彼が聖斷を仰ぎし日、滿都の士女は指彈して、彼を女流の最も賤むべき者と爲さるは無かつた。蕾又は意にもあらぬ伯爵夫人の椅子に始て其身を置いた時、寧ろ恨を呑んで死なざりしを悔いて悔い

て已まぬのであつた。彼は其の生耻を都に居て曝すが忍難さに、此の草深き邊鄙に遁れ來て、味氣無き一生を葬らんと企てたのである。然るに今思懸けずも其の汚名は轉じて令聞と成つて噴々傳へらるゝと聞いたる蕾又は、何事にも先つと謂ふなる涙の紛下つるを禁じ得ぬのであつた。

蕾「世間の人が私の心を知つてくれましたのは、如何にも嬉しいので御座いますが、其に就けても残念のは、今だに私の思が西伯利亞へ達かんの御座います。世間から幾多褒められませうとも、殿様に憎まれて居りましたら、其の名譽は有るに効無いもので、私が身を捧げて吳城家の爲に盡しますのは、何も世間に褒められなくて致すのでは御座いませぬ。」

蓮「蕾又様、貴方は兄の事を然うまで思召して被居るので御座いますか。」

蕾「一たび結婚致しましたからは、私の爲には二人と無い夫では御座いませぬか。」

蓮「其夫を貴方は眞實愛してお在るので御座いますか。」

蕾「私は最も愛して居ります。御神と皇帝とが賜はつた夫で御座いますから、私は何處までも其人に隨ふべき義務が有ると信じます。然し、爰に一件謂ふに謂はれぬ心懸と申すのは、お話を致しますのも實はお可耻い

ので御座いますが、彼の御三人の中で、私に對する罪の有るのは誰方だやら、其が今に知れませんが、御座います。と申すやうな譯で御座いますから、殿様が少しも私をお思ひ下さらんのは、或は子細の有る事では無いかと、然う考へますほど私は熱く情無いので御座います。」

繪蓮は今日と云ふ今日の今始て此の秘密を聞いたのである。彼は世間と同じく、陛下は正當なる裁判を下された者と信じて居たので、深く心に駭いた。

蓮「兄は貴方に何とも申しませんで御座いましたか。」

蕾「伺ひましたけれど、那樣事を訊ねる必要は無いと有仰つて、何ともお話し下さらるので御座いました。」

蓮「然云ふ片意地の人ではないので御座いますが、何か其は譯が有るので御座いませう。いゝえ、宜しう御座います、是からは及ばずながら私が御相談相手に成りまして、屹度貴方の御安心のなるやうに甚麽にも御盡力を致しませうから、どうぞ眞身の妹と思召して、何なりと御遠慮無く私へ有仰つて下さいませう。」

蕾「難有う存じます。便無い身に然して御深切に有仰つて下さいますと、私は何程氣強いかわれませぬ。何と申す不幸な體なので御座いませう！」

繪蓮も之を慰むるには、到底言語や同情の及ぶ所でないと思つたから、別れて歸ると直に筆を取つて、兄に宛てた長文の手紙を認めたのである。然るに是が西伯利亞に着する前に一大椿事が湧起つた。則ち其報を洩したのは、眞に彼の前警視總監練布將軍を四道に遣はせたる阿茅淳公爵夫人である。

(二十)

或朝蕾又は繪蓮と俱に食卓に就いて居ると、表の方に劇しく馬蹄の音が聞ゆるので、兩箇は思はず手を住めて耳を澄した。急足で食堂に入來つた不破瀬は、

不「阿茅淳公爵夫人の御越で御座ります。」

蕾「阿茅淳公爵夫人が？………何に此へ、………直に御客間へ御案内を申上げて下さい。」

不「いえ、もう疾に何で、而して殿いお荷物で御座いまして、其を合沓お搬び込に相成つて居られますが、長く御逗留でも遊ばしまするので？」

蕾「奈何ですか、私は知りませんよ。」

不「はッ。然し、どうか然やうな御様子で。」

寒 牡 丹

兩夫人は目と目を見合せた。

蓮「あゝ解りました。那の方は靈象府家から出られたのですから、何か弟御様の中尉のお身の上に事が起つたのでは御座いますまいか。」

蕾又も然うと考へながら急いで接見した。

公爵夫人は尤も親しげに挨拶して、さて長椅子に侍つて徐々に説出す。

阿「掛違ひまして今日までお目もじを致しませんで御座いましたがお噂は夙て伺つて居りますので、當時彼得堡で貴方を呼捨に申上げる者は有りませんので御座いますよ、氣高き蕾又、又は貞淑の蕾又、と必ず申上げるので。而して又、御器量もお美しう被在ると云ふ事は承はつて居りましたが、失禮ながら私は慙うも御奇麗な奥方とは存じ寄りませんでした。」

蕾「で、今日貴方様のお越に相成りましたのは、何ぞ火急の御用事でも。」

阿「はい。西伯利亞からも毎々書面で御座いまして、一方ならぬ御親切の程は、實に私の身にまで沁みまして、何とも難有い事だ、と涙の出るやうに存じて居りますので御座います。是非お目もじを致した上で、此

の御禮は十分に申上げたい、と日頃思通して居りました處、此度圖らず出ましたのは、實は私一己の體では御座いせん、伯母御様並に澤毛野夫人の代理を兼ねまして、貴方へ御頼の筋が御座いますので、其は別儀では御座いせんが、那の西伯利亞で御座います、彼地では唯今寒扶斯熱が非常に行りまして、弟なども感染致しました様子で御座います。」

蕾又は悚然として肩を震はせた。

阿「ところが、醫者らしい者も御座いせんやうな始末で、漸く雇婆ぐらゐが看病を致すので御座いますが、其も手が足りませんで、病人同士互に看護を致して凌いで居ると申す事で御座います。」

蕾又の胸は益す跳るのである。

蕾「其に就きまして何ぞ私がお役に立ちますので御座いますか。」

阿「どうぞ貴方へお願い申しますのは、其儘に捨置きましては三人の命に拘ります事で御座いますから、何卒此際特赦の恩典を下し置くやう、貴方から陛下へ御奏上を願ひたいので御座いまして、此事は私共の力には及びませんので是非貴方でなければと申すので、私が總代に成りまして筒様に御頼に出ましたので御

寒 牡 丹

座います。」

雷「それはよろこばしく御出下さいました。私風情が恐多い事では御座いますが、お指圖に従ひまして、早速陛下へ拜謁を願ひますで御座います。」

阿「然やうなら御聽入れ下さいまして……。」

雷「はい。此上は一刻も早いがお宜う御座います。是から直に参りませう。」

阿茅洋公爵夫人は驚いた段ではない、今來て今話を爲たばかりであるのに、直に出發せうと謂ふのは何たる熱誠、何たる率直。然るに己を顧みれば、一週間も滞在するやうな支度の荷物に對して、愧づる所無き能はざるのである。

不取敢雷又は居間に退つて發足の準備に掛る。入替りに繪蓮は接待に出て來たが、有間にして雷又は服を更へて入つて來た。

雷「甚だ失禮を致しまして御座います。」

公爵夫人は此の支度の手早いのに呆れたのである。

阿「もうお宜いので御座いますか。私は如何に何でも今日一日ぐらゐお手間は取れる事と存じて居りました。」
雷「つい氣が促きますもので御座いますから、實は支度どころでは御座いませぬので、然し貴方様は御遠方をお越で、然ぞお勞れ遊ばしてで御座います。幸ひ妹も居ります事で御座いますから、どうぞ二三日御逗留遊ばしまして。」

公爵夫人も稍躊躇の體であつたが、

阿「私一人然う致しても居られますまい、御一緒に参る事に致します。」

はや馬車は表に廻されたので、主客は圍の外に顯れた。雷又は思ひも寄らず不破瀬が駁者臺に相乗をして居るのを見て、

雷「おや、お前さんお出なのかえ。」

不「はッ、是非お供を願ひますので御座います。一向お役には立ちますまいで御座いませうが、何卒彼地までお引連を。」

雷「彼地へとは西伯利亞の方へですか。」

寒牡丹

不「はッ。」

雷「お前さんのやうな老人が、それは可けません。」

不「いええ、私は死にましても大事御座りませんので、殿様のお爲には決して厭ひませんので御座ります。」
老の涙脆くも彼ははや泣いて居るのである。

雷又は再び言はずして、公爵夫人と共に車に打乗つた。

此の旅行は雷又にとつて尤も不安不快の者たるに違無なかつたが、又其中に益する所も有つたのは、話好の公爵夫人から、貴族社會の状況を始として、夫なる吳城伯爵に關する一切を知悉するを得たのである。なれども還一日千秋の思を爲ざるにもあらずして、入京するや否や伯母なる伯爵夫人の許を訪うた。嘗て一非職軍醫の憐むべき娘として引見せられし雷又は、今其人の親しき姪として、將令名ある伯爵夫人として優待せらるゝのであつた。彼は雷又の手を把つて、

夫「私は誠に貴方には恐入りました。能も陛下の思召を辱めず、天晴女の道を立てて下さつた。今更何と申さう言も有りません。苛くも親屬中に貴方のやうな立派な婦人が居らるゝのは、此上も無い吳城家の名譽

と考へます。で、萬一甥が不心得から這般の御志に酬いませぬやうな始末でありましたら、私は誓つて彼には一生此邸へ足踏は爲せません。」
雷「過分のお言で……。」

とばかりに雷又は涙に暮れた。彼は當世の賢婦人として聞ゆる伯母なる人の此の一言に感激して、二年の辛苦は終に酬いられざらんも、茲に憾無しと爲すのであつた。

然る程に伯母刀自の執奏を経て雷又は參内を許され、親しく天顔に咫尺して彼の特赦の儀を哀願に及んだのである。一門の歎、眷屬の悲は然る事ながら、私情を以つて公の大法を亂すべきにあらず、と殊に叡慮を憐されたのであるが、彼が婦道を守れる殊勝の志を憐み思召して、終に其の請願を裁可あらせられ、更に伯母なる伯爵夫人を召させて、右の旨を仰せ聞けられた。

然る處伯爵夫人は又別に、雷又自身赦免狀を奉戴して彼地へ罷り下り度趣を願出たのである。陛下は之を聞し召して、一びは驚き、一びは危まれたのであるが、又陰に男兒も及ばざる豪毅の精神を感じ給ひて、隨分道中心を着けよ、との難有き御言を添へられて、之にも御許が出たのである。伯爵夫人は天恩の優渥を謝

寒牡丹

寒牡丹

して退出し、急ぎ還つて勅裁の赦狀を雷又に示せば、彼は餘の忝なさに襟の濡ふを覺えずして感泣した。頃は初冬の夕暮れて、昨夜より降出でし雪は猶霏々として窓を撲つ。冷かなる燈火の下に露滋き花の顔を俯せたりし雷又は、旋て衝と椅子を起つて、

雷「私は今晚出發致しまする！」

夫「今晚？是から？」

伯母は驚いて雷又の面を視た。

雷「一刻も早く参りたう存じますから。」

伯母は熱と考へて居たが、

夫「然うですか。それでは直に行つて下さいまし。路は險しく、雪は降るのに、長の道中の事でありませう、心配して居たら際限は有りますまい。御神は必ず貴方の身を安全にお護り下さると信じますから、思切つてお立せ申します。」

雷「然やうなら直に私は、」

夫「随分お體をお厭ひますつて下さい。」

夙て用意は萬端整ひたる事なれば、卒と云ふまゝに旅装して、爰に名を惜む賢婦と死を輕んずる忠僕とは、暗夜を冒し、風雪を衝いて、蕭々たるトロイカに策ち、行方適き西伯利亞の空を指して打立つた。

夜を籠め、日を暮して行く程に、或時は雪に埋れて路を失ひ、嵐に取籠められて車を覆し、又或時は狼の群に迫れて膽を冷し、飢寒身に逼つて涙も氷る野の末、河の涯、實に一艱を送りて一難を迎へ、一辛去りて一苦來るもの連に幾十日にして、命めでたくも主従は適か彼方の山陰に雪降積める森に掩はれつゝ、有繋に壞れも遣らぬ二三の小家を望むのであつた。是ぞ即ち流竄の名に三中尉が活ける屍を埋むる其の處と知られた。

此の佳しき景色の目に映ずると與に、雷又の胸に浮ぶのは、其處に住める人々の安否如何であつた。はや病の爲に斃されたであらうか。同じ枕に三人とも命を失つたであらうか。或は幸に九死を出でた人が有るであらうか。若し有らば其は誰であらうか。彼の人の身に凶事も有らば、我は今更何と爲んなど、彼は長途の萬艱を凌いで安着したる身の幸を喜ぶ邊も無いのである。

寒牡丹

主従は先づ、所轄の警察署に出頭して其の証明を得、署長の優待を受けて彼の配所の小家に導かれた。
(二十一)

嬉しくも三名は左に右に無事と謂ふべきであつたが、吳城伯は獨り大病の枕も擧らず、唯命が有ると云ふだけの始末。蕾又は直に其室に通つた。棟の低い粗末なる木造の部屋であるが、亞細亞製の白氈を敷填めて、夙て送越せし裝飾品は皆此に据付けて在る。其が爲に見る影も無い詫住ながらも自ら中に裕なる處が認めらるゝので、蕾又は己の志の空からざりしを私に喜んだのである。唯見れば毛皮に蔽れたる寐塗に横つて居るのは、此の五七日來熱の爲に人事不省の吳城伯で、傍に附添へる一人の病疲れ、瘦衰へて陰鬼の如き容したるは、病後の靈象府伯である。蕾又は一目打見るより目も晦れ、心も消ゆるやうにて、嗟乎、我ゆるに罪を獲たる人々よと、幾ど其處に憐れんと爲るのであつた。靈象府は今入來れる貴婦人を見て、其の蕾又たるを辨ぜぬのである。彼の紅茶屋の密室に色を失ひし處女は、恰も其の境遇の一變せると等しく、又其の容貌に體度に、或は其の思想に變化の著るしき者が有つて、彼が慘憺たる苦心の此の二年は、明かに其の前後の半生を劃する痕を留むるのである。故に彼の蕾又を識りし者も、卒然に此の吳城伯爵夫人を見ては、恐く別

人の看を成すであらう。況や善くも識らざる靈象府は己等が犯罪の原告者の此に來訪はんとは夢にも想ひ掛けぬのであつた。州長の夫人か、旅中の貴族などの慰問を惠まるとならん、と力無き身を起して、蕾又の前に其姓名を訊ねた。

蕾「お見忘で御座いますか、私は吳城蕾又で御座います。」

靈象府は惘然となりて纒に頭を下げたが、忽ち病後の疲憊に身を支へかねて、躊躇と後様に仆れんとするを、蕾又は衝と寄つて、椅子に扶け載すれば、彼は其手を取つて敬意を表しつゝ接吻を施した。

靈「貴方は奈何して箇様な處へお出に成りました。實に意外とも何とも不思議に堪へませんが。」

蕾「私は好い御便を持つて参たので御座います。」

靈「好い便! 唯今の此の身の上では、「好い便」と云ふ其の語を聞くだけでも肉が躍るやうで御座います。何、何、何云ふ事です。」

蕾又は此に來るなり早既に平生蟠まりたる懸念の一つを解去つた、と謂ふのは、彼の狼藉を己に加へたのは決して此人でない云ふ事を曉つたのである。

蕾又が答へて言はんとする際、外方に人の氣勢がしたので、少く遅つて居る處に、澤毛野子爵が杖に扶けられながら、是も病羸れた姿をして躊躇と入つて來た。

彼は望扶斯熱に罹た先頭第一の患者であつたが、他の兩箇が健全で居た爲に、看護も届けば快癒も早い分であつた。然るに吳城伯の僵れる頃には、先に靈象府も僵れ、澤毛野も未だ瘰に就いて居て、誰介抱する者も無く、自ら病を重らせたので、今彼等は辛くも其熱を除いたので、義の爲に推して看病すると知られた。

澤「それは奥様、能うお越になりましたのう。此頃は雪で殆ど往來も御座りません處を、御婦人の御身で追々是へ御出は、御勇氣の程敬服致しました。」

靈「夫人は我々に何か好い便を齎して下さつたと云ふのじや。」

澤「好い便とは何で御座いませうかな、我々は最一度歐羅巴の方へ還られるでありませうか。」

蕾又は御名の畧されたる特赦状を捧げて、之を靈象府に渡せば、然りとも知らず打披き見たる彼は昨と言ふたまま氣絶して仆れた。

時を移さず兩箇に呼活られて、目を開くなり澤毛野を見て、

靈「貴様、特赦の恩命が下つたぞ！」

澤「おゝ、我々は特赦を蒙つたのじや。確りせい、確りせい。」

靈「確りして居る。貴様喜べ！」

澤「喜んで居るわ。貴様確りせんけりや可かんで。」

靈「大丈夫じや、確りして居るわ。」

彼等は天使に向ふが如く蕾又に向つて拜謝するのであつた。折しも吳城伯は熱に浮されて咕囁と譚語を言始めたが、後には苦み悶へて大聲に叫ぶので、蕾又は其傍に差寄つて、はや介抱の手を下す。彼の兩箇は恚く打揃つて主従の附添ふからは、今は心安しと、一先暇乞して各小屋に立歸つた。

此日から蕾又と不破瀬とは晝夜を分かす患者の傍に居て、心の用おらるゝ限、力の盡さるゝ限、看護に看護して倦むことを知らざるのであつた。

之が爲に然しもの病勢も日にく減退して、昨日今日は彼も稍人心地着いて來た鹽梅。蕾又は己の此に來て居るのを知せて病人を驚かさん事を恐れたので、然やうな粗相の無いやうに尤も注意したのである。

寒牡丹

或日患者は靈象府と澤毛野とが枕上に居るのを見て、

吳「君達は生きて居つたのか。」

靈「僕等よりは君の方が既に危かつたのぢやが、其分なら、命を拾うて、這麼愛でたい事は無い。」

此晚患者は彼等と共にスープを啜つた。

澤「此のスूपじや、僕は此のスूपのお蔭で命を全うしたのぢやから、貴様も我慢して澤山遣らにや可かんぞ。」

吳「僕は熱の爲に絶えず夢を見て居たから、無論夢ぢや有らうけれど、どうも又然うではないやうにも考へるのだ、……………」

靈「君は何を言つて居るのか！」

吳「いや、内の不破瀨な、何でも他が始終傍に居て介抱して居たやうに想はれるのだが、今朝も居たやうだて。」

澤毛野は覺えず大笑した。

寒牡丹

澤「馬鹿な、勿論夢よ！」

吳「夢だらうなあ。」

靈象府も打笑みながら、

靈「夢でなかつたら奈何か。」

吳「奈何かつて、夢ぢや爲方が無い。」

澤「然うよ、夢ぢや爲方が無い、大きに然うじや。けれども事實であつたら奈何か。」

吳「這麼嬉しい事は無からう、なあ。」

彼は悵然として乍ち思に沈んで了つた。壁越に此の物語を聽いて居た不破瀨は、今出やうか、今出やうかと、覗いたり引込んだりして居る處を、澤毛野は何も言はずに應いたので、得たりとばかりに入來つて、靜に吳城伯の寢臺に近い。人の足音に彼は何氣無く目を轉ずれば、不思議とも何とも、其處に夢の中の人があるやと立つて居るのであるから、唯呆れて頓には言も出でず、諦視之を久うして仍疑ふのであつた。

吳「や、不破瀨か！」

寒牡丹

不「はッ、殿様！」

吳「おゝ、不破瀬だな！」

寢臺に縋つて老人は咽泣に泣いた。

其肩を片手に引抱いて、吳城伯も少時は不覺の涙に昏れた。吳城伯は替へん方も無く不破瀬の訪來たのを悦ぶのであつたが、當座の二三日は其の如何にして來たかと云ふ事を別に訊ぬるのでもなくて過ぎた。唯一も不破瀬、二も不破瀬と、此の親仁でなくては夜も日も明けぬやうに、只管彼の介抱を喜んで居た。病は日毎に癒え行くばかりで、氣の惺然となるに就けて、彼は始めて身邊から室内の模様は何と無く向來とは變つて居るのを感じた。又時としては、睡る時と覺めた時と變つて居る事が有る、最も怪まるゝのは、彼の不破瀬が何處へ何爲に行くのであるか、時ならぬ時分に候忽と見えなくなる。第一に食事の善くなつた事著しいもので、風味と云ひ、氣取と云ひ、恐くは我が彼得堡の邸の料理に優るとも劣らぬと覺ゆる。總て是等は親仁の手際ではない、誰か人が有つて同行したに違無い、と陰に曉つたのである。なれども敢て問はんとも爲ずに打過ぎた。

寒牡丹

或朝目を覺ますと、枕上の小卓の上に曾て見慣れぬ女持のハンカチーフが乗つて居るので、怪しげに目を着けて居ると、不破瀬が衝と來て、然り氣無く其を隠して了つた。勿論親仁などの所持すべき物でない、想ふに差はず誰か忍ばせてあるなど考へて居ると、不破瀬が出て行つた。すると隣室で呖々と語ふ聲が聞ゆるのであつた。

午前、靈象府が來たので、吳城は彼に問試みた。

吳「君、不破瀬は何爲て此へ來たのかね。」

靈「依樣様に乘つて來たさうじや。」

吳「那樣事を聞きは爲ん。何云ふ譯で來たか、其を問ふのだ。」

靈「君が大病で難しかつたから、それで來たのじや。」

吳「伯母が寄越したのか。」

靈「然ぢやなからう？」

吳「自分で來たのか。」

寒牡丹

靈「然でもないやうだ。」

吳「それぢや奈何したのか！」

吳城は向腹を立てて詬つた。

靈「俺も能は知らんよ。然し、誰か寄越したのぢやらう。」

吳城は弗と煖爐の上に在る花籠に目を着けたが、其の花の盛り方の巧きは、逆も男の手業の及ぶ所でない。

吳「靈象府。」

靈「何かい。」

吳「那の花籠は誰が作つたのだ。」

靈「うゝ、那か！」

吳「不破瀬には出来んよ。君には猶の事、澤毛野は勿論だ。」

靈「おゝ、勿論じや。」

吳「那の籠のまゝ咲いて居たのか。西伯利亞と云ふ處は重寶な處だのう。」

寒牡丹

靈「實は近頃俄然重寶に成つたのじや。」

吳「一體誰が来て居るのだ、君等は何も隠さんでも可いぢやないか。」

靈「敢て隠しは爲んけれど……それぢや言はうか。」

吳「當然さ。」

靈「實は我々の爲に無上の福音を齎した人が来て居らるゝのぢや。」

吳「我々に福音？ 此世の外に葬られて了つた我々に福音なんぞが有るものか！」

彼は面を背けつゝ可思げに唾吐いた。

靈「所が有るのじや。君は那の不破瀬ばかりを忠實の者に思つて居るが、何ぞ計らん最一層君に事へて忠實

の人が有るのじや。其人が齎した福音と云ふのは、驚いては可かんで、あゝ、可いか、驚く勿れじやぞ。」

吳「何を驚くものか。」

靈「善し。其の福音と云ふのは外でもない、君の病氣が治り次第我々は何時でも彼得堡へ還る事が出来るのじや。」

寒 牡 丹

吳城は覺えず苦笑した。

吳「下らん事を言ひ給ふな。君は本に氣樂な者だなあ。」

靈「氣樂だ？ 豈獨僕のみ氣樂ならんやじや。氣樂で差支無い譯が有るから氣樂なのじや。何も怪むに足らんぢやらう。」

吳「何だか些も解らん。」

靈「解らんから言うて聞せるのに、君が聞かんのじやないか。此度陛下の恩命に因つて、我々は彼得堡へ召還さるゝのじや。」

吳「おと、それぢや特赦を蒙つたのか！」

靈「然ぢやとも。」

歡喜とは謂ひながら、過度の感情に打れたる吳城伯は、あはや其場に氣絶せんと爲る體であつた。靈象府伯は痛か狼狽して、

靈「夫人些と来て下さり、早く、早く。」

氣立まじい喚聲に雷又は何事ならんと、驚き慌てゝ駈入つて來た。吳城伯は漸く自ら氣を鎮めつゝ、眼を開いて夫人の姿を噴て居たが、

吳「特赦の御使にお出下すつたのは貴下で御座いますか。」

雷又は俯きながら聲頭せて、

雷「はい、然やうで御座います。」

吳「而して此の特赦は何方がお願い下さつたのですか。伯母でせうな？」

雷又は面色を變へたままに何と答も爲ん方無き體。

見るに見かねし靈象府は、

靈「黙り給へ。誰のお蔭でもない、此の夫人の力じや。外の事とは違つて容易ならぬ特赦の恩典、他の者から如何に願はうとも、是ばかりは御許有るべき筈が無い。然のみならず、孱弱き婦人の身を以つて、此の雪を冒して迄々と西伯利亞の果まで來られた、其の艱難辛苦は幾許であつたらうか。又其の艱難辛苦を凌いで此まで尋ねて來らるゝ御胸中をお察し申せば、僕は涙が零るゝのじや。君は能う考へて見たまへ。」

寒 牡 丹

寒 牡 丹

吳城伯も雷又の操行の伯爵夫人たるを辱めざるは、陰ながら識るのである、又今彼の容儀、態度を見れば、愈よ其の操行の虚からざるを想はぬではないが、仍ほ情として、此の忘れ難き仇敵と對して忍ぶ能はざる者が有るのである。

吳「いや、然やうでしたか、それは御厚意の程何とも難有う存じます。唯恐入つたのは貴方のお手際、實に此度は立派な復讐を作りましたな！ 然ぞ御満足で御座いませう。」

其のまゝ彼方向に枕して、吳城伯は再び音も立てず居た。間有つて雷又の悄悄立去る氣勢がして、跡には靈象府が物や思ふらんと覺しく打濕りて居るのであつたが、遽に

靈「吳城。」 と呼ぶのを聞いたから、彼は空寐の顔を振向けた。

吳「何か。」

靈「君は善くないのう。今の言草は那は何か、傍に聴いても居られんやうな事を、夫人に對して氣の毒な言ふにも及ばんが、第一に君自身の徳を傷くるのじや。夫人の立派な爲方に比べて、君の那の鄙劣な暴言は大いに耻づべき事ではないか。」

吳「いや、僕は鄙劣な暴言を吐いた覺は無いぞ。彼に向つて言べき相當の事を言つたのだ。」

靈「君は怪しからん事を言ふのう。然云ふ了簡で居ては濟まんぞ。君は一圖に夫人を憎んで居る、其が先入主と成つて居る爲に、其人の徳を認むる事が出来ん、而して總て誤解を爲て居るのじや。」

僕と澤毛野は全く夫人の徳には心服して了つた、實に一言も無い。我々から見れば君は所謂局に當る者じや、局に當る者の迷ふのは、そりや尤ぢやが、親友の我々が言ふのじや、決して君の爲に不利な事は勧めん、如何にも皇帝陛下より賜つた伯爵夫人たる價値が有ると信ずるから、君は宜く怨を釋いて夫人の志を納れたまへ、是は我々が熱誠を以つて君に推薦するのじや。」

吳「いや、折角だが其事なら言つてくれ給ふな。僕には又僕の了簡が有るのだ。」

靈「其の了簡が悪いのじや。若し夫人に對する怨を謂ふならば、我々三人の間に甲乙は無い、等しく彼人の爲に此の嚴刑を受けて……………」

聞くも煩しと、吳城は又他を向いて了つた。靈象府は稍聲を勵して、

靈「吳城！」

寒 牡 丹

寒 牡 丹

吳「……………」

靈「おい、吳城、吳城！」

吳「もう寐た、寐た！」

靈「寐ちや可かん。」

吳「可かんでも何でも寐た。」

靈「寐ても何でも起き給へ。」

吳「あゝ、頭痛が爲て來たから、今日は免し給へ。」

靈象府も手を着けかねて、此場は口を噤むより外無かつた。時に不破瀬が交替に來たので、彼は旋て此を立去つた。吳城は跡に萬感交も胸に滿ちて、轉帳反側を絶たざるのであつたが、其の最も深く思ふ所は、彼の爲に憐むべき千辛萬苦の心を傷むる雷又の事ではなくて、今や自由の身の故郷に還る嬉しさであつた。睡むともなく彼は時の移るを知らずして目覺むれば、はや蠟燭は室内に耀き、卓子には夕餉の準備が爲てある。見れば、四人前の用意が出來て居る、例なれば三人であるのに、と考へた。直に兩箇の友は入つて來ると、

寢室の傍に衝と來たのは澤毛野子爵。

澤「夫人は、のう、我々と此で會食する事を断つてお辭りになるのじや。其は畢竟夫人に對する貴様の待遇が失當して居るからじや。就いては貴様に話を爲んけりや成らん事も大分有るけれど、今は其の場合でないからして言はんが、左に右相當の挨拶を爲て、早う此へお伴れ申すやうに爲んけりや可かんのう。」

前には靈象府に散々言はれ、今又澤毛野に飭めらるゝ彼の心頭は、怒氣燃ゆるが如く、切齒を作して、

吳「何だ、相當の挨拶とは！ 不破瀬、貴様那裏へ行つて引……………」

澤「こりや、那樣事を言ふぢやない！」

澤毛野は眉を蹙め、目を動して彼を制した。

吳城伯も有聲に仿なしと思ひ跳して、

吳「夫人に此方で御飯を上るやうに、然う申して。」

不破瀬が此旨を傳へたので、雷又は直に來て三人と共に卓に就いた。吳城伯は始終彼の一舉一動に注目したのであるが、雷又は食事中大方俯いて、羞づるが如く、饜るゝが如く、唯慎んで居た。靈象府と澤毛野とは

寒 牡 丹

極めて鄭重の態度を取つて、此の伯爵夫人を禮遇するのである。然るに夫人は彼等の十言云ふのを二言三言に應けて、究竟夫たる人の不興に對して翼々としておる氣色は明かに見ゆる。

快しとはせぬ吳城伯も、此體を見て、決して憎いと云ふ念は出ぬのである。尙憚無く謂はしむるならば、其の憤み守れる姿の況へ方無く怜しらしいのに、彼の心は稍動されたのである、恨も憎も有間は忘れて、花の如く麗しく、露の如く可憐しく、鳥の如く愛らしと見るのみであつた。

旋て食事が了ると、雷又は挨拶をして出て行つた。

「奈何か、君。恐入つたものぢやらう。容貌と云ひ、言語と云ひ、那の體度は奈何じや、なあ、品格と云ひ、實に婦人として完全無缺の者ぢやないか。君は那でも嫌ふか。我々は君の幸福が可羨しいのじや。」

吳城は沈黙して居た。澤毛野は彼の語を繼いで、

澤「成程、のう、我々を恚云ふ身の上に爲たのも、謂うて見りや彼の夫人の業かも知れん、(固より罪は此方に在るが)然しぢや、今日に到つて見ると、僕は善う夫人の精神が解つたから、此の處刑を受けた事に就いて、毫も夫人は恨まんのじや。」

此に來て以來月々十分の仕送を受け、又今度の特赦の如き、婦人が我々の爲に盡力されたのは非常なものであつて、没取された我々の財産は、我々が自身に監督するよりは尙善く監督されて、而して之を我々に全然還さるゝのじや。是でも其人を恨む事が出来るか。」

吳城は仍一言を發せざるのである。

兩箇は交るゝ説いて、幾と舌を欄すのであつた。けれども、彼は決して其の初一念を咄嗟の間に斷すのではない、應とも否とも口を開かぬ心の中は、頑として動かす居たのである。

夜も更けたので、兩箇は歸り去つた。吳城も靜に枕に就いて居ると、窺と入つて來た不破瀬は、毎の如く主人の牀の下に寐支度を爲た。

吳「不破瀬。」

不「はッ。殿様には未だお目覺で。」

吳「まあ其處に居て、些と夫人の事に就いて話してくれい。」

不「はッ、何なりとお話し申上げます。」

吳「第一に聞きたいのは。繪蓮の一件だが。那の始末は何云ふのかな。」

是に於て彼は説去り説來り、良二時間に渉つて細大洩さず聞えた。

不「で、此の事件と申すものは、首から尾まで奥方様のお手一つで萬事御處置を遊ばしましたので御座りまして、何かに就けて其の御勇氣の程は、失禮ながら誠にばや驚入りましたもので、殿様の御覽に入れたう存じました。手前は唯今でも目に付いて居りまする。

特に是へ御越に成りまして、晝夜殿様の御看病を遊ばしました御丹精と申す者は、何と申上げやうも御座りませんので、箇様に今日の御體に御本復遊ばされましたも、全く奥方様のお力か、と憚りながら手前は存じまするで御座りまする。其外お留守中の御殿の整理等に就きましては、此で絮々しう申上げませんでも、御歸邸に相成りますれば、奥方様の御配慮の程は直にお了解に成りまする事で、又毎日の御行狀等は手前から申上げまするは恐入りまするで、其邊は繪蓮様から悉しうお聞取を願ひまするで御座りまする。一々聞訖りたる吳城伯は有間無言であつたが。

吳「不破瀬、奈何かして離縁の出來ん事は有るまいのう。」

不「はッ？」

吳「他を離縁したいのだ。」

不「御離縁の殿様、如何に何でも貴方様は取……取……取でも無い事御意遊ばされます。」

彼は滂沱と涙を流して、慄々殿の顔を睨付けた。

不「平素の殿様にもお似合ひ遊ばしません事を仰せられます。假初にも那の奥方様を御離縁などは、嗟乎、何事で御座りませう。」

彌よ紛下る熱涙は彼の皺面を蔽ふばかり。

吳「何を貴様は那樣に泣くのか。」

不「はッ、手前は泣きまするで御座りまする。殿様が餘り非道な事を御意遊ばしますゆゑ、奥方様の御胸中をお察し申上げまして、はい、泣きましたすが如何致しました。」

吳城伯は返す辭も無くて、不興氣に黙して了つた。不破瀬は旋て容を正して、

不「殿様は御大病中の事で何も御存じでは被在られますまいが、唯今も申上げまする通、殿様のお命をお助

寒牡丹

り申しましたのは、奥方様の御看病のお蔭で御座ります。御發病の六日目に御着に成りまして、其場から御枕上に十五日間と申すものは、唯の一時御寝なつた事も無く、夜晝の御看病で御座りました。小鞠野に御在の時分から御心配の絶間は無いので、誠にお惨しいほどお羸れ遊ばしてお在の處を、此方へお越々其の仕合で、又一層の御疲勞は目に見えて、近頃の那の御血色は宛で御病人の狀で御座ります、其が殿様のお目には入りませぬで御座りますか、若し那の奥方様がお在遊しませなんだら、殿様は今頃は此世に被在れるのでは御座りませぬ。」

吳「あゝ、もう可いわ、解つた。」

不「お了解に成りまして御座りますか。」

吳「解つた、解つた。あゝ、睡成つて來た。」

不「然やうなれば御寝なりました。」

爲う事無しに殿は夜着を引被つて了つたのである。

(二十二)

其後雷又は毎に夫と對食する事に成つたのであるが、度重なるほどに吳城も左に右顔色を解いて彼に接する迄に馴れた。病は益す快方に赴いて、今では聲を離れて椅子に掛り得るやうに成つたので、靈泉府と澤毛野とは最早氣遣無ければ頻繁に見舞ふ必要も無いと謂ふのを名として、故と足を遠くする。始終附添ふのは、雷又と不破瀬で、其も交代であるから、半日と一晚夫婦掛向で居る事も有る。外は雪風烈しく、狼の遠吼が聞ゆると云ふ物凄いな夜などは、影幽なる燈火の下に餘念無く縫物をして居る雷又の姿は、抑も如何なる感を彼に與へたであらうか。吳城伯は縦し其人に親まぬまでも、尙ほ飽くまで憎まんとは爲得ぬのであつた。彼の優しさ、可憐さ、麗しさとは日一日と吳城の心を和らぐるのである。身も氷るばかりの夜を獨り寐も遣らず、看護の爲に雷又は室の隅に控へて居た。其の作しげなる容と憂はしき面立とは例ならず吳城の情を動したのだ。

吳「貴方、どうか繪蓮の事件に就いて話を爲て下さいませんか。」

と彼も此時始めて語らしい語を懸けたので、雷又は空谷の聲音を聞くやうに覺えて、慥からず悦んだ。

因で逐一其の物語を爲て、尙ほ繪蓮と己との關係から、小鞠野に於ける生活の模様等まで洩らす打明けた

寒牡丹

のである。吳城は之に因つて又稍密又の真相の一面を伺ひ知るを得た、則ち彼の到底憎むべきものではないと云ふ事を教へられたので。

是から五日ほど経て、吳城伯は少しづつ散歩も出来るやうに成つたので、天氣の好い、暖い日、解け初むる雪を踏んで、兩箇の友を其の小屋に訪ねたが、以前のやうには楽しく感ぜられなかつたので、更に歩を移して密又の小屋に向つた。彼も有繋に長々の看護に憊れて、少し健康を害したので、此二日ばかり引籠つて休養して居るのであつた。

然るに思ひも寄らず殿の入來るのを見るより、密又は慌忙しく寢臺を下りて、先づ懇懇に遊へて、外出の克ふまでの輕快を祝した。吳城伯は身の上に係つた話を爲やうくと勵むるのに、密又は毎に避けて、専ら然あらぬ事のみを話柄と爲るのであつた。

吳「もう近い内に我々は此を引拂ひたいものですな。」

密「然やうで御座います、貴方の御全快遊ばしますのをお待ち申して居りまするので御座いますから、然やうなお鹽梅なれば、徐々支度を致しましても宜いかと存じます。」

吳「時に貴方は御體が悪いやうですが、甚麼具合ですか。」

密「はい、難有う存じます。別に然したる事は御座いませんのですから。」

吳「然しお顔色は良くありませんね。」

密「然やうで御座いますか。」

熟と噴めらるゝのが面蓋さに、彼は思はず手を舉げて顔を撫でた。時に其指に見いたのは吳城の贈つた結婚の指環である。其が目に入ると齊しく彼は忽ち不穩の色を作して、姑く黙したのである。

吳「貴方は今度彼方へお還りになつた上は、何云ふ御考でお在のですか、伺つて置きたいので御座います。恠く有らんとは、密又も夙て期したる事ながら、其場に蒞んで見れば、決して心持は好くなかつた。けれども、彼は露ばかりも未練の色を見せずして

密「私は還りましたらば、田舎へ引込みまして一生を送りませうと存じて居ります。」

吳城は此の意外の答を得て、陰に驚いた體で、

吳「田舎で一生お暮しなさる？」

寒牡丹

雷「然やうで御座いまする。」
殿は俯うつむいて何と無く考へて居る。

雷「其等の事に就きまして、實は篤とお話を申上げませうと存じて居りましたので御座いますが、御病中の事ゆゑ故と今日迄差扣へて居りました。幸ひお話の次手で御座いますから申上げて置きますが、吳城家の御財産は悉すつかり皆 お調べ申しまして、明細に一々記して置きまして御座いますから、どうぞ之を御覽あそばしなして。」

持ち來つた計算表を其へ差置いた。

雷「貴方の御財産のお書付で御座います。」

吳「私の財産？ 私には那樣物は有りませんよ。」

雷「然やうなれば貴方ではお有なさいませんか存じません、然し、私が吳城家の物として保管致して居りましたので御座いますが、いづれ私が田舎へ引込みました後は、貴方が御監督遊ばしませんでは成りませんので御座いますから、此の御書付はお手許へお置き遊ばしなして。」

寒牡丹

吳「いや、それは猶且お心得違でせう。吳城家の財産と云ふものは、既に貴方に所有權が有るのでから、其の書付を他人の私が覗のぞひ見るべきでないのです。又其を私に覗ひ見るのは違勅ちやくの罪に當ります。」
彼は其物に手さへ觸れぬのである。違勅の一言には雷又も差當つて返す辭はなかつた。

雷「もう一件申上げたい事は……………」

吳「何ですか。」

見ると、雷又はいつか俯目ふしめになつて、得も謂はれぬ胸の思を萎ふせるゝ風情であつたが、其のまゝ餘は言はずして、彼の結納ゆひなよの指環ゆびわを抽取ぬきとつて吳城伯の前に差出したのである。彼は唯雷又の顔と指環とを迷交かたみがはりに打眺うたなめて、有問は互に無言であつた。

雷「其は貴方へ御返納いたしますので御座います、どうぞお收め下さいまし。」

吳「之を私へお還付になると有仰るか。」

雷「はゞ。」

吳「何云ふお意で？」

寒牡丹

其時蕾又は極めて冷々ひやひやに、極めて寂しく、將た極めて慵倦もつげに片頬かたはの笑を洩した。
蕾「申上げます迄も御座いません。私よりは善く貴方が御存ごぞんで被在あつます。」

吳「……………」

彼は先の財産の没附を言下に却しりぞけたるやうに潔く之を却けぬのであつた。然のみならず、其よりは是の彌よ上あつたるべきを、全く曉らざる如く持成もてなして過した。

姑く有つて彼は我指なる指環リングに手を掛けた。

吳城伯は此際己の身を思へば大に得意でもあり、又蕾又の切なる心を酌めば憫然びんぜんの至りでもあり、左右どかくは彼の爲に悪からぬやう、今後の處置は恚いかして那あして、と途上みち考へながら、日の暮方に小屋に歸つたのである。

燈ひを點ともして程も無く澤毛野子爵が訪ねて來た。椅子に着くと、ラムプの下に指環の置いて在るのを見付けて、
澤「是は何爲どうしたんじやね。」

吳「奈何も爲せんのさ。僕と夫人との關係が絶れた證なのだ。」

澤毛野は目に稜立かじて彼の顔を視ながら、

澤「ふむ、それぢや是は夫人の指環か。貴様が夫人の手から奪うたのか。」

吳「何、僕が奪ふものか、他ほかから返したのだ。」

澤「それで貴様は受取つたのか。」

吳「受取つたから此に在るのだ。」

澤「今になつて那の夫人を離婚するののか。」

吳「今になつて、と云ふ事が有るものか、始から僕が心を許して居らんのぢやないか。唯今日公然しるしと證しるしの物を取戻した丈だけの事だ。」

彼の語氣は殆ど傲厭へんを脱すると一般に此事を輕々しく思つて居るのであつた。澤毛野は呆あきれ果てて頓とんに出づる言ことばも無く、テエブルの端に兩臂りやううひぢを載せて沈吟ちんぎんして居たが、旋やがて太息ふしきを喟ついて、

澤「嗟乎ああ、無情むじやうな者ものじやのう！ 那程あれほどの夫人を貴様は何故に棄つるのじや。豕ぶたに眞珠しんじゆを投なずる謂そしりを免まぬれんぞ。」

寒牡丹

忽ち色を作したる吳城は、

吳「何、豕ぶたとは誰の事か。」

澤「誰の事か、そりや知らん。但然云ふ諺ことわざが有るじや。己おのれに與へられた物が過分である爲に、却つて其の直打が解らん奴を豕ぶたと云ふ。豕ぶたには眞珠などより芋の尻の方が相當なのじや。唯憐むべきは豕の前に投げられた其の眞珠じやのう。」

吳「あゝ、君は其の眞珠が欲しいと見ゆるな。」

澤「何じやと！」

吳「欲くば遣らうよ、いつでも持つて行き給へ。」

澤「欲しいと僕が何時言うた。」

吳「言つても言はんでも、己の親友を毛族けものに比して、一方を眞珠に喩へるほどの女ならば、君は執心しよしんなのに違ちがひ無いさ。口では欲しいと言はんでも、欲しいと思つて居るのだらう。」

澤「其の通りの没分わかれず時漢ぢやから、貴様は豕じやと言ふのじや。僕は夫人に執心も爲んけりや、決して欲

しいとも思はん、唯……貴様、能う聽け、そう云ふ婦人と結婚する名譽を有ちたいと云ふのじや。若し僕が其の眞珠を獲らるゝ権利が有りや、身を棄てても必ず手に入るゝ、それほど貴たつとく僕は思つて居るのじや。」

澤又が彼の口に藉よつて揚らるゝほど吳城は勃はつ々の不平を禁じ得ぬのである。

吳「善し、僕は豕ぶたなら豕でも可い、豕で満足して居るから君等は一切いっさい管かまつてくれ給ふな。」

澤「然うでないから、貴様もう一遍能う考へ直して見い。のう、是は獨り貴様の爲、又吳城家の爲のみならず、同族の爲に棄こふのじや。」

吳「君も實に解らん。始が那云あつちふ譯の關繫くわんけいの女ぢやないか、其を如何な事にも堂々たる伯爵夫人として、僕が公然と手を把とつて世間へ出られると思ふのか。」

澤「那云ふ關繫であるからとは、何の口で言ふのか。畢竟ひつぽう那云ふ……。」

吳「もう可い！」
と言ふなり彼は座を起つて、怫然ふいと室むろを出て了つた。

(二十三)

雷又は指環を返した後は、助めて其人に一面を合せぬやうに爲るのであつたが、吳城伯は其以來俄に不敏が増して、此方からは助めて會はうとする。因で日毎に行つて訪ぬるのであるが、然して會つて見れば、思ふやうに話をするでもない。それで又難面く遇ふのかと謂へば、決して然うではないので、堅い裏に優しい處が有り、可憐い裏に婉しらしい處が有つて、なかく棄て難く思はるゝのである。向來段々と世話になり、苦勞を爲せた擧句否、應言せず離婚まで爲て見れば、一生忘れじの憎悪も怨恨も痕無く消に去つて彼は今雷又に對して何等の介然たる者もあらぬ。始て雲を排いて月を看たる吳城伯は、月の麗しさを識つたので、憎む可く、嫌ふ可き雷又は、敬す可く、愛す可き雷又の誤解なるを漸く曉るのであつた。靈象府は或日彼に戯るともなく、

靈「君は近來雷又嬢に對する様子が大分變つたではないか、何云ふのかな。」

吳「變つたとは奈何變つたのか。」

靈「愛すべく變つたのじや。」

「那樣事が有るものか！」

靈「有つても差支無い所ではない、然う無けりや成らんのか。」

吳「奈何かしらんが、那樣事は無い！」

彼は飽くまで覺の無い體を裝つて、強て言はと氣色を損じさうなので、靈象府も其場は口を噤んで了つたが、
 「陰に澤毛野に語合つて此の結局を見る事を楽しんで居た。」

吳城伯も今は全癒して、平生の健康に復し、猶又雷又の注意に因つて發送せられた旅費も着したので、いよく出發の一段となつた。はや翌の朝こそは、配所の雪に埋れし身も花の都に還るよと思ふものと、有繫に住馴れし地を棄つる名残も惜まれて、彼の三人は其處此處と馬車を驅つて近邊を逍遙したのである。

此日彼等の胸中に漾へたる愉快は誠に言語道斷であつた。靈象府伯は吳城伯を顧みて、
 靈「今日は特別に景色が好いやうぢやが、彼得堡ぢや到底恁云ふのは見られんの。」

吳「長い間見たから可いだらう。」
 澤「けれども、住めば、のう、此處でも都じや左に右棄つるに忍びんやうな感が有るではないか。」

寒牡丹

靈「有る、有る。いよく都へ還へると成つて見れば、昔の事は夢よ、仇も恨も何も無い、嗚呼好い心持！」

澤「其通り、靈象府先生の言の如しじや。」

靈「吳城伯閣下は如何ですか。」

吳「或は那樣なものかも知れんね。」

澤「或はか？」

吳「或はよ！」

澤「或はよ面白いのう。」

靈「成程或はよ大いに面白い。」

吳「何とでも言ふが可いぞ。」

靈「おと、それなら言ふが、翌の今頃君は雷又嬢と相乗で、此の美しき風景を眺めつゝ行くのじやぞ。」

吳「知らん、知らん！」

と吳城伯は乍ち苦り切つて外の方へ目を反せて了ふ。澤毛野はパイプを垂れるやうに啣へたまゝで笑を合

んで居た。其顔を見て靈象府も同じく笑を含んだのである。馭者は連に鞭を鳴した。

(大團圓)

日數積りて一行の馬車は既にウラル山を踰えて、日一日と歐羅巴露西亞に近きつゝ、二三日の内には彼得堡に着くのである。

吳城伯は或朝早く目覺めて見ると、雷又は頗る打勞れたと覺しく、車の動搖の激しき中に晏然として酣睡して居る。此方に向けたる寐顔に何氣無く目を留めると、涙を垂れし兩行の痕が歴々と頬の上に残つて居る。這は必ず昨夜泣明したのであらうと思へば、然らぬだに今は既に雷又が優しき胸を曉り得たる身には、争で之を見て目も昏れ、心も消ゆるやうに覺えざらんや、彼は我を忘れて夫人の顔を打目成りつゝ衝と擦寄つて其手を握つた。雷又は乍ち驚き覺めて身を起さうと爲ると、殿が吾手を把つて居るので、益す駭いて、然り氣無く引放したのである。吳城も其の唐突を慙ぢて頓に辭も出し得ぬ、雷又は猶更口を開きかねて、手持無沙汰に窓の外を眺めた。

吳「もう程無く旅行も終りますよ。」

寒牡丹

寒牡丹

雷又は縁に頷くのみであつた。

吳「どうも此度は一方ならんお世話に成りまして、お禮の申上げやうも無いのです。貴方は然ぞ私の無情なのをお怒みでありませうが、そりや迫面お詫の爲やうも有らうと考へて居ます。」

雷「いええ、飛だ事を有仰います。私は決してお怒み申すなど云ふ事は御座いませんのですから、然やうな御心配は御無用に遊ばしまして、却つて私こそ心にも無く針ほどの事を棒に致して、御名譽を傷けましたのみならず、那云ふ憂き目をお見せ申しましたのは、皆私の不束から爲しました業で、今と成りましては何と申上げて宜いのやら、どうぞ御勘辨遊ばして下さいませ。」

彼が餘なる可憐さに吳城は胸返りて不覺涙を催した。

吳「あゝ、恐入りました！ 今まで匿して居つた罪を自状します。嘗て酒興の上で貴方を苦めたのは私です！」

雷「そんなら貴方が?」

吳「赦して下さい！」

彼は情極つて再び雷又の手を取つた。

本意ならぬ契を籠めしは、靈象府にあらず、澤毛野にあらずとは、己に業に雷又も推し得て居たのである。然りながら、的然其の人の口頭より出づるを聴きては、更に更に謂ふべからざる感に打れて、憎きか、悲きか、可怨しきか、可耻きか、將又口惜きか、嬉しきか、心は忽ち異しく亂るまゝに、岸破と其處に打伏して了つた。

此の刹那に吳城の心機は一轉したり。彼は忙しく時計の鎖子を搜つて、其に附けたる雷又の返せし指環を放ち去つて、片手に女を抱き起せば、今更何を爲るならん、と身を振解くを、男の力にぐつと引寄せ有無を言はせず彼の指環を其指に穿した。雷又は呆れ惑ひて直に拔取らんとするを、際と抑へて、

吳「どうぞ其は改めてお受け下さい、どうぞ、どうぞ。私が前非を悔い、罪を謝し、而して貴方へ恩を返す其が證であります。私は最愛の妻として一生貴方を棄てません。貴方も一生私を忘れずに……。」

雷又は涙に咽んで言ふ所を知らぬのである。馬は忽ち足掻を逸めて駐車場に着いた。靈象府と澤毛野とは

寒牡丹

寒牡丹

聲々こまごまに外方とのかたより呼はる、
「ああ、下りんか。」
「食事じや、食事じや。」

(をばり)



(一)

蘇格蘭スコットランドの極端とつばくれはケイスネスと稱なふる州くわ、三方を海に圍まれて、東は北海に面し、北はオークニイス諸島と相對して、西から掛けて北太西洋を控へて居ります。日本にすれば、北海道の北見國とも謂ふべき位置、北見の尖端は北緯四十五度四十分許に位するが、ケイスネスは五十八度二十分、未だ十二度餘も北へ據つて居る、して見ると心細い所に違無い。其の東濱にマンジイと云ふ殆ど無人境の荒地があるが、此海岸に點然と立つて居るのが石造の孤屋、如何にも希有な具合

は判じ物を見るやう。
孤屋ひごつやと謂へば、一概がいに掘立の小屋のやうに聞ゆるが、決して然うでない、間敷の六間も有る二階造で、中古に古りた建物であるが、最も念入に岩盤なる普請は、漁師などの棲家ではない。さて何者の宿かと謂ふに、崩邊きうへんの寒日かんじつ惨として光無し、沙草さそうは天に連りて白狼を走らすとも唱ふべき僻地であるから、人家としては周囲五六哩が間に此一軒の外には、前岸むかうがしのフアーガスネスと云のに漁師の家が二軒あるばかり。凡そ目に見ゆる物と謂つては、前灣ぜんわんの浪と、家の後に當つて一帯の禿山はげやま、他は大空と一面の沙地ぐらゐ、逆も人の住

心中船

へることはない。此の物凄じい中に、何の爲に家を建てたものか、而して何人が住居するのか、是から山越をして道の三里も行く、二三の小村がある。それへ折々此家の主が散歩に出るのを見掛けると、マンジイの氣違地主が来たと言つて、村の者は仕事を止めて目を側てるのであります。

其の氣違地主と謂ふのは、名を幕邊地順と呼んで、齡は廿五六の、學者風の紳士。瘠せて軀の高い、色澤の悪い船持らしい、髪を長くして始終考へ込んで居ると見える、決して精神病者ではないが、何處か變つて居る。是の履歴の一段であるが、固より恠る邊土に生れた者ではない。此の二年ほど前に倫敦の方から移住して来て、其迄は辯護士の職を執つて居たのでありましたが、法律は其志ではなくて、進まぬながら訴訟事務を扱ふのも、糊口の爲、自身は最も幽玄の道を好んで哲學に耽り、兼ねて格物究理に心を川かて理化學の蘊奥を明めるのであります。

昔から凝固つた學者には得て有る一癖で、世の中の事が一々愚にも付かなくて可煩くて、人の爲るほどの事は片端から箱に障ると謂ふ大の偏人。因で一向親友も無ければ、然したる相識とても無い、己も世間が嫌ひなれば、世間も己を嫌ふと見えるので、益す世間が面白くないから、左右に引籠んで研究三昧に隠れる、

愈よ世間には遠くなる。で、自ら人間以外に超然として我獨り高い了簡になつて了ふばかりであるから、這摩辯護士は餘り行きません。

所が、不圖した争から事が募つて、人と決闘を致し、勝負に勝つたのは可いが敵手をば殺して了つたので、爾來と云ふものは、益す世間から疎まれ果て、識らぬ人さへ幕邊地に逢ふと顔を背けて通る始末。除では不義の犯罪人か、極悪人か何ぞのやうに噂をするので、事務所は寂れる、外へ出るのも不快で、閉籠つて居れば居るで心快々として樂まぬ。如何かなして此面白からぬ世間を逃れて好む所の研究に身を委ねて、心閑に暮されるやうな山の中へでも隠れたいと、そののみ日暮に念ふのでありましたが、山の中へ隠れた日には第一食ふのに差支へる、行つても行らんでも辯護士の看板を掛けて居れば、又如何にかそれで立行く、お茶の濁せないのは山の中。噫人間といふ者はよく淺薄なもので、飯が食ひたいばかりに齷齪して何と云ふ事は無しに唯齷齪爲死に死んで了ふのかと觀ずれば、いつそ潔く自ら死んで苦樂の境を脱した方が、未だく志の高いやうな考も起る。其に就けて、益す苟くも生を食つて居るのが馬鹿馬鹿しくなるが、さて一思に我と我手に掛けかぬる人の命、懊惱として空しく其日を過して居りました。

すると、遽に伯父なる某が病死、此人は嘗て衆議院議長の椅子をも占めたほどの身分で、資産も饒であつたから幕邊地はゆくりなくも其の形見頼に預り、實からざる若干の金額に地面を附けて譲られました。其の金額は利子で一生を過されるほど、又地面と云ふのは則ち此のマンジイであります。至つて慾の無い幕邊地の事であるから、唯貰つた物に不足などを言ふのではなかつたが、あれほどの伯父の遺産として配分される數の傍の中でも貧乏圖を引いたのは自分であらうと思つたので、同じ地面でも遠島を申付けられさうな北の北の其の又北の盡頭の海岸など來ては、實に難有迷惑の至で、有緊に這醜醜い地を與れやうとは意外千萬でありました。然し、前述の人物であるから、平生伯父の所へも寄付かず、寄付いた所で、餘り可愛がられる格ではなかつたのでありませう。

(一一)

何に爲よ窮北の無人境を戴いたのは遠の偏人も幾分か驚いたのであるが、其頃は決闘事件の有つた當座、いと人交ひが可厭で可厭で、隱遁の志、急なる際に打着つたのに、一生不自由は爲ぬ事になつたのであるから、渡に船と事務所を燃んで、日來欲いと念つた哲學書類を首として、理化學機械、試験川の藥品等を咥

と買込んで、早速此地に移住したと云ふ次第。まづ這際事情でもなくては、到底都育の人間が一月と辛抱の出来る處ではない、宜く罪無くして配所の月を着るべき處。

さて、此家の六間は獨身者には無論廣過るので、二階の二間は理化學の試験室に寢所、下が居間に備邊の部屋、残る二間は全て空虚であります。年來の本懐を遂げた幕邊地順は、さあ此方の天下だと云ふ意氣籠で、晝の中は試験室に立籠つて、朝から蒸溜したり、分析したりで、食事も忘れることがある。夜になれば居間に入つてベエコン、デカアト、スピノザ、カントと好きな程讀むのであります。氣が倦む時は濱を散歩して、仰いで天の宏大なる、俯しては海の壯快なるを眺めて、獨り大いに樂まうと謂ふので、一艘の短艇をも繋ぎ置いて、浪の靜な日には之に乗つて遊ぶこともある。此の艇を繋いだ所から鼻の前に見えるのが此濱の名所で、濫襪礁といふがあります。是は名の如く海面に濫襪を浮べたやうな磯礁の礁が、怪魚の脊を晒はしたる状を成して、長く横つて居るので、東風が吹く時には、高浪が之に激して打揚げる勢は可恐くも目覺しい、迅雷のはためくに劣らざる響を發して、飛散る飛沫は雨より繁く、此の孤屋を越して裏の禿山に降りかゝる。折々漂流する船が此に吹着けられては、濫襪礁に乗揚げて粉微塵になる、漁師などは痛

く懼れてマンジイの船と謂ふと能く知つて居る。此船には怪物があつて、終始周遊に遊んで居ると傳へるので、其かあらぬか幕邊地は度々奇々怪々な形をした大魚の浮ぶのを親しく睹るのであります。それらは敢て驚くにも足らずとして居たが、此の理學者にも不思議の解けぬのは、静な夜に此に来ると、水の底ではあるが那邊とも知れず、女の悲鳴するやうな聲が聞ゆる、それが凡そ三十秒毎に断えたり、續いたりして、波の高低に随つて或は浮び、或は沈み、或は往き、或は復る。左に右此の濫礁礁は、四邊の一體に單純無味なるに比して、名所とすべき趣味は有るのであります。

偏人は偏人で、幕邊地は今では此に二年餘も住着いて、格別繁華の都會が戀しいと懐ふでもなく、研究三昧で暮して居ります。右様に書は試験室に入り限り、夜は全然讀書に耽るのであるから、家内は主従二人暮しであるが、本の川談の外は一口の話を爲ることも無いから、恐しく其の寂しいことは、人が住んで居るのやら居ないのやら判らぬくらゐ。幕邊地の友とする所は、家の外的大海、人間と云ふものは氣障なもので、對手に爲るのも滿らぬが、其に引易へて、汲めども盡きざる深い意味の有るのは自然であると、絶か海の廣大深遠を觀じて、唯之に對して浩然の氣を養ふのであります。

(三)

爰に一大椿事の起つたのは六月の事でありました。悪い天氣が三日も續いて、四日目は虚のやうな晴霽とした日和。海邊ながら一髪を動す風も吹かず、夕春日は山陰に棚引く紫の雲に隠れて、油を湛ふると見ゆる海面は殘照の茜に染められ、汀の干潟は一面に眞黄な沙に、沙の退残した小流の縦横に亂れたのが夕榮をした處は、大合戦の趾に血潮を流したる如く、浪も音無く、禿山は靜に、宛然油畫を展べたる如く黄昏れ、遙に東の沖合を望めば、水平線上に密着して一團の怪しき亂雲が顯れて、大氣の低く壓して人に逼るのは察するに旋て一暴來るべき前徴と思ひながらも別に心配を爲るのでもなく、戸を閉ぢ、灯を點して例の如く書見を致して居ると、恰も九時と云ふ頃案の定沖合が鳴出して颯々と吹き起る勢は尋常の風でない、次第に烈しく十一時にも迫れば、立派な颯となつて、凄じき海の暴れやう。眞夜中過ると覺しき時分には、吹募つた大東風は冢ぐるみ引擡つて行くかどばかりに當てる。風と浪との響に天地動鳴して、此海濱は攪旋されるかと疑はれる一大天變。此の二年が間に會て個程の暴風には出會はぬのであります。少しく風立つても彼の濫礁礁に打當てる浪の飛沫は屋根を越すと云ふのであるから、寢所の窓の戸は今にも破れるばかりに、大雨

を瀧々浪の飛沫と共に、海草、小石の類が吹飛んで来て、其可騒いことは、幾多悟つた幕邊地でも寢ては居られませぬ。霧々と鳴る風は息をも繼せず襲ひ来れば、浪は襲々と問近に打揚げる。然しながら是等の風に得堪へぬ家屋でもない、少々浪が寄せやうとも築固めた石造であるから安心なもので、高を括つた幕邊地は起さやうとも致しませぬ。備邊は素より海岸育、這際事には慣れたもので、まさか高舩も掻かぬが、起きて主の處へ見舞を言ひに来るのでもない。彼地でも臥て居れば、此地でも臥て居るので、家内は例に因つて例の如く寂然としたもの。敢て懼れは爲ぬにしても、物音が烈しいので幕邊地は睡に就きかねました。ぱちりぱちりと目を開いて居る内に一時が鳴り、二時、三時、少し過ぎた頃寢所の戸を劇しく敲き立て、金切聲を振つて呼はるのは婆さんであります。不意を吃つて駭いた主は、あはや、懸聲から滾落ちんとして、「何か、何か!」と聲を掛ると、婆さんは何に動頭したのか怪しからず急込んで居る。

「旦那様、離船がござりますよ。襤褸礁の邊に離船が……早く助けて遣りませんとや、もう今に押沈んで了ひまするがな」

恚う嗚鳴れた日には、泡を吃つて夢中で飛出すのが人情であるが、そこは哲學者の偏人であるから少しも騒

きませぬ。唯首を擡げたばかりで、

「ええ、聒しい。船が沈まうと沈むまいと、貴様の關つた事ではないでないか。餘計な事を心配せずと歸つて寢よ、寢よ。」

と言ふかと思ふと、直に又頭から毛布を引被つて了ひました。是では如何にも無慈悲、窓の外に離船があるのを高枕で居ると云ふのは、抑も人の情として忍びざる所。然し幕邊地のは他は如何でも可いと云ふ利己主義から割出した殘刻ではないので、抑も此人の哲學と謂つば、總じて人たるものゝ身の上に死ぬといふのは何でもない事と立てある。既に今日生きて居るのが空々寂々として、一向行らぬ譯のものであるから、其の活の根の止るのも悔むべきではない。況て今離破して居る船中の者共は、既に半は恐怖の境を過ぎて、今や一步にして死の門に入るのであつて見れば、其を救れるには、一旦過た恐怖の境を又復らなければならぬ。其こそ要らざる苦艱を重ねる譯。それで活きたところで、どれほどの效が有るものか。天命定つて今死ぬべきを、一時遁に免れた所で、後に一度は同じ想を爲すばならぬものを、何時死ぬも死ぬは一つであるからは、時節の來つた時に潔く死ぬが天命を全うするもので、救はれる必要も無ければ、又我等が横合か

ら出て其を救ふ必要も無いと、這様に考へながら眠に就かうとしたのであります。然るにだに調子の外れた人の哲學であるから耐らぬが、決して暮邊地なる人間が殘刻なのではなくて、究竟其の學問が理の極端に走つて居るので、其が爲に殘刻を殘刻とも思はぬのであります。學理の上から爾く信ずる暮邊地は全く不便とも助けて遣りたいとも思はぬのであります。其上に日來世間を厭ひ其の間の人を疾む學者の事であるから、恚る場合に臨んでは一層冷々淡々としたものであります。成程可哀の、氣の毒の云ふ心は動かさぬにしても、目前に船が沈没する、人が溺死する、實に稀に見る所の一大椿事、所謂後學の爲にそれは見たいと云ふ念が起ると、見やうかと考へながら、其際であらうかと難破の光景が思浮べられると、又決して快い心持はしませぬ。快い心持が爲ぬでは可かぬ、快いも不快もない、死は猶歸るが如しであるものを聊たりとも此際に處して心を動されるやうでは、平生抱くところの人生觀は極めて薄弱なものであると考へ直して、心靜に枕に就かうとすると、驚地と吹來る一陣の猛風を劈いて、爆然と響いた銃聲は轟と肝先に應へて、知る是難破船上より放つたる危急の合圖。之を聞いては哲學者ももう耐りかねて、懸身を飛下りるや否や身支度をして立出でる。

慌てゝ出は出たものゝ決して救助する覺悟ではなく、猶且見物の氣と見えて、獅子頭か何かを彫つた大首の煙管を啣へて出掛けたのは、有緊に落付いたもの、外に出るに煙管などの段ではない、天地を震撼する強風は砂を捲き、礫を揚げて、浪を飛して面も向けられぬ。文目も分かぬ闇の中を、風に吹振らるゝ莢の火は赤い絲を引くやうに火花を散して、一步出れば二歩吹戻されるといふ勢。矢面の一番乗を爲るやうに體を斜に、射向の袖と翳す肱の陰に俯して無二無三に進み行くほどに、浪の音の烈しく聞ゆるは、はや渚に近いとかど面を擧げる途端、さんぶと引被つた潮の飛沫、踏跟と突戻さるゝのを然知つたりと踏懸へながら飛脱けさうな帽子を引側めて海上を窺つたが、何が何やら驚々と鳴るばかりで目に入る物も無い。浪打際には未だ間もあるらしいが、潮を被るので、迂濶と進むことも出来ぬ。難破船は何處に在りや、人聲なりと、爲さうなもの、礁の方角を志して濱に沿つて足搜に少しづつ進みながら心を配つて居ると不意に藍色の光が一點間近の海上に燃立ちました。愕然として見遣る違も無く其光は忽ち瀾つて樽内一面に燃遍る。果せる哉、藍燧礁の正中に一艘の大船が横つて居ります。件の光は其の甲板の上で難破の報知の色火を燃したので、岸から凡そ二百ヤードの邊に舳を礁に突掛けて五十度ばかりに鯨鋒立をして、此方から甲板の上が全く見

ゆる位。船は二本マストの大形スクウナで、網具つかなかたの附方つかなかたなどから察するに外國船である。小山を崩すやうな高浪は前後左右から採みに採んで、甲板デッキを跳越おびりこえて、泡立あはたつ凄じさは、一面に眞黒の海が其船の周まわり邊だけ白く隈取くまきつて、雪に降埋ふりつもれたやう。見ると、へどくに疲れ果てた水夫が十人餘いづれも索梯なははしこに縋なり付いて、はや援たすけを呼ぶ力も盡きたる様子。其中に四五人が首を擧げて陸の方を覗はらんで居たが、幕邊地まくべちが立つて居るのを見付けたかして、顔に手を挿さつて何分の救助を求めたのでありましたが、例の物凄さものすごさ藍色の光に照されて、一様に九死一生の形相が歴々ありくと見ゆる。中にも目を牽ひいたのは、一人の長の高い男が一同とは離れて、左舷さげんの柵欄ブルックの側に突立つて、熱と頭を俛かれて、時々船體を胸し、又は濱の方を望んで、窮愁きうしゅう面に溢れて居るが、更に躁さうぐ氣色けしきも無く、十分覺悟を極めたる振舞。船は殆ど覆らんとして、激浪脚げきろうきゃくを没すと云ふ危機一髪ばいぱんの間に立つて、如此かくのごとく從容しやうよう薄らざるは、所詮しよせん凡人の爲し得る業わざでない。覺悟の好い奴は見好いものだ、那あなければならぬ、と遙に之を見たる幕邊地は我を忘るゝばかり感に堪へて、眼を放たず其人を眺めて居りまする。

此時運し、被時速し、おそろくと鳴つた浪は屏風倒びやうふたたましに船を目掛けて墮落くじれおつると、甲板は暫し其下に埋つて、旋やがて魚の浮び出でたやうに又顯れたのを見れば、前柱ばしらは中程からばつぎと折れて、無殘にも在りつる十餘人の水夫は影も形も無い。彼の長高たけたかい一人のみは全身に潮を浴びながら、依然いぜんとして元の處に立つて居るのであります。幕邊地は手に汗を握つて之も潮を被るのも風に吹れるのも、殆ど辨無わきまなく、此の壯絶さうせつ快絶くわいの狀を眺め入つて居る。すると、めりくと云ふ音が聞えると與に、鯨鋒立くじはこたをして居た船體が少しく後へ退けたのは、礁いばの鋭い脊が船底を撞破かきやぶつたものと見える。後甲板の左舷うしろデッキに立つた件の男は、此時逸早く後桅はしらに馳寄つたが、其處には白い包のやうな物が括り付けて在つたが、其を纏まといて引寄せたのを見れば、紛まがふ方無い一箇ひひとりの女。さあ愈よ出で愈よ奇なる有様に、幕邊地は固唾かたじを嚥のんで視て居ります。男は其女に向つて、何か物を言ふ體てら。恐らくは此船の急を告げて臨終りんじゆうの覺悟を勧めたのもあらうか。女は忽ち抱かかへられて居る體を振解よのほかうとした、はてなと思ふと、手を抗あげた、何を爲るのかと思ふと、男の面しやつ貌つらを絶たか打据うえた。それでも男は手暴てあらなことを爲るでもなく、又物儘もののまましげに寄添よきつて、何か説聞せつもんかせる様子。遙に見て居るのであるから能くは解らぬが、左に右女は男を束根そつこん嫌きらつて居るらしい。早くも寄添よきふ男の傍そばを退かうとするのを、無圖むづと引寄せ、差理無理さしりむり女の顔ひたひに接吻せつぶんを致した。未だ其の唇くちわの顔を離れず

るに、猛然と躍りかかつた高浪は二人を引襲んで了ふかと思れば男は心得たりと女を引擔ぐより早く、兩の手を目よりも高く差擧げたから、女の體は波の上に浮出たが、憐むべし、男は全く水漬になつて、兩手から幸くも顯れて居るばかり。其浪の落ちなんとする比には色火の光も消々に、白き服を着た女の帆柱の下に隠れて居るのは見えたが、彼の男の姿の無いのは、先の十餘人と同じ道に底の藻屑と成り果てたのであります。此運を以て推すに、船の沈没に先つて、折角獨り生還つた彼の女も早晚氷葬されるに極つた、慘又慘。死は常事なり、平氣にして之を受くべしと悟つた哲學者も可哀の者やといふ念が起ると齊しく、内に燃立つ血氣の爲に前後を忘れて、干潟に揚げたる短艇に驅寄り、曳々と引摺つて、辛くも波に泛べると翻り飛乗る。這麼孱弱い小船が此の荒浪の中を満足に行かれやうか、此期に臨んで那樣分別も何も有つたものではない、唯見殺にするのは可哀などいふ一念ばかりで漕出したので、此船で此浪を截る、無理は始から知れて居る、直に顛覆らないのが餘程不思議なくらゐ。木片の如く簸揚される短艇は舞起つ浪の頂に載せられては、虚空に姑く漂ふかと思れば、忽ち崩落つる浪間に墜下せられては、簀の中へ打込れるやう。颯々と揉みに揉まれて良十五六間も乗出した頃、息急き駈着けたのは備婆であります。南無三、旦那は氣が違つたそ

うな。それ沈むわ、死ぬわと地靴を踏んで、返せ戻せと聲を限に呼びます。短艇は浪に弄ばれながら次第に岸を離れるので、暮邊地は一心不亂に櫂を握つて、舵を取直し取直し、難破船を目掛けて漕寄せやうと死力を盡す。覺束なくも幾分か志す方へ近くので、櫂を手繰りながら頭を回して前途を見遣れば、甲板の色火は痕無く消えて、漆の如き眞の闇をば風と浪とが隨意に暴れるばかり、軸を撃つて碎けては、牙を鳴すが如く泡立つ涙の其かと紛ひながらも、若やと思はれる物の漂ふのを見たので、猿臂を伸ばせば衣の手觸りであるから、道さじと引寄せれば、案に違はず女の骸。一番間違つて機を吃へば、するりと捲かれて其なりけり、遣るか、取るかの命、險い處を船の中へ引摺り揚げて、再び櫂を把らうとした時は、波の爲に軸を回らされて、方角を失つて了つた。所へ推寄せた大浪は船の胸腹を蹴つて、忽ち高く擡げながら引摺れたと思ふと、そのまゝするくと眞倒落に突落されて、呀や、呀やと思ふこと三度ばかりで、櫂も何も使へた譯のものではない、體の滾がされぬ算段を爲るだけはやうく、奈何なる事かと心も空に、電の駈るやうに吹流される舟の疾さに膽を冷して居ると、突抜に擡と投飛されたのが砂の上。浪は驚と返して、自分は女を抱へたまゝ舟の外へ擡出されて、二間も隔てた處に轉けて居るのであります。耳元に呼ぶ聲がするの

で、漸く頭を擧げると、婆さんが躍上つて無事を慶んで居る。夢か、寤か、と謂ふのは此事で、實に萬死を出でて一生を得たのであります。恚して無事で居つて見ると、今更おのれの無法を呆れて、避に身寒戦が出る。那の荒浪の中へ此の短艇で漕出したのか！ 其さへ生きて還られることの難いのに、人を救つて恙無いとは、命冥加と謂はうか、天の佑と謂はうか、萬一の僥倖と謂はうかと、嗟と大息を吐きました。見れば、救上げた女は身動もせず儼然して居る。試に胸先に耳を當てると、微に心臓の鼓動が残つて居るので、婆さんの手を假りて、直に内へ鼻を込みました。婆さんは早速火を焚付けます、其傍に正體の無い女を臥して、介抱は宜しく一切彼に委せて、暮邊地はもう是までと云ふ氣色で、すうと寢所へ入つて了ひました。之に就けても、偏人は偏人に違無い、然ばかりの命懸で救つた女でありながら、幾歳約であるのか、甚麽顔立であるのか、全く知らぬので、知らぬのではない、知らうとも爲ぬので、而して我が内に連れて來ても、格別見やうとも爲ずに引籠んで了つて、大きに慥れたので、懸尊の上に仰向に臥て、昏々として居る所へ、婆さんの慌忙しく斬着ける物音、はつと驚く途端に耳元近く、部屋の外から嘍嗚り立てます。

「旦那さま、旦那さまー」

「何か、何か。」

「活復りましただ。」

「あゝ然うか。」

「可愛らしい娘、子ですよ。」

「然うか。」

「早う來て見なさいませんかよう、好えく線致だかな。」

是に於て暮邊地は恠へかねて一喝した。

「はゝ、那樣ものは見んとも可いから、其方始末して早く寝して遣らんか。」

(四)

其夜が明放れると、昨夜は夢かと想はれるほど打つて易つた好天氣であります。早起の暮邊地は未だ鎮つて居る家内を其儘にして、起拔に濱へ出て、昨夜の名残を尋ねたが、磯に碎くる浪も面白さ眺望、なか

五時間前に船を覆した氣色もありませぬ。彼のスクウナは何處へ往つたやら、その形見の材片が一つ見當らぬ。此邊は極めて潮が悪くて、浪の下に暗流が在るから、早くも何地へか推流したものと見える。恰も難破の有つた上を二羽の鷗が翼を張つて、水底に何ぞ見付けたものでもあるやうに、相呼び、相應へて其處を離れず飛回つて居ります。一時間ほども散歩して歸つて來ると、門口に立つて出迎へて居るのは、彼の救上げた娘。年は漸く十九約で、軀の纖削とした、大きく睜つたやうな碧い目に絶か愛嬌のある、齒の美しいことは輝くばかりで、可愛らしい裏に才氣が満ちて居る。昨夜の今朝であるから凄く蒼白い顔をして居るのが透明るやう。練々とした金色の髪を緩く束ねて婆さんの借着をして居ります。既に之を水葬して了はうとしたのは勿體もない美形、女などには目も與れぬ幕邊地が露も滴るやうに麗しく感じたのであります。娘は幕邊地の戸口に近く所を然も嬉しげに駆寄つて、握手を致さうとして大理石で彫つたやうな手を出しました。其の美しいので禮を致さうと云ふのを、幕邊地は乞食の手か何そのやうに見向かうとも爲す、傲然と其前を通つて奥へ入りました。婦人の尊敬される歐羅巴諸國の習俗として、苟くも婦人から握手を求めて、其に應じないと謂ふのは、日本で頭を下げて禮をなすのに澄して居るよりは一層の無禮、寧ろ恥辱を與へ

るのであります。然無くても、恚う爲れては娘氣には忪へられず可恥い。命を助けられた大恩人なれば、無禮も恥辱も厭はぬが、然りとては情を辨へぬ今の振舞は人か、鬼かど、便の無い身にはいと心細さに、涙を一杯浮べて、幕邊地の後姿を可恨げに眺めて居りました。此方は幕邊地、勿々と居間に入つて椅子に掛けると、いつか娘も後から跟いて來て、壁側に佇んで、疑懼自分を視て居るから、

「貴方、お國は何處ですか。」

と訊ねると、首を掉つて、少しく笑ひかけたばかりで言は無い。成程、外國の者であるから語が通ぜぬのであらうと氣が着いたから、

「佛蘭西? 獨逸? 西班牙?」

と國の名を並べると、一々首を掉つて、終に愛らしい聲をして喋々と物語るのであつたが、今度は更に幕邊地の方へ通じません。因で此談判も不調の状態で、朝飯となりました。さて何處の國の者であるか、語が不通では手掛りも無いので、何ぞ得る所が有りそうなものど、幕邊地はもう一度難破の跡へ搜索に出掛けました。例の短艇に乗つて濠洲礁の邊を漕廻ると、唯存る岩の狭間に板片が介つて居る。能く視れば短艇の船尾

柱の一部であるから、陸へ引揚げて来て點検すると妙な形の文字が書いてある、ア、カングルと讀まれた。ア、カングルと謂ふのは露西亞の白海に臨んだ都會であります。

「は、あ、さては露西亞人だな。然し露西亞から此の蘇格蘭までと云つては、非常に飛離れて居て、此の年頃の娘などが来るべき所でない。無論漂流したのであらうけれど、何所へ渡らうとしたのか知らん。」ア、カングルだけは解つたが、其外は猶且解りません。歸つてから娘に向つて、類にア、カングルといふ語を言つて見たが、是も通じが無い様子。それなら恚か那かと工夫して是非知りた、と謂ふやうな娑婆氣の極無い幕邊地であるから、其儘にして試験室に入つて了つた。然う恚うする内に中食となつて、呼ばれるから出て来ると、卓子の傍で娘は一心に針を持つて、乾した着物の縫袋か何かを縫つて居ります。旋に相對になると、娘は又何か解らぬ語で話を爲かけるのであるが、他でも解らぬと思ふから一言毎に手眞似をして、氣を揉んで物語る。段々見て居ると、船の難破した方を指しては自分を指して、種々に手眞似を爲るのが、同船の者は皆死んで、助けられたのは其身一人か、と訊ねるらしい。因で幕邊地は頷いて見せれば、娘は椅子を飛起つて、躍り上りく歡び叫ぶのであります。

おのれ一人が命冥加に助けられたのは如何様嬉しくもあらうが、同船の者が死絶えたのは然ぞ悲くも心細からうと思はれるのに、此の悦び状は何事であるか、と幕邊地は呆氣に奪れて居ると、綴つて居た着物の端を取つて、頭の上で揮回すやら、右に左に拂ふやらして、面白く足拍子を取つて躍り始めた。其體の輕いとは、風に鳥の羽の舞ふが如く、細く鋭い聲を中音に張つて田舎唄らしい節で謳ひながら、居間の内を四面八角に浮れ回つて居たが、段々興に乗じて庭へ飛出して又其處で無上に躍つて居る。顔に態に満心の歡が溢れて見える、眞に狂喜と謂ふのは是であらうと思はれる。變な奴が有るものだ、と幕邊地は額に八字を寄せて、窓から眺めて居ると、好い加減に踏を罷めて、衝と駈込んで来た彼の娘は、今度は又内で始めるのかと思へば、聲をも掛けず傍に寄つて来たので、幕邊地は左の手で推遣らんとすると矢庭に其手を取へてチウくと接吻を致した。何で那樣に嬉しいのか、幕邊地の哲學も之を識るに苦んだのであります。其日の中食後であります、幕邊地は口を拭つて、是から莢を吃さうといふ所へ、娘は鉛筆を持つて来て、紙片の端に何やら書いて見せるから、把つて讀めば、蘭路壽美としてあります。それは我名であると手眞似をして、件の鉛筆と紙とを幕邊地の前に押付けて、名を聞かせてくれ、と又手眞似を爲る。何の彼の可煩い事、

遺棄ものゝ對手になつて居られるものか、と幕邊地は鉛筆を衣兜へ擲ひ込んで、ついと起つて試験室へ入つて了りました。餘りの不便さに助けは爲たものゝ、飛んでもない厄介物を昇ぎ込んだ。恚して見ると、あのまゝ見殺にした方が寧ろ可かつた。那の娘の命を救つたのは、彼の爲に幾許の益が有るのであらう、而して又己としては、彼の存亡が何等の關する所あるのであらう。躁つて行らん事を爲たものだ、と例の哲學が勃々として出て来て、類なる後悔。此上は一刻も早く何地へなりと送り届けたいのであるが、言語不通で何處の者とも解りかねる。村役場へ届けて處置を爲せれば、それで事は済むが、行らん小役人等が遣つて来て、小面倒臭いこと、那等の顔を見るよりは、未だ娘に居られた方が氣分が良い。と謂つて何時まで厄介にして捨れるものではない。困つた事に成つたぞ。實に一日でも安からぬのが世の習、這處地でも愛世の内であるか。世の交を絶つた意の幕邊地順でも、人間として生きて居る限は、可煩しい事が纏綿して離れぬか、それに引易へて可羨しいのは、彼の雲の悠々、彼の水の濛々、如此くして始めて其の天真を全うするものである。と太く考込んで持扱つたのであります。

(五)

夕方に濱を散歩するのが幕邊地の習慣であります。日は山の端に傾いて見渡せば、平沙遠く連り、穏波千里明に、淡彩の浦景色は格別の風情。時に因ると書物を携へて、眺望の好い所へ行つて讀むこともある。此日も一巻を手にして、軟に乾いた砂の上に寝轉んで、夕陽の明を便に書を披いて居たが、忽ち目の前に人影が映したので、弟と顔を擧げると、二三間彼方に見上げるばかりの大の男が轟然と立つて居る。人の此に在りとは心着かざる體で、視線は幕邊地の頭の上を過ぎて、遠く濱の景色、襤褸岩の邊をば鋭い眼色をして熱と眺めて居る。天から降つたるか、地から湧いたるか、爰等に人の居るべき理が無いに、而も殿しい大男が立つて居るのであるから、幕邊地は肝が潰れた。抑も何處より來たる何者ならんと、熟ら彼の異人の相貌を看れば、筋骨飽くまで強く、身の長も之に稱つて見事の大兵。面の色は淡墨の如く、髪は黒くして蓬々と掻亂れ、髪は縮れて短く、尖れる鼻は鷹の嘴に似て、眼光の疾み視るが如く、見くのは射目と謂ふので、一癖も二癖も有るべき面魂。兩の耳朶には燦燦と金の耳飾を擧げて、上には色褪せたる青天鷲絨のジャケットを着して、赤フランネルの襦袢、海上靴と稱へる長靴の膝に到るまでのを穿つて、落日を脊に大海を前にして屹然と立つたる姿は、物語の藪などを看る心地であるが、實際に之を暗たる幕邊地は、奇

怪に過ぎて可憐く感じたのであります。

猶能く見れば、驚く可き哉、彼の難破船上に立つて悪怖れざりし長高き男であるから、思はず蹶起して、

「はろう！ 能く無事でお出でしたな。」

此聲にはつと幕邊地を見向いた件の男は、初対面の人と云つて格別改つた會釋を爲るでもなく、例の傲然として、

「はい、平氣なものです。」

と是も露西亞人であらうが、上手に英語を遣ひます。

「浪に捲込まれましたが、對岸の二人の漁師が親切に助けられました。助からんでも可い命は助つて

……私はあるまゝ死んだ方が所望であつたです。」

と悵然として海の方を望見するのであります。

「死んだ方が所望……」と云ふ一言が酷く幕邊地の氣に入つた。

「はあ、それは妙だ。而して其の死にたいと言われるのは何爲ですか。」

彼の男は太息を吐きながら少しく幕邊地の方に向直つて、

「那の礁邊には私の魂、私の寶、私の命に易へて愛する者が沈んで居るのです。昨夜一處に死なうんだが如

何にも残念、怒ひ助けられたのが恨ですわい。」

「成程。然し此世に毎日人は死んで行くのだから、那樣に執着することはありませんよ。」

と其の「死にたい」も所以を聞いて見れば難有くも何ともなくなつて、幕邊地は此奴も蠢々たる搔撫の俗

物と、もう對手に爲る氣は無い。

「話は別ですが、此は僕の地面内ですからね、いつまでも居られては甚だ迷惑をするで、早く立退いて下さ

ませ。實は貴方の仲間が一人家に居て、既に迷惑して居るのですが。」

「え私の仲間？ それでは助つた者がありますか。」

と意外の想に顔色も變へた。

「一人有るですから、貴方に連れて行つて貰ひたい。」

「うむ」と未だ眞偽を疑ふ氣色で、幕邊地の顔を睨めて居たが、何思ひけん、矢庭に身を翻して、孤屋の方

を目掛けて飛鳥の如く疾走した。其の疾さと云ふものは、連も人間業とは想はれぬくらゐ。幕邊地は駭いて、彼奴何を爲るか、と直に起つて、後れじと續いたが、其の男の早いく此方が一間飛ぬ内に五間も走るので、殆ど息が切れて、あはや躓き仆れんとする頃に、男は早くも行着いて、川捨も無く我家へ闖入したから、然なきだに曲解的の幕邊地は憤るまい事か、おのれ狼籍者と、黒煙を立てるばかりに憤激したのは可いが、脚は踏跟海月が涙に濡れるやうな恰好をして、奮つて追掛けた。漸く門口に着くと、内に聞ゆるは娘の叫聲、首争ふと覺しい男の高聲もするのであります。さてこそ曲事に及ぶな、と憤然として躍込めば、娘は居間の隅に身を蜷め、顔の色を變へて顔へて居る。彼の男は追廻して居ると云ふ状で、室の真中に立塞つて、屹と娘を見据ゑて、急込調子に例の解らぬ語で辯じて居れば、娘は惶れながらも隙を窺つて兎脱けんと呼吸を量つて居る。

衝と其中へ割つて入つた幕邊地は、彼の男を押戻しながら、

「貴方は一體何ですか。是は僕の住居だが、誰の許可を得てお入んなすつた？ 怪しからん、お控へなさい。」

と一喝すると、彼の男は速に容を改めて、

「いや、甚だ失禮を致しまして何とも申譯ございませぬ。お話を致さんければ解りませぬが……。」

「いや幾多話をしたとて、他の家宅に侵入する理屈があるものか。」

「其段は私の疎忽であります、幾重にもお詫を致しまする。」

「詫などには及ばんから早くお出なさい。」

「姑くお待を。ええ、實は此者は私の家内で、お蔭を以て一命を助かり……。」

「何ですか。一體貴方は何方ですか。」

「はあ、私はア、カングルから参つた者で、露西亞人であります。」

「お名前は何？」

「大醫生と申すので。」

「はあ、而して此の婦人を御家内と有仰るか。」

「左様。」

「誰を言ひ給へ。」

「ええ。」と絶然としたのであります。

是は誰でも絶然とする。我が家内だと言ふのに、不見不恥の他人が誰なりと反駁するのは無法も極まる。

「夫婦たる者の姓を同うするのは天下の通則。何ですか、貴方は大蟹生、此の婦人は蘭路齋実と云ふのでありますせんか、姓の違ふのは第一に夫婦でない證據。第二には、婦人の手に指環が無い。夫婦とは言はせません。」

と幕邊地は居丈高になつて喝破する。

「勿論那樣儀式的の夫婦ではない。姓が違はうが、指環が無からうが、天帝の御前に堅く誓つた我々、他人の知つたことではない、私の家内であるから私の自由になる。さうぞお渡下さい。」

娘は何の間にか幕邊地の脊後へ廻つて、其手に佛と細付いて離れぬのは、窮鳥懐に入る風情、助けてくれと唯嚮待む意と知れました。

「成りません、決して渡しません！ 夫婦と認めることが出来んから渡しません。」
此に於いて大蟹生は切齒を爲して怒つた。

「夫たる者の目から夫婦であると公言するのに、認めることが出来んとは、何が認めることが出来んのです。」

と脊後に庇つた娘を一寸見返つて、

「御覽なさい、此體は何ですか。妻たる者が麼道に夫を懼れ嫌ふ障がありますか。相愛するのが夫婦。愛せざるものは決して夫婦でない。さあ、長居をされては僕の勉強の妨碍だ、早くお歸り下さい。」

「それぢや貴方は其言をお渡し下さいませんな。」

「固より！」

「宜しい。屹と取つて見せるから。」

と無念を懐へる大蟹生の面色の凄さ。此方も夥しく刺の強いのであるから、發言棄を買はずに引込ちのではない。矢庭に爐の傍に在つた薪雜把を取つて、

「取つて見せる。此方は追出して見せるから。さあ早く出て行かんか。」

と撃ちも蒐らんず勢。大蟹生は手出しを爲うか爲まいか、と暫く遲ふ體でありましたが、二人を睨廻し

て、ふいと室外へ出ましたから、素直に還るか、奈何かと、幕邊地は追つて出ると、門を出たる大蟹生は忽ち取つて返して来て、

「能く氣をお着けなさい。自分の妻は自分の自由にする。蘇格蘭人も男なら露西亞人も男だ。」

「それが奈何した。」

「覺えて居れ。」

「何を！」と言ふ間に大蟹生は後をも見ずして、昂々と山手を指して歸つて行きます。

(六)

さるほどに其後一月餘は何等の事も起らず、彼の娘はづる／＼つたりに家族とも付かず、厄介者とも付かず此に暮して居ましたが、其の長い間幕邊地は彼に向つて一言の語を掛けるのでもなく、又娘の方でも、第一言語は通ぜず、始終の様子で慥云ふ人物と合點して、物を言掛けぬに極めて了つたのであります。男の方は無類の偏人であるから、それも出来やうが、常の人情として、毎日一つ家に居て朝夕に顔を合せて居ながら打解けずには居られるものではない。五日七日と日千の經つに連れて娘の方からは心易くして、幕邊

地が試験室に閉籠つて勉強して居ると、物と入つて来て、傍で見物をして居ると云ふのが初發。

氣が感して邪覺になるので、追出さうと爲るがなか／＼出て行かぬ、而して甚麼甚麼苦い顔をして居やうが、毎日必ず傍へ来ては大人しく控へて居る。それで物を言掛けるのでもなければ、手出し一つ爲るのでもないから、然して妨礙にもならぬので、後には幕邊地も放つて措くのであります。

恚して毎日々々傍に來ては見て居る内に、自と覺えて、器械などの持運を手傳ふやうになつて見ると、有繫に重寶して、萬更捨てたものでもない。一寸ペンを取らせる、試験管を持せる、乃至は藥瓶を取つてくれ、机の上を片付けろ、何の彼のと用に立つこと夥しい。それで極めて慧くて、爲る事が行遍つて居て、深切で、痒い所に手が達くのであります。けれども幕邊地は之を美しい娘が世話をしてくれるとは考へるのではなくて、一種自動機が運轉して居るぐらゐに無雜作に重寶するのであります。

娘は家の外へとては些の二三間より遠く出ることが無い。其の出るにも、先づ彼方此方の窓から顔を出して、四邊に人氣の無いのを十分に見澄して、をさ／＼油断せぬのは、彼の夫と名乗る大蟹生が猶ほ此邊を徘徊して附視ふのを懼れるので。或日そこらに突込んで在つた一斑の拳銃を搜し出して、一日掛りで精々と磨い

て、油を引いて、少許すこしばかり彈丸の在つたのを小さな袋に入れて、右の銃と共に居間の口へ懸置いて、幕邊地が散歩に出る時と云へば必ず其を持せて出します、誠に心利こころきいたる所業はたらき。幕邊地が出ると直に堅く戸鎖かじりをして、外を覗のぞきもさせぬ。

彼の大蟹生を嫌ひ、再び連行かるゝのを懼るゝのは一方ならぬもので、片時も緩ゆるき心地は無いやうに想はれるが、家の内では如何にも楽しさうに、間まが有れば婆ばさんの手助をして、煮物もすれば掃除もする、家政の事は何でも遣つて退ける。誠に效々かひなくしく自ら進んで、我が世帯でも賄まかふやうに、好すいた同士が夫婦になつて、手鍋てなべを挈さげた當座と謂ふ様子。

遠き露西亞の果から吹流されて、然も恚かる邊土へんじの何思出ととも無く、追々はるる來つる同船の道連みちづれには死別れ、幸に其身一人は生残りながら、何時いつ如何にして故郷へ歸るべき當とともあらぬに、何が日にも悲しい顔も爲せず働いて居るのは、抑も何故であるか、氣の知れぬ女もあつたものだ、と常人ととも餘り氣の知れた方ではない幕邊地が不思議に考へたくらぬ。早く還して丁ぢひたいと思つた厄介物も、然しては邪覺にもならず、相應に重寶して見れば、忘るゝともなく始末を付けやうと云ふ念は消えて、今では幕邊地も何と無く家族の一人に

思おもひなすのでありました。さて此に於いて何分か妬やげざるを得ざるのは古參こさんの備婆やとひばさん。妬やげると云つても、色戀の沙汰には限りません。自分などは三年も神妙に勤めて居る間に、唯の一度快こころよく試験室へ入れられた事も無いに、何處の馬の骨だか知れぬ者ものを、始終しじゆう傍そばに引付けて置いて御用を爲せる。それだから娘も増長して、行處ゆきところもない厄介者の癖くせに、此頃では悪く差出て我物わがもの顔がほに家内を攪か旋せんす。那あの分では今に自分を呼捨よこにして、洗よれ物の洗濯まで爲させやうも知れぬと、自然ぜんぜん女手をんなでの無い世帯では、此の婆ばさんが取割とりしきつて家事向萬端心のまゝに世話いたして、我が天下も同様であつたので、それが生若なせわかい者に出でて來られて、横槍よこやりを入れられると見たから、婆さんたるものゝ胸中は甚だ平たいでない。因そこで妬やける、拗すねると云ふ不穩ふえんの形勢も見えたのであるが、旦那殿だんなどのと來たら、那樣事そんないことは一向にお通じ無しの無鈍なだんち者もので、又娘は飽あくまで物優ものやさしい氣立きだての上に利發と云ふのであるから、獨ひとりで激昂げききやうした所で喧嘩にもならぬのであります。其等よりは未ま九婆さんの我折つたのは、娘にばかり目を掛けて、媒あまやかすから悪いとして居た旦那殿に、全く那樣氣振そんないけぶりは無ない、と漸く解つて見ると、娘の仕草しぐさも差出るのではない、何も深切しんせつ盡じんと従つて目が覺めたので、家内は再び安全。婆さんも舊來ふるく通り勤篤まかに働はたらきます。娘は益えきす居馴ゐなんで、全く望郷ぼうきやうの念などは無いやう。但未だ

に用心殿しく、汗潤と外へは出ぬ、出ても四五間内を覗くばかりで、不相變態々として居る。

或夜の事幕邊地は腦の加減で如何にしても眠られぬのでありましたから、懸懸を下りて、海景色など眺めんと窓の外を窺へば、月は有りながら曇つて居るのに、硝子越であるから、模糊と海が白く、繫いてある短艇の影が微に見ゆるばかり。それから眼を轉して、山手の方から家の四邊を一順問すと、目に留つたのは、婆さんと娘との寢間の窓下に當つて蠢く人影。確に何者か家を覗ふと覺えたから、熟と瞳を据えたが風體などは隙に判りかねる。折から娘と吹出でたる風に、姑く有ると、雲を掃はれた月影は、速に灯を點したやうに皎々と四面を照す。隈無く見え遍つたのは其の人の正體、殆んど忘るるばかり久しく姿を見せざりし大蟹生が、慕の如く蹶つて、家内の寢息などを聽澄す體であります。さては來たな、執念深い奴めが、「取つて見せる」と言居つたのは、恚して取る氣か。其方が盗出さうと云ふ意ならば、此方も盗人の待遇をして、手短に此から一發の下に爲止めて與れやうか、と弗と思つたが、いや、何等の罪も無い者の命を斷つのは道でない。思へば、彼の難破の折の膽力の見事さ、多く獲易からぬ男の中の男一匹、然ほどの者が取るにも足らぬ娘風情に思を碎いて、大にも劣る煩悩の振舞、見るも淺ましく悪なものではあるが、

又不便の心根。何爲るか、捨置いた所で、此家の鎖が彼が力で抉れるものではないと思ふから、別に誰かも爲すに、幕邊地は再び枕に就きました。果して夜が明けても家内に別條は無い。然し、何ぞ爲たかと、其蹟を検べたが、何處に忍入らうと企てた證據も遺してない。

(七)

それざりばたと影を見せぬのであつたが、幕邊地は試験室に一夜劇薬の悪氣を嗅いだ爲に、夥しく氣分が悪いので、或朝短艇に乗つて、三四哩も遙傳ひを漕いで、喉の乾きの堪へ難きに、地境近く清水の流があるから、其を汲まうと舟を寄せたのは、右の流の海に注ぐ口で、隣地面になります。それから上つて水を飲み、汗を拭いて寛りと一憩して立去らんとする所へ、隠然と顯れた大蟹生。彼奴出沒窮無く何處に潜んで居るのか、悪い奴に會つたと思ふから、素知らぬ顔をして衝と脱げやうとすると聲を掛ける。

「貴方暫く。」

「用ですか。」と申譯ばかりに振向いた、其の不承々々の幕邊地の顔と謂ふものは、何とも替へんやうが無い。無人相が不承々々と謂ふのであるから推して知る可し。

「少々お話を致したいのですが、何とお聞き下さるまいか。」

私に折入つて頼むのでありましたが、一國者の暮邊地であるから折入らうが、入るまいが、那樣婆婆臭い用捨は無い。

「あゝ、滿らん愚痴などは聞きたくないですね。」

「愚痴ですと？」

絶とした大蟹生は直に氣を變へて、

「實に貴方のやうな方も寡い、蘇格人は一體然う云ふ氣風か知りませんが、貴方は餘り慳貪。私の助けられた二人の漁師、暴氣の漁師でさへ那して深切に優しい處があるのに、紳士たる貴方の言ふ事、爲す事が人を人とも思はず、少しでも御遠慮の無いには驚入りました。然し、それも面々の氣質で、貴方と雖も心には却つて毒は無いのであらうと考へます。」

「奈何あらうと僕は僕です。僕は又貴方の顔を見ると癪に障つてならんですから……。」

「それは何爲でせうか。那樣に言つて下さらんでも可いちやありませんか。うむ、是だ之を御覽下さい。」

天鵞絨の上衣の衣兜から取出したのは、小形なる希臘式の十字架。

「貴方とは生國は違ふ、宗旨も違ふが、戴く神は一體。その同じ神の子ではありませんか。」

「奈何か知らん。」

餘りと言へば無法の答に、大蟹生も呆れて手が着けられぬのであります。何と言つたら可からう、と當惑して偏人の顔を眺めて居ましたが、

「實に貴方のやうに變つて居る人はありませんな。私には逆も貴方の性質は解りかねる。こりや察するに、那の齋美の事に就いて誤解を爲すつて、私を敵視して居られるに違無い。然うでありませう、なあ。若し然うである、つまり誤解の爲に貴方が太い迷惑をなさるやうな事が出来、來せうも知れん、それでは甚だ貴方にお氣の毒。無理に引留めてもお話をしたいと謂ふのも唯其故で、決して我田へ水を引くのではない、自分等の事で元來縁も因も無い貴方に御難儀を懸けては、如何にも相濟まんと思ふから申すのです。」

それは何云ふ譯かと謂へば、私は心から那の娘を愛して居るので、他を我物にする爲には、火水の中に飛入つても苦しくない、命を捨てても惜くないと、それは何程の苦心をしたか、お話に成らない。その艱難苦勞

をした事を思へば、貴方一人ぐらゐの邪冤を拂ふのは何でもない事、失敬ながら此で貴方の命を取るのも易い事だ。然し、お聞き下さい、私も此の通り十字架を肌身に着けて居るのですから、決して無法な事は爲ません。又命より大事の那の壽美を助けて下さつた大恩人の貴方、忝いとこそ思へ、那樣心は毛頭持ちませぬ。折入つてお願申すのでありますから、切無い私の心中を察して、どうぞ那の者をお渡し下さいませ。壽美が命を助けて下さる慈悲があるなら、死ぬにも勝る苦しい思をして居る大醫生をもお助け下さいませ。御恩の程は決して忘れませんで。」

紋鰐の淵に立ち、風波の險を冒して、笑つて死を見る強の者も、戀には脆き情の露を兩眼に湛へて、見るも可哀に弱々と頼入るのであります。幕邊地は頑としたもので、

「御尤。然し、お聞き下さい、僕が邪冤をして、何處迄も那の婦人を貴方の手へ渡さんと謂ふのではありませんよ。懼れて居る者が有るから保護してくれいと、懇々も本人から頼まれたのだ。譯は知らんが、宜しいと一言引承けた以上は、僕も男子だ。貴方から甚麼に言れたとて、本人が不承知なのに、明に他へ渡しては、男の一分に關るから、今爰で僕の手から引渡すことは金輪際出来ん。」

固より何の縁も無い婦人を僕が引留めて置く譯がない、家が有らうから其へ還して遣らんければならないで、貴方先づ本國へお帰りなさい。這麼邊鄙の浪と砂ばかりの處に、いつまで居たとて何の面白くもないでせう。

早速お帰りなさい。貴方が相違無く歸國したといふ證明が立ち次第、僕は直に那の婦人をエデンバラの露西亞領事館まで送届けて、而して領事館から相當の手續を経て本國へ送らせるから、其上で貴方が受取らうと、何爲うと勝手だ。それで照然と理窟は立つて居るぢやありませんか。貴方も歴とした男子、見ともない振舞が有つては恥辱ですぞ。然も無ければ、僕も命に懸けて那の婦人を人手には渡さんですよ。」

體は瘦減けて伶仃として居るが、熱血燃ゆるが如く、突張つた剛情は、自ら信ずる所を寸も枉げるのではない。平生命などは大事でない幕邊地の主義であるから、罷り間違へば隨分爰で刺違へて死にもする覺悟、意氣凜然として言放つ。大醫生も幾と持餘したので。

「命に懸けても那の者をお渡し下さらんと云ふ、貴方の主意が何も解りかねる。或は私の手に渡ると彼が無法な目に遭されはせんか、と云ふ御懸念でもあるのではありませんかな。然うでせう、いや那樣事なら御懸念には及びません。前々も申した通り、他の爲には一命も惜まん男、それが假初にも手暴な事が出来ませ

うか。貴方が御承知下さらんのは、究竟其の御疑があるからでせう。それとも外に謂があるのですかな。」
「まあ那樣事は奈何でも可い。」

理非をも辨へず、飽くまで鼻の頭で遇ふと見た大蟹生は牙を咬み、眦を裂いて、鬚々追寄せながら、
「宜しい、そんなら謂も聞かまい。貴方の心底は解つて居る。私が是までに情を懸けて居るものを、若も
貴方が悪作劇でも爲うと謂ふのなら、其分には差惜きませんぞ。」

握緊めたる兩の拳は顔つて、今にも飛蒐つて、吭を一擱にもせんずる勢。是は幕邊地が言を濁して、
左右に娘を渡さぬのは、彼を横奪して自由に爲る下心が有るのではないかと疑つたので、戀には先づつ
が嫉妬、恚う氣を廻すのも無理は無いので、誰にしても是は怪まずに居られぬのであるから、血眼になつて
追廻して居る大蟹生の心には、疑念の滿々たるは避く可からざる事情。餘り頑に不承知を唱へるから、さ
てはと是に始めて鬱積した疑念勃發したのであります。

幕邊地も對手の氣色が尋常ならぬのを見て、
「何を爲るか！」と言ふなり用意の短銃に手を掛けて、

「此體に指でも觸つたら貴様の命は亡いで。」

之を聞くと大蟹生も衣兜に手を入れたから、さては隠し持つたる兇器は飛道具か、打物か、此方も同じく衣
兜の内に銃把を握つて、呼吸を圖つて居れば、すつと取出したのは、短銃でもなければ、又でもない、太い
紙巻莖と蠟燭枝、手早く火を點けて、悠然と煙を吹いたのであります。幕邊地は魅されたやうな氣持で、
嘘咭と彼の様子を眺めるより外は無い。

三服ほど燻して、それで漸く急立つ胸を鎮めた鹽梅、幾分か聲を和げて、又言出す。

「私はお話をした通り大蟹生と申して、名は有橋と謂ふ者で。フヒンランド（露國）の産でありますが、家業
が廻船であるから常に出行いて、全世界を家として居りましたが、此の兩三年専らア、カンゲルからオー
トラリア航路の往來を始めたので、一所不住ながらもア、カンゲルを故郷同様にして居りました。

其中に思染めたのが那の娘、二人が中には約束も出来て、末は夫婦にならうと女も其氣でありました處、諾
威のハンマフェストへ象牙の仕入に出た留守中、近所に生白けた小僧上りの奴が居て、是か夙て壽美を附け
つ廻しつして居ると聞いて居りましたが、何の間にか此奴と出来合つたとは夢にも知らず、那の打壞した船

も此春自分の持物となり、今度の航海で少許纏つた金も手に入つたので、歸つたら式を擧げて年來の思を遂げやうと、喜び勇んで歸つて來ると、丁度其日が二人の婚禮と云ふので、今揃つて會堂へ出向く處だと、海の上まで其の噂。

壽美と大蟹生が約束した中だと云ふことは、恐く港中に知らん者は無いのでした。其の大蟹生が出し抜られて、三文奴に爲て遣られた日には、船諸共に沖合へ出て、何百尋の水底に此の恥面を洗めて了はんければ成らぬ仕儀。今此時が己の素首を落されるより大事の危場と、直に短艇を下して、乗込したのが八人の水夫、是は長年手下に附けて、相應に面倒を見て遣つた奴等ばかり、まあ私の爲なら命を投出して働いてくれる子分でありましたから、之に内意を含めると、それ合點と、唯一息に漕付けて、足を空に推飛したのが會堂です。

驚と躍り込んだのが、婚禮の真最中。和尚の前に夫婦着飾つて並んで居る處を、彼の八人が寄つて聚つて青二才を撲飛す、私は突如壽美を引昇いで、列席の客の呆れて手も出さん中を難無く伴れ退いて、本船へ擡つて來たのであります。追手の蒐らん内と、直様錨を揚げて、白海を越してア、カンゲルの見えなくなる邊

まで一延に延しました。甚麼憂さ目に遣ふことかと、駭いて居る娘が、可哀さうやら、氣毒やらで、決して無法な事を爲るではないから、どうか安心させたいと思へば、私は自分の部屋を明渡して、其に單身入れ置いて、自分は水夫どもと一處に前甲板の下に合宿して、それは出来るだけ大事に、不自由させんやうに取扱ふて遣りました。

然して船中で一つに居る内には、自然壽美も氣を取直して、昔の約束の有る私の事であるから、又つい添ふ心にもならう、すれば、英吉利か佛蘭西へでも行つて結婚式を擧げやう、と這際に念ふて、毎日々々帆を揚げ通して走るほどに、北海角も段々消えて、諾威の海岸が淡々と目に入る頃になつても、なかく思返すのではない、言へば言ふほど附上つて、彼の青二才が事を思切らんのですがな。

其内に那の暴風を吃つて、長年丹精して漸く手に入れた船は沈める、船に換へられん壽美は浪に取られる、我命は助つたところで、一生の望も絶えて見れば、有つて全然有効の無い命。凡そ私のやうな不仕合の者は、此世界に二人とはあるまい、と其を考へると生きて居る空は無いのでありましたわ。

其の折から壽美が無事でお宅に居る姿を見た時の私の嬉しさ。噫、好う生きて居てくれた、自分ながら私も

好う生きて居たぞ、全く天の結び給ふ縁に疑無い。是迄にして戀慕ふ男の心中が解つたら、如何な女でも我を折つて、必ず不便と思ふてくれるであらう。二人が二人死ぬ思をしたのも、皆の者が揃ふて命の亡いに、唯二人生遣つたも、未掛けて生死を借にせよとの神の告かど、餘りの嬉しさに可愧ながら前後を忘れて、無断でお宅へ駈入つたのであります。這麼に心を碎いても、毒美は私の情には絆されんか、不見不識の他國人の貴方を頼んでも、私が自由になるまいと爲る。如何に猛獸惡蛇でも、是程心を盡したら随分馴れもせうと想ふに那の優しい毒美が、何で片意地に恚うも私を嫌ふでせうか。私は又何の因果で、恚うも嫌はるゝ毒美が可愛うてく忘れられんのでありませうか。」

言々肺腑を出で、人は憎まず、身を恨むのであります。幕邊地は生煎を爲んばかりの顔色で、

「好い加減にして措いたら奈何ですか。高が一婦女子の爲に、何で那樣に心を費すのですか、其の戀が協つたら奈何なるのです。又協はんければ奈何なるのです。死物狂になつて追廻すほどの直打は無いではありませんか。然し、其の戀が協はんで、到底諦められんと謂ふならば、極容易に諦められる法があるですにな。」

「はあ、其は。」

「自殺をしますので。」

「私に自殺をしろ。」

「然やう。」と幕邊地は南瓜の蒂を落すぐらゐに、然も手軽く言ふのであるから、愈よ愚弄されるやうで、大蟹生の心中は沸返るばかり、それでも奈何かして妻直に戀人を渡して貰はうと思ふから、熱と慄へて、

「それは自殺を恐れるではありませんが、今の場合で私が此儘目を瞑れるものか、瞑れんものか、貴方も少しは私の思を察して下さい。」

「愚痴だ、愚痴だ。想つたよりは貴方は没分曉的だ。那樣者の相手になつて話をして居る邊は無い。これでお別れ申す。」

と言ふなり後をも見ずして蹣跚と幕邊地は渚を指して急ぐ。大蟹生は追蒐けく、

「私は話の始をお聞かせ申したから、是非此の結末をお目に懸けんければならん。屹と覺てお在なさい。」幕邊地は空耳を走かして、匆々と舟を漕出す。馬鹿な奴も有れば有るものだと思ひながら、大分乗出して振

返つて見れば、大蟹生は化石したやうに波打際に突立つて、此方を無念さうに打目成つて居る。暫有つて又見返ると、はや何處へ往つたのか、姿は見えぬ。

(八)

又此後凡そ二月も別條無く過ぎたのであるが、暮邊地は散歩に出る折々に、海濱の砂地に靴の跡のあるのを見付ける事もあれば、又或時は裏手の岡へも行けば、其處から家の様子が眼下に見ゆる邊に、紙巻莖の吸殻を棄てて在ることもあつたので、さては彼の大蟹生其後は弗と姿を見せぬけれど、不相變執着して此の邊を徘徊して居るなど曉りました。因で、多少用心はして居たが一向家の近間に立廻る様子も無い。

次には娘の身の上、是までも別條無く、暮邊地は例に因つて冷々淡々たるもので、大蟹生に向つては、命に懸けて保護する、と兩肌脱で力を入れて居るやうな口上ではあつたが、本人に對しては那樣氣振のけの字も無い。際限無く寄寓して居るからとて可厭さうな顔色を爲るでもなければ、手助をして善く働いてくれると云ふので嬉しうと云ふのもないのであります。はや幾月といふ懸意の間、家族同様に生活して居るのでありながら、相應に打解けた所が有るのでもなく、殆ど當初と同じと謂つて宜しい。幾多重寶するからとて、

自動機械に對して愛情の起らう筈が無い、まづ那麼態で、話にも成らんくらゐ二人の間は無難でありました。如何なるものか、故郷もあらうし、戀人ある譯の娘は、益々居馴染で、今では婆さんよりも勝手を覚えて、何から何迄家内の事は手一杯に、己の務のやうにして骨を音ます働く。其上に試験室の助手は頗る巧者になつて、暮邊地が研究しながら其事を咳くのが癖である所から、いつか聞覚えた言を口吟みながら用を勤める。全く家をも身をも忘れて居る様子であります。それで、敢て主に懇慕したやうな氣色のあるではない、然し這麼海と砂とばかりの處の、而も一向面白くもない家に、這麼偏屈の主に冊いて居るが、決して可厭で務ることではないから、其處には何とか其處があるであらうが、其の其處たるや得て知るべからずでありました。却つて説く、或日の事、同じ一日でありながら、暮邊地は痛く疲勞して、三日も一氣に勉強したやうに、半病人の心地がするので、如何にも耐りかねるので、午後五時頃でありました、試験室を出て、ちと長い散歩でもして見やうと、久しぶり彼の禿山を登つたのであるが、始めて氣の着いたのは、尋常ならざる海の氣色、一面背疊を敷いたる如く小波が一つ立たず、滑に解り返つて居ながら、何處となく寄せ來る沖鳴は、遠く人の群集する響のやう。はてな、又今夜あたり暴風が來るわいと思ひながら、山の巔を逍遙して居り

ました。

夕日は右左に蜿蜒と連る禿山を染めて、海面の返照は眩く人顔に輝くほど露遍つて居ながら、大氣は重たらしく、而して何と無く冷ついで、沖鳴は次第々々に高く聞える。空は拭つたやうに雲の片も無いが、霞は一杯に水平線を蔽つて、小暗き途の東を一艘の帆前船が逆帆を揚げてキツク港の方へ急ぐ。又近くは二艘の漁船が時ならぬに前後を争つて歸帆するなど、頗る不穩の形勢であります。それで何分にも氣が落付かぬので、速に歸宅を急いで、はや半哩の距離とも覺しき道まで來る折から、何とも知れず微に耳底に響く異様の聲。はつと立住つて暮邊地は耳を傾けるが、二度と其聲は爲すに、海の響と風の戦の外は聞えぬのであるから、空耳であつたか、と一足踏出す拍子に又ひいと聞えた。今度のは先より烈しく、後の山彦に應へられて疑ふべくもあらず女の悲鳴。確に家の方角と思へば、ぞつくり胸に應へたので、暮邊地は駈けたがく、砂煙を蹴立て、脚骨も折れなば折れよと、精根の續く限走りに走つたのであります。住居から四半哩も距てた處に小高い岡があつて、之に登れば、海岸を一目に見晴す、大蟹生の出没したのも此處で。暮邊地は喘ぎく是に辿着いて、屹と住居の方を見遣れば、石造の孤屋は更なり、岸に繋いだ短

艇までも呼べば應へんばかり。すると又一時起る叫聲が耳を貫くので、何事であるのかと、眼を睜つて聲する方を視れば、我家の門から飛出した人影は長の高い大蟹生。

暮邊地の胸は驚と轟くと共に、又目に着いたのは、白い物を肩に引昇いで居るが、毒美であります。勿論手籠にして引擡つて行くのであるが、其の様子は、出来るだけ手柔に働りながら肩に載せて、上では持つて行かれまいと、一生懸命に腕いてく腕を抜くのぞ、種々に待つて、少しでも痛い目を見せまいと云ふ心遣。如何にも壞れ物を扱ふやうにして、それで軽々と走つて行く、大力でなければ克はぬ業であります。後から追掛けるのは婆さんで、齒の無い老犬が賊の蹤を追ふやうに、何處までも通さじと跟いては行くが、飛兎つて蓄ひ付く氣力も無い、唯無性に蘇格訛りの奇異な聲をして喚きながら踐踏と走つて、今にも打僵れさうな足取。追手よりは十四五間も先になつて居る大蟹生は、短艇へ載せて立退く下心と覺しく、汀へ向つて一散に走る。如何なる健脚有りとも、空を翔る翼を假るにあらざれば、今から駈けたとて到底及ぶことではない。然りと知つても、此體を見ながら駈けずに居られるものではない、左も右も駈けながら弗と心着いたのは用意の飛道具是に在り、舟を出すには多少の暇取るが天の與、其の間なりと近寄

るならば漕行く彼を一丸に殪すといふ望が有る、何でう猶豫すべきと、再び勇を鼓して疾走した。汀に着くまで全く夢中で、目に入るのは岸を離る、舟ばかり。打轉けるやうになりながら嬉しや波打際に來たと思へば、舟は凡そ二百ヤードも漕出したのであります。大蟹生は體を反して力の限り漕行くのであつたが、幕邊地の馳着けた姿を見ると、何思ひけん、座を立つたから、矢頃は遠くとも一念の彈丸、やばか敵を見て放たで措くべきかと、規を定めて、轟然と火蓋は切つたが、駭は無。立上つた大蟹生は此方に向つて恭しく腰を屈めて一禮を致し、更に訣別の手を揮るのであります。其の謹嚴の振舞は、憎き敵なり、遺恨は胸も斷る、ばかりの幕邊地であつたが、決して勝誇つた嘲弄、是見よがしの侮蔑の意は無くて、誠の底から其の厚恩を謝すると知らる、のであります。

然れども、胸中沸くが如き幕邊地は幾と狂氣の體で浪とも砂とも分かず蹂躪りく、無念の切齒を爲したが、終には撞と尻居に倒れて、聲を揚げ、身を顛して、舟の行方を睨極めて居りました。長風萬里の渺々たる穩波に泛べる一孤舟は、靜にして動かざる如く見えながら、影は次第に小さく、マンジイ灣を横截つて、打目成る程に暫くは紛れざりし一つの黒點も、滄紫の雲に隠れて全く消えて了ふ。

肩息响いて疲れ果た眼を移せば、既に暮色は蒼然として後の山手は暗くなつて居る。舟は見えずなる、日は暮れる、望の綱の絶えたる幕邊地順は、猶且濱邊を右に往き左に往きして銃を手にしたま、首を俛れて、いつまでも立去りかねて居るのは、美しい娘に末練があるではない、其の娘に行れたが、残多いでもない、保護してくれと頼れた一言に對して、おのれの失から奪還されたのは、男子の一分が立たぬと謂はうか、肺効無いと謂はうか、癡と謂はうか。千悔、萬恨の爲に獨り愧奮して、渾身の熱血脈を衝いて、耳鳴り頭破れんとするので、漸く婆さんに引摺れて家には歸つたが、なか／＼此の無念が忘れられぬ。食も喉へは通らず、空しく長椅子に靠れて、思廻すほど心の紛亂は益すのであります。九時ともなると忽ち吹出した強風は、去ぬる夜にも劣らじ、打揚る浪の響は地を震し、天を駭かす。此物音を聞いた幕邊地は、躍上つて喜ぶ。

「占めたぞー」

部屋の内を踏躓して度々廻をしては、

「恚なくちやならん、占めたぞー」

と叫んで、風の吹暴れ、波の寄来る度に、地屏板の抜けるほど足踏をするので、驚いた婆さんは驅込んで見舞に来る。

「旦那様奈何なさいましたな。」

晩方の容體では確然發狂したと思つたので。

「婆さん、奈何だ、此の暴風は！」

「又可かない事でござりますよ。」

「馬鹿を言へ！ 恠なくちやならんのだ。」

「何爲でござりまする。」

「何爲でも可いから、彼地へ行つて居れ。」

と婆さんを追遣つて了ふと、直と月外へ飛出しました。

例の如く吹飛されさうな烈風、碎くる浪の飛沫は雨と降沃ぐ中を推切りく、幕邊地は濱へ出て、眞黒暗の澳を眺めて、

眺めて、

「此の暴風で何處へ行かれるものか。舟が覆らんければ、吹戻されて来るのだ。彼奴若し再び此に来たが最後此彈丸を眞額に打込んで遣るぞ。」

幕邊地は濱へ出て其を待つのでありましたが、愈よ益す暴れる風と浪との勢には有聲剛情我慢の幕邊地も敵しかねて、夕方の疲勞はある、然う長く吹暴され、濡しよぼたれて黒暗の中に立つては居られぬので、殘念ながら二時頃に引取つたが、さて寝られぬ。

東の空の白むを合圖に蹶起きて出て見ると風も半は凧いで、海は相應に鎮つたが、灰色の空を掠めて赤黒い雲の飛走る下に、澎湃として捲去り捲来る濁浪、滿目の荒涼たる中に目を牽いたのは、百ヤード許の波の上に浮きつ沈みつして居る物がある。視れば短艇の壞れたので我が所有の其。

「や、遣られたな！」

と幕邊地の八方を眺したのは、乗つた舟が其の狀では二人の身の上が氣遣はれるのであります。すると、多くは距てぬ淺瀬の上を四羽の鷗が頻に舞つて居るから、何となく不審を立てる其の見當を見ると怪しい

物が轉げて居るので、走り寄つて見れば、彼の憎き露西亞人、俯になつて溺死して居る。

之に就けても不便なは彼の娘。同じ最期を遂げたであらうが、何處の浪に漂つて居ることかと、隈無く、四還に眼を配つたが、まだ白んだばかりの空で、遠くは明かに見分け難い。左も右も其の死骸を引揚げやうと、肩に手を掛けて掻起せば、胸の下に敷込んで、確と抱緊めて居るのが娘の死骸であります。藻屑の如く亂したる金色の髪は男の頸に絡み着いて、抱いたる大蟹生の手は最後の念力籠ると覺えて曳けども離れぬ。

二身一體となつて死を同じうせし骸を見たる幕邊地は如何なることにも感動したのであります。舟は破れ岩も劈くる風波の中に一夜が間推揉まれながら、此手を弛めなかつた男の愛の力！ 彼は其言に差はず、我命に身へて此娘を愛したのである、志や堅しと謂ふへし。是迄に戀慕はれた娘は、然ぞや波に飛入る今ほの際には難面き日來の心を翻して、死なば諸共の情を返したことであらう。男の胸に横顔を推當て、取纏つたまゝ目を瞑つた容は、身をも心をも許した倅が見ゆる。別して打笑む如き男の死顔は、生けるに勝る樂有りと知らるるのであります。程無く駈着けた婆さんは一目見るより娘の遺骸に纏つて唯泣頰

れるのを幕邊地は漸く勵して、俱共に見立てた處の砂地を掘つて、二體の屍を同穴に籠めて、其の塚の標と心ばかりの手向とを兼ねて一叢に野の花を栽付けました。

實に計られぬのは人の身の上、女は思はぬ男と臨終し、男は殺されもすべかりし敵の手に葬られ、二人が二人ながら夢にも見ざりし遠國の砂に埋れて幸か不幸か、幽魂永き契を結ぶ奇縁。四十年前の物語として傳へられます。

(をばり)

(一) 武藏の名香
阿刺比亞の林檎



出来なかつたのは、私に遺憾に堪へざる所であります。

先程は高田先生の御披露でありましたが、追而は今日の講談なる者を改良致さうかの考で、五六名打集つて御話を致す事に成つたのであります。其に就きまして、今日は封切の大事の初日でありますから、彼の講談師、落語家が此席に居て聞きましても、成程尤と思ふやうに——勿論辯舌は拙いものではありまするけれど——切て材料を精選して、彼等をして呀と言はしむるやうな者をと考へたのであります。が、歳末の事とて何や彼や多忙中の是非無さに、面白い材料を捜す事も

今日お話を致しまする物語の筋は、既に加賀騒動の中などに取りまして、講談師が説き古して居るさうであります。が、實は今日私の辯ずるのが本家本元、そこが先づ一箇の御聴所であらうと思ひます。私は未だ其加賀騒動を聴いた事が有りませんから、甚麼鹽梅に此筋を取つて辯じて居るやら存じませんけれども、大分似て居るやうに聞きました。然れば、中には御承知の方も有らうかと思ふ。然し、私の辯ずる所は、強ち筋のみを御聴に入れるのではない。日本で元祿頃に起つた武家の騒動の話と、彼のアラビアンナイトの中に在

東西短慮之双

る話と極めて筋が似て居る、似て居るのではない、同根より生じた者でなければ、定て執乎が翻案であらうと想はれるくらゐ。それで彼の有名なるイソップ物語が、寛文頃でありましたか、伊曾保物語として、繪入で翻譯されて居ります所から考へると、或は是もアラビアンナイトの話が長崎あたりに渡つて来て、其を大阪の作者が聞傳へて、此方の筋に引直したものであらうも知れませぬ。果して彼の翻譯なるか、又は暗合であるか、其邊は未だ研究して居りませんから、爰には姑く疑を存して措く。扱其の二つの物語を並べてお話を爲るのでありますから、悉く説くには長時間を要する、で、概略を申上げるのであります、御聽の上で兩々對照して御覽になつたなら、相似た點が頻々現れて来る、そこを面々に味うて御覽になるも亦一興であらうと考へる。其點が又聊か改良の一端の積。

因でいよく本文に入りまするが、先づ表題から御聽に入れる。是が頗る嚴しいもので、割書が附いて居る、「武藏の金香」「アラビアの林檎」是からが二號活字で、「東西短慮之双」は甚麽ものです。元來武藏は鎧でアラビアは馬に極つたものであるが、此の香と林檎とが物語の骨子であるから奈何も致方が無い。

「武藏の金香」の原書は寶永六年の版行で、今より凡そ百九十年前、「本朝諸士百家記」と題して全部十卷、

作者は錦文流と申して相應の上手、文體は西鶴風を學んだ狀が有る。此の「本朝諸士百家記」なる者は、讀んで字の如く、武士に關した様々の物語を集めたもので、其中に

▲武藏國花房奎之丞短慮之事、と云ふ標目が有る。

(一一)

又アラビアン、ナイトの方には「ゼエ、ストオリイ、オフ、ゼエ、スリイ、アプルス」三つの林檎の話と云ふのが出て居る。で、錦文流の金香がアラビアンナイトの林檎と同じ道具に使つてある、金香を使つた所は日本的、そこを林檎とは歐羅巴的で、比較して見ると面白い所が有る。若し是が私の考へた如く翻案であると爲れば、實に文流の手際は結構なもので、奪胎法の妙を極めたりと謂ふべきであります。さて閑話休題として、爰に武藏の國は江戸のさる藩中に花房奎之丞と云ふ壯年の武家、美男であつた。同家中の杉森奥右衛門なる人の娘に「やつ」と云ふ美形が居て、是は女が七歳、男は十九歳の頃より許婚でありまして、やつが十九歳の曉に婚禮を致したのであるが、それより二年ほど経つての話。夫婦の中は極めて好かつたが、或日の事やつは頭が重いと云ふやうな事から續いて心地勝れず、學に就くほどの疾病でもないが、始終氣が鬱

いで、寐たり、起きたり、昔で云ふぶらく病、ヒステリイか何かであつたので有りませう、醫薬も更に験が無く、そのまゝ長引いて二月にも及ぶ始末。最愛の妻が疾つて居るのであるから、李之丞殊の外心痛いたして、是は氣の病であらうから、薬石にては治し難い、不如辭氣を盡して見た事ならば、却つて効が有らうも知れぬ。何ぞ遊山をして見よ、芝居見物などは人混の中で病氣にも障らうから、心の晴々する景色を眺めて、一日静に遊び暮すと云ふやうな事が可らう。折から六月も半の土川前、暑氣の殿しい事は堪へやう、無病の者でも頭痛がする、食事が進まぬで半病人の有様であるから、病人は猶更堪へ難いであらう。家内に籠つて居るは旁宜しくくない、明日は早朝より隅田川に船を浮べて、一日納涼したが可からうと云ふので、妻も喜び早速支度を致して、供には若黨、仲間、乳母に、妣、婢、宰、領としては年久しく仕ふる長尾角左衛門と云ふのが六十三歳になる、狼藉取締の方には餘り役には立たぬが、婦人の供などには持つて来いと云ふ老實の家来。主従十餘人で御座船を爲繕へて是から隅田川へ乗出したのであります。

一日おもしろく遊び暮して、漕民して來たのが兩國橋。其の夕景の賑ひは又格別で、川面に敷並べたやうな納涼船、彼方では三味太鼓で騒ぐ、此方では火花を打揚げる。物真似、陰芝居、赤い行燈を點けて徘徊する。

る食物船、盛に飲む船、躍る船、夜に入るほど出盛るので、船中皆々歸を惜む。やつも物堅い武家育で、箇様な遊山を爲た事が無いから、如何にも物珍しく、夫單身の内の首尾を思ひながらも、居らるゝなら最少し居て保養が爲たい氣色。其を見て取つた角左衛門、何事も私に御任せと船を橋間に繋がせ、此方も景氣に燈を入れて、人々の戯れ興する状を見物して居つた。所が、ついで無く奥方の機嫌が好いので、乳母が勧むるには、他では那の様に賑かにして居りまするのに、此船計が岑寂閑と致して居りまするのも、何とやら異なるものでは御座りませぬか、若しお氣が進みまするならば、幸ひ折琴を持せて参りましたゆゑ、ちと御彈き遊ばしませぬか、と言ふ尾に附いて一同も是非にと所望致します。

(三)

それでは弾いて見やうと云ふので、是から琴を出して、おやつが弾き始めたのであります。旦那に唱はれる一中節とは違つて、上手な爪音が川波に響いて、風も涼しく其船の中から生ずるかど疑はるゝばかりであつたから、噤々して居た四邊の船も何時しか鳴を鎮めて感に堪へたる有様。此方は然うとは知らねど、おのれの深る絃の音の次第に澄徹る面白さに、益す手を盡して奏でる。「當時是ほど弾く人は替女にも又素人に

東西短慮之双

も類稀なる琴の音や、如何なる人ぞ見まほしと、多くの遊船取廻し、差覗き之を見るに、廿歳餘の女中なるが、琴に向へる梯の少し打傾きたれば、零れかゝりたる髪びんの端より匂やかに幽なる顔華は、露を含める花の曙あけぼのに靜なる風のおとづるばかり也」と書いてあるから、見る人心を動かさざるは無かつたので。すると俄に軸みよしの方で騒がしき人聲、勿論恚云ふ場合に出べき長尾角左衛門、何事ならんと其に立顯れると、酔しれたる若侍を五六人載せたる船が此方の軸へ突掛けて、各交るぐ、大聲を立て、何やら管を巻いて居る。角左衛門の姿を見ると、眞先に居た一人が衝と進んで来て、

「其なる船へ物申す。先刻より妙なる御調を拜聴致し居りましたが、船中盡く、胸も断るとばかり、實に猛き丈夫の心も和ぎ、目に見えぬ盲人も跣足で遁出す古今の御手際、是非に今一曲御所望申したい。就ては御覽の如く手前方は男ばかりの酒盛、折角の御琴を拜聴いたしても、座中に花が無うては何の己が酒で御座る。あはれ願くは我儕六人の者を少時の間御同船下し置るとやうと」云ふ間に、一同ばらばらと立掛つて、狼藉にも此方の船に乘移らんとする體。無禮の奴輩堪忍ならじと念うたなれど長尾角左衛門、事暴立ては面倒と、故と語を和けて、段々辯疏を言つて居る。おやつは此騒に琴を片付けて了つて、夫奎之丞が

東西短慮之双

殿より拜領の名香なまぐさ「雪の下水」と云ふのを取出し、此間に一炷焚いて心を鎮めて居ると、酔つて居る癖に鼻の利いた奴が有るもので、

「いや、各位暫くお控へなさい。今琴の音が止むと倅しく、積郁として蒸じ来る香氣は、世の常ならぬ名香と覺えた。察するに、最も幽しき調の圭の御筋、彌よ以て可慕い。」

「然やうく。」

「一曲御聽せ下さるが御不承ならば、改めて其の名香をば一炷御所望申す。」

我も彼もと六人の若侍無二無三に此方の船に飛乗つた。さあ一大事と、仲間若黨も男の冥理には其へ飛出して、六十餘歳の角左衛門を頼に狼藉者の前に立塞り、奉公の爲處此時と覺悟を極めた。角左衛門はもはや抜くより外に術無しと、刀の反を打つて機一髪いっさいの呼吸を測つて居る。

彼の若侍達は、飯のやうに鼻を並べて、敵を無勢と侮る面白ずく、老夫なまなか打物を取るより腰の弓でも彎いたら奈何だなどと甘く見ながら、或は嚇し、或は愚弄し、聞くに堪へざる種々の雑言。既に恚よと見えたる時、

「角左衛門控へよ、各方にも暫く。」とおやつが聲を掛けた。

(四)

所謂鶴の一聲で、雙方手を退き鎮つて居る處へ、おやつが出て参つて、

「方々には不束なる調の御所望と申し、又香の御所望、いづれも御風流の事にて、假初にも其を狼籍など

とは、辨無き家來どもの過言にて、私より御託を申し上げます。御言は忝なけれど、未熟の爪音は陰なが

らお耳に入れましたもお可耻う存じまするほどなれば、是ばかりは二度と御聞に入れる儀は御免を蒙ります

る。然りながら、唯今試みまじたる香こそは勅銘の物にて、私は秘藏で御座ります。御所望下されまし

たる御志の嬉さ、一炷づくなりども各方に差上げましたきは山々なれど、はや用お盡して此に残

るは僅に一炷、御人数は六人、如何にとぞ致方が御座りませぬゆゑ、失禮ながら此の香箱の儘川水に流しま

する。那位なりともお拾ひなされました御方の物。」と常意即妙の捌。無法の侍等も我を折つて、皆此

の福の授りたい下心。

「それ投げまするが、宜う御座りまするか。」

と舷に差寄つたるおやつは蠟色に葱草の金高蒔繪の香箱を撃げると、餓鬼が擲飯の顔を見たやうに耻も
外見も打忘れたる彼の六人、我先にと己の船に飛下りて、尻餅を搗くのが有る、路のが有る。駭いたのは船
頭、大の男がとたばたと飛込むので、其度に船が彼方此方と搖いで、ざぶくと水が入る、いや、もう謂ふ
可からざる亂脈。おやつは香箱を投入れると、直に船中の燈を消して、それと此場を漕ぎ脱けたのであ
るが、彼の侍の船は、那處だ、此處だと劇く下知して卍字巴と漕廻り、パツテラの櫂のやうに六人が左右か
ら手を出して水の中を掻旋したのであるが、流るゝ水の面は潤いのに目的物は眇たる香箱、而も進退不自由
の暗中摸索と来て居るから、彼等十二本の手の水練は、恐く行く水に數盡くよりも儂いものであつた。
是が濡手で泡の擲取。

甲「奈何だな。」

乙「無い〜。」

丙「どツこい、有つたぞ。」

一同「有つた!」

東西短慮之双

丙「と思つたら、西瓜の皮だ。」

丁「可かんく。船頭、取舵。」

戊「いとや、面舵。」

丁「船頭、取舵に爲んと打斫るぞ。」

戊「船頭、管はん、面舵に遣れい。」

癸「どうも然う争つて居ては船が動かんではないか。」

甲「然うだ、爲方無いから、船頭、其方側は取舵にして、のう、此方側は面舵に遣れ。」

二つの船で那樣器用な働は出来ない。唯紛々擾々として香箱の行方は彌よ不明になるばかり。おやつ

運と云ふ者は争はれぬ、此騒を餘所にして稍川下に泛べたる一艘の小舟には、燈をも點さず閑寂に獨酌を樂

める氣色であつたが、いで、此の川波の涼しさに暫く持馴したる盃を溜がん、と差延したる手に留つた物が

有るので、何氣無く取り入て見ると、確に香箱の手觸。さては彼の女房の投入れたる品は計らずも我手に入

りたるか、面白しくと之を土産に其船は筋を解いて、何處とも無く漕去つたのであります。

(五)

扱危さを道れたる御座船では、更に一場の悶着が起つたのである。事に動ぜぬおやつ

の振舞は、男子も及ばぬ所であつたが、有緊に氣性の心弱く、別して病中の事でも有つたので、思も寄らぬ騒動に氣が上つて、

頭痛よ、眩暈よ、それ、御藥の按摩のと、女中の狼狽方は一様でない。なれども、人々の介抱にて程無く

氣分の本復したる處へ、長尾角左衛門進出でも、私老年とは申しながら、殿の御鑒識を以て今日の御供を仰

せ付けられたるに、其効も無き仕合。狼藉者に出會ひて御主の辱めらるゝを見ながら、手出し一つ爲さ

るのみか、御拜領の名香をば川中に棄てさせましたるは、私の一分立たざる上の大罪、罷歸つて殿様に

合すべき面皮も御座なし。御目通を汚しまするは恐多けれども、此場に於て臆腹搔切り、不覺の御詫仕る

心底。同じく相果つる命ならば、那場に六人の奴等と刺違へて死ぬべかりしを、控へよとの御言辭し難く

手を弛めて、空く彼奴等を活けて還せしのみならず、名香を失はせ參らせしは、角左衛門が此世の遺憾。死

遅れましたたれど、さらしく命愛しさに多勢を懼れし卑怯の老夫ならず、憚りながら御覽下さるべし。」

東西短慮之双

と諸肌推脱いで、差添に手を掛ける。あれ止めよとおやつと言ひ、一同寄つて湊つて漸く取押へる。

「角左衛門、それは老人にも似合はぬ無分別でありますぞ。一命を捨てて殿様への申譯とならば、此身とても其方には遅れませぬ。無禮の言を聞流し、刺へ肌身も離すまじき大事の名香をさへ彼等に取せしは、如何なる意にて然やうにまで堪忍致せしと思やる。」

角左衛門は背縫か何か曲つて、袴の振れたまゝで、黙然として頭を低れて居る。

「事を好んで殿の名が出ましたらば、それこそ由々しき大事に成らうも知れませぬ。然やう成つた曉には、此身の一分にも、又角左衛門、其方の一分にも替へられぬ、と恚う思ひましたゆゑに、無念を忍んで恥辱を受け、大事の名香を失ひ、秘藏の道具をも捨てました。倘彼の侍どもが花房空之丞の家内と知つての上の狼藉ならば、女ながらも此のやつ、眞先に命を捨てても名を愛むのでありましたが、宿意も有らぬ酒興の戯、何邊の誰と知られたでもなれば、此の船中の衆の者さへ屹と口外せなんだら、那の場限にて橋間の水と流れて濟む事。今此にて命を捨てては、折角の心盡る空形の、あわれ此事沙汰無しぞや。心得たるか、皆々ど、船頭には酒を飲ませ、船賃も餘分に取りらせ、事無き體にて夜更けぬ。諸敷に歸つた。」

(六)

夏も過ぎて、秋雨の降續く夕、館の宿直番に當つた花房空之丞、詰所には合役ともに五人、徒然なるまゝに「可憐さまさる物語、或は又心地好き話、軍書の評判、新しき述作物の噂、俳諧の前句附、取交へたる浮世話」と種々に慰みて夜を明すのであつたが、聞き飽き、語り疲れて、後にはいづれも睡たい顔色。其時咳して一座を胸したのが筑島富右衛門と云ふ侍。此男家中の沙汰に乗りたる道化者にて、又古今無類の話上手。

「何と各位、夜が恚う更けて参るに就けて、お互に顔色が不景氣に相成つて参るのは、甚だ心細い次第では御座らぬか。別して花房氏の如きは近來何と無く浮かぬ氣色に見受けらるゝ處、今晚は殊に御病氣などの體にも相見えたるが、如何成されました。」

「いや、別條は御座らぬので、毎も此の秋雨に降れますると氣の鬱するのが拙者の癖で御座る。」

「其は宜くない。然やうな御氣分にて今夜の御勤務は、御難澁察し入る。御酒一献とも申したいが、提殿しき詰所の事とて盃の影も御座らぬ。又お睡い方々には茶菓子を差上る意で、拙者が一世一代、而して今夜

東西短慮之双

が最終最初物と云ふ奇談を御聽に入れやう。如何で御座るな。」

「其は忝ない。是非伺ひたいもので。」

と空之丞が挨拶をする。一同も無論大賛成。

「然らば辯じまするが、前以て些と御断を致して置くのは、拙者が身の上の實録で、而も狂言などの外には有るまじき濡事一件、こりや恐く事實とは思召すまい、ぢやに因つて今日まで人にも語らず、又向後とも必ず口外致さる富右衛門一生の秘事で御座る。拙者も一世一代の話であるから一心に辯じる。各位に於ても其の積で神妙に御聽を願ひたい。

いや、もう憶出して身毛が彌立つほど好い氣持の話。段々と御聽さる中に實録に相違無い廉が御了解に成るから。そこが御慰で御座る。」

甲「箕島氏、少し前口上が長いやうだね。」

箕「其だから拙者が断つて置くのだ。左も右も神妙にお聽き下さい。」

乙「神妙は宜いが、餘り神妙にして居つたら、前口上だけで夜が明けは爲ぬかと存じて、甚だ心元無い。」

丙「さあ、始りく。」

と四人の聽衆は膝を進め、顔を並べて、語れ聽かんと身構へた。富右衛門扇を以て席を拍ち、

「然れば去ぬる六月十四日の夜、非番を幸に、暑氣を凌がんと、一僕召連れて邸を立出て、兩國橋にて船を備り、竹筒を友として花火見物と志したので御座る。今更事新しく説くまでは御座らぬが、然しにも潤き河面も大小の遊船にて埋るばかりの繁昌。彼方には笛太鼓で嘈かす船もあれば、此方には美酒嘉肴を積んで船も利かぬやうなのが有る。或は色好き女を數多載せて、是見よがしに漕廻るのが有るかと思へば、男女相對で一杯一杯、又一杯、兩人對し酌めば山花開く、我酔ひて眠らんと欲す、君且去れなど云ふ船がある。」

申「貴公、覗いて劍突を吃つたのかい。」

箕「那様物は決して吃はない。携へたる竹筒を傾けながら彼方此方と見物して廻る中に、橋少し上手の、餘り混合はぬ處に繫いだ一艘の御座船。」

乙「是からが聞處らしいで。御座船だね、箕島氏。」

箕「然やう、如何にも準繩に飾つた一艘の御座船。」

(七)

箕「而して心憎くも此中から琴の音が洩來るのでは御座らんか。拙者も有繫に棄難いから、船を差寄せて覗いて見ると、居た、居た！ 年が廿歳ばかりと覺しき一箇の美形、又有るべき面影ならず。譬へば、繪に畫ける源氏優婆塞の宮の御娘、少し真木柱に居隠れて琵琶を鳴し給へるに、雲隠したる月の俄にいと明く差出でたれば、扇ならでも招くべかりけりと、撥を擧げて差覗きたる顔色、いみじう臍開けて、匂やかなる氣色は、魂も有頂天に飛ぶばかり。各位が見ないからとて申すではないが、恚云ふ箕島富右衛門臍の緒切つて以來、容顏美麗、風姿綽約と謂つても、恐く那の位のは見た事が無い。

此に最一つ難有い事は、傍に親夫と覺しき者も居らんのだ。」

甲「右の美人唯一人かい、箕島氏。」

箕「有りや一人ではない。男女五人ほども居たらうけれど、皆下々の者、謂はゞ對手が無いのだ。此方とても一僕を連れたるばかりで、甚だ徒然に堪へぬ折から、何とかして言寄る便あれかしと胸を焦した。何爲胸を焦したかと謂うに、此で拙い事を言出した日には成る戀も成らずに了ふ。成らぬ戀も成るのは此の一言に在

る、何か様子の良い、好いたらしい事を申して、他の肚を割らんければ成らん。因で、先刻より是にて幽しき御調を聴聞致し居る者で御座るが、御蔭を以て獨酌の無聊を慰め、此上の喜も無き仕合。妙なる爪音の聞ゆる限は、夜の明るるとも御船の傍を離るべき心地は致さねど、都合ありて是より立歸る身の本意無ど。幾度思返せども、餘りに御名残の盡きされば、感外の申分ながら、此の胸中を御察し有りて、苦しからずば一盞の御流をも賜はらば、其を思出に御暇申すべしと、俄に取調へた提重一組、菓子一折、柳一樽、之を供の者に持せて、右の船へ送つたので御座る。」

乙「成程な。色道は一押、二金とか申して、一が押だと云ふ。其の益をくれと云ふ處が押で、遺物を番んだ手際は、所謂二金だね。」

「扱箕島氏も一押、二金までは漕着けたが、三男にはお困りで在つたらうな。」

箕「いや、御心配下さるまい。抑も縁と申す者は偏に天の配劑、いや、もう唯々異なもので御座る。先今の後談をお聞き下さい。」

で、此方の使が返つて來ると、旋て舷に顯れたのが十二三の女童、誰方かは存じませねど御志の忝など、

せめては御目に懸りて一言の御禮も述べなければ、御歸の際に意無きやうなれど、何卒是に御入有れかし、と言ふ思ふ坪の口上。直様其者に案内されて、彼の美形の前に出たと思召せ。いや又其の近優りのして麗しい事は、宮右衛門ほどの者が唯もう夢心地。差いつ抑へつ酌交す盃の數重なりて、互に催す微醉の目元に通ふ心と心、……何と各位甚麽もので御座る。」

甲「宜いから其先をお話したさい。」

箕「失禮ながら各位は餘り御心得が有るまいが、凡そ天下に美人の恁う醉を帯びて、何と無く淑しさを忘れんとするの態有るくらゐ、色を含んだものは御座らんで、のう。」

乙「然やうな事は奈何でも可いから、今の先を、先を。」

箕「是からが聴き所の本文で御座るぞ。」

丙「いづれも心得て居る。」

(八)

箕「折しも颯と吹来る河風に燈火消えて、眞の暗、其時彼の女房、夜や更けぬらん、袂寒しと言ひながら舷の

隙子をばたと閉切つた。すると、並居る女中は粹を通して次へ退つて了つたので、迹には二人が相對。遠くて近きは男女の間で御座る、此邊の事は具に申さいでも各位に於て十分御察し下さい。扱名残は盡さねど、今は別と云ふ際に、彼の女房潑々と拙者が膝に涙を零して、君が一夜の情の爲に、妾が百年の身を誤るとは、今こそ思當りました。束の間に嬉き夢は消へ果てて、後の契はしら露の命も有らば逢瀬まで、之を形見に御覽ぜよ、必ず忘れ給ふなやと、片手に熟と拙者の手を握り——宜いかな、此が聴き所だから——又片手に持添へて、緊と遮してくれた一品が御座るが、各位此品を何と御判断有る。」

丙「箕島氏、餘り奈何も、話が旨過ぎるが、貴公其は夢物語じやあるまい、のう。」

箕「なかく以て。現に其の一品を持参して居るのだから、唯今お目に懸けるが、其の證據が物を言ふので御座る。其夜より致して今日まで肌身離さず懷中致し居る戀人の形身、然う易くは御覽に入れられん。何であるか、先中て見候へ。」

乙「然う勿體振らんでも、有るならば出し給へ。」

甲「左に右其品を見ん内は、今の話は眞に受けんから。」

東西短慮之双

箕「然らば、見事お目に懸けやうが、各位先其の手を清めてお出なさい。」

甲「近う寄つて御蠟などを上げるには及ばんかね。」

乙「御蠟は拙者が上げます。」

と行燈を引寄せて、一同居去り寄る。」

箕「則ち是だ。」

と懷裏より取出したる香包。

箕「雪の下水と云ふ名香で御座る。」

甲「成程、拜見。」

丙「拜見、拜見。」

乙「どれ、拜見。」

箕「然う引張合つては困る。大事に御覽下さい、大事に。」

花房空之丞は一同の看了るのを待つて、

花「身共にも拜見を。」

箕「さあ、奈何ぞ十分に御覽を。」

やをら右の香包を手に取上げた空之丞。見れば疑も無き「雪の下水」、包までも吾身殿より拜領の其儘にて、妻のやつに取せし品たるや歴然たり。おのれ、憎き姦婦めが、と前後も不覺に急來る怒氣をやうやう鎮めて、飽くまで然あらぬ體を粧ひ、

花「恐入つたる御果報、お可羨しい事で御座る。」

箕「實は未だ之に香箱が附いて居るので、此に持參は致さなんだか、是亦結構なる道具で御座る。」

花「は、あ、して其の香箱と申すのは、如何様なる品で。」

箕「蠟塗に葱草の金高時給で。」

花「然やうで御座るか。それは結構さうな。」

箕「いや、花房氏は如何にも道具好で御座つたな、近日是非御目利を願ひたい。」

花「お話で唯今思着いたので御座るが、明日は丁度親類の女客を致すので、就ては先年御上より拜領の

東西短慮之双

東西短慮之双

名香にて十種香など致して、持成さうと存じ居りましたる處、幸の其の香箱、近頃御無心ながら、明日の馳走に是非拜借を願ひたいもので御座るが、御聞濟下されうか。」

箕「いと易い事。どうぞ御心置無く御使ひ下さい。然やうなれば明朝歸宅次第御届け申しまする。」

と空之丞の胸に計有りとも知らねば、富右衛門快く承諾して、さて又四方山の物語に、其夜はほのくど明けにけり。

(九)

翌朝空之丞は館を退つて歸宅すると、例の如く妻のおやつは其に出迎へる、別に變つた體も無い。有つて耐るものか、實際不義を働いたにした所で、誰も那樣顔を作て居る者は無い、況や夢にも知らぬ箕島が口拍子の座談。其を一圖に實と思込んだ夫の事であるから、おやつは顔を見ると矢も楯も耐らぬ、一刀の下に砍捨てくれんと心の中は煮返るやう。熱と怵へて居る夫の機嫌が勝れぬと見たから、おやつは心配して色々優しく訊ねる。

彼此する内に箕島から御約束の品と云ふので、香箱の包を送つて來た。披いて見れば、菘草の蒔繪、大事に爲よと往日妻に取せた拜領の品其物、いよく疑ふ所もあらず、富右衛門が物語と云ひ、恚る證據と云ひ、女の命は助け難しと、早速一通の書面を認め、右の香箱を堅く包んで、さておやつを呼んだ。

や「召しまして御座いますか。」

空「おう、其方はな、是から些と生家方まで使に參るやうに。御用の筋で奥殿にお話を致したいのであるが、私は箕島富右衛門に急に會はねばならん事が有るので、其方は代に參つて、此包を御目に掛けて、委細は書面に記してあるから、直に御返事を貰うて、のう。」

や「畏りました。而して其の御包の品は何で御座いまする。」

空「あゝ、是か。是は藥じや。」

や「然やうで御座いますか。」

と、何も知らぬのであるから別に異みも爲ず、おやつは直に着更をして、右の二品を持つて親元へ行つた。

父奥右衛門在宅であるから、おやつは其の居間に通つて使の趣を述べると、餘は母親の傍に來て積る話を爲て居る。奥右衛門は御用の筋とは何事ならんと、彼の文を披見すると、

「妻やつ事箕島富右衛門と密通仕候段紛無之、去る六月十四日の夜隅田川の船遊に事寄せ、船中にて富右衛門と枕を並べ、又逢ふ迄の形見にと、此の香箱を贈り申候、之より事露顯致し候に因つて、證據の爲相添へ遣し申候。」

とあるから奥右衛門は驚いた段ではない、昔氣質の正直一圖の士であるから、齒咬を爲して烈火の怒、謂はうやう無き娘の不埒、然は此親は生まざりしに、大畜生にも劣れる奴、と早くも座側の一刀引寄せて、「やつ、やつー」と呼ぶ聲も頭へて居る。

(十)

何御用と入つて来た娘のやつが、其に手を支へる目前に突付けたのが彼の香箱であります。

父「其方は此品に覺が有らう。」

や「やあ、其の香箱は！」

とやつは一目見ると仰天した。父の奥右衛門は只管婿の書面を信じて、事の實否を糺さうと云ふ考も無く、唯不埒な奴とばかり思追めて赫となつて居る際に、やつの色を變じて驚く體を見たのであるから、口よ

りは手の早い士氣質、聲をも掛けず拔壁に截然と進つて了つて、返す刀に首打落したのは、無殘と謂ふも愚であつた。

話次分頭夫李之丞は舅方よりの挨拶如何にと待つ程に、旋て達いたのは首桶であります。恚とは覺悟の前であるが、有繫に李之丞も七八歳から許婚の昔を懐ひ、今朝まで在りし姿の花も、散りて敢無き露の命を觀じ、包を引寄せるから胸は張裂るばかりでありましたが、蓋撥却れば、淺ましくも紅顔空く衰へたる生首。李之丞は熱き涙を潑々と流して、然りとは難面き女の爲業や、おのればかりは神以て恚るべしとは念はざりしに、頼まれぬは人の心哉。親の歎、夫の恨に易へても一夜の契最愛き男に今こそ晴れて逢するぞ、と元の如くに推包みて、之を挾箱に入れさせ、直様箕島富右衛門方に出向いた。

李「さて、今朝は態々御使にて大事の御品をお貸し下され、千萬恭なう存じまする。」

富「如何で御座りました、お役に立ちまして御座りますか。」

東西短慮之双

其許の大御好物を手に入れましたゆゑ、早速持参致しました。」

宮「それは何とも恐縮の至で。而して拙者の大好物とは何で御座りまするな。」

李「唯今御覽に入れまする。」

と次の間へ立つて、抱へて来たのは件の包。誰も生首などの所好な者は無いから、宮右衛門は切に訝つて、

宮「は、何で御座るな、拙者の大好物と？」

李「此の一品は御好物でないとは言せぬから、箕島氏、さあ篤と御覽なさい。」

蓋を拂つて差附けた首桶、宮右衛門是ほど驚いて見れば、見識らぬ女の生首。

宮「之を……拙……拙……拙……拙者の……好、好物とは？」

居合腰で逼寄た李之丞は、此時、

李「おのれ不義者思知れ！」

と言ふより速く宮右衛門の右の肩先を小袈裟に打放して、のつけに頼るを引伏せて、惜しくと止を刺し、

其身も上に乗掛り、腹極破つて相果てたる始末。夫れ車は三寸の轆を以て千里を遊行し、舌は三寸の過を

以て五尺の身を果すとは、手習ふ子供も口吟む語なり。其さへ知らぬ箕島が文盲、舅、奥右衛門が不詮議、
聶李之丞が鹿相、いやはや、どうもと書いてありまする。

扱續けて「アラビアの林檎」を辯じまする。

(十一)

アラビアン ナイツに出て居るのは「三個の林檎」と題する物語で、是は私のお話を致しまする本文の前

後がなかく面白いのでありまするが、此は趣向を對照するのが主であるから、花房李之丞短慮の事に似通

つて居る條、だけを摘んで申上げる。

爰にアラビアの都バグダッドと云ふ處に一個の商人が居りましたが、女房と云ふのは近邊に住める某の娘、

十二歳の時に娶つたとしてある。此物語の起つた頃は女は廿二歳で、男の子が三人ありましたので。扱其の

女房は二月越の疾病と、云つてとつと床に就くのではないが、何と無く血色衰へて、打續き氣分が勝れぬの

でありましたから、最愛の妻の事ではありまする、夫は殊の外心配いたして、商も手に付かぬ鹽梅で怠無き看

護。けれども、病人は誠に食氣が無い。それでは成らぬから何ぞ欲い物を食べて見るが可い、うと、何が欲

東西短慮之双

い、食べて見たい物は無いか、と夫の優しい言に、女房は林檎が食べて見たいと云ふ。病人と云ふ者は何國のも熱を噴くもので、左右に無い物ねだりを爲たがる。廿四孝に於ける寒中の筒如きもので、折から林檎の季節でない。當節なれば雪中の筒でも、春先の林檎でも何でも有るが、昔のアラビアでは別して不便利な事でありましたらう。病人が氣に入つた物から食付いて快方に向ふ例は間々有る事、奈何がなして其の林檎を食べさせたいものである、と女房を念ふ眞實心、是から尻端折で（アラビアに尻端折は無いが）界隈の町を四面八角に奔走したが、何處にも貯へてない。一日は無駄足を踏んで、明る日は其處此處の果園を廻つて捜したが、何處もお生憎様。時に一人の園丁が言ふには、そりや逆を此のバグダッド中には一片の林檎も有るのではない。パルスの御苑には一株の名木が有つて、此には時藏が有るから行つて御覽じろと誨へた。それは忝ないと、翌日直に旅装いたして、路程は幾程有りまするか、往復二週間を費して、三箇の林檎を買求めて参つた。此の林檎の代は一箇一セキンと云ふのであるが、一セキンは云ふと英吉利の一弗八十仙餘に當る。三箇で五弗有餘、高いこと夥しい。之に二週間の日當と旅費とを掛けた日には、齒も當てられない林檎に成つて了ふ。

女房可愛けりやこそ汗淋漓で此の林檎を背負つて歸つて來ると、無殘なる哉病人は……病人が無殘なのは、ない、亭主の方が無殘なのは、もう時過ぎて林檎などは食へたくも何ともないのであつた。是は尤も食へたくなくなるのも無理の無い所で、あゝ、何か食へたいと思ふのは、其時即座に食へたいので、人情として一口の林檎に二週間は待てない。

折角の志は戴くが、林檎はもう見るも可厭、と病人は之を枕頭の隅に押し付けて置くと云ふ始末。扱夫は暫く商を休んだので、翌日からは市場に店を出して、不相戀縁いで居りました。すると、五六日後の事、店の前をば奴隷の黒奴が一個の林檎を持つて駈けて行く。他の物を持つて居るなら、駈けて行かうが飛んで歩かうが管ふのではないが、此のバグダッドを二日捜し廻つて、それでも無くて、二週間の旅をして一個が一セキンで始て手に入るほどの林檎を、黒奴風情が持つて居たから不思議でならぬ。通りすがる所を思はず呼止めた。

夫「もじくく、些とく。」
黒「何じやい、私かぬ。」

東西短慮之双

夫「お前さんに些と用が有るのだ。」

(十二)

黒「私に用が有ると言ふかね。」

夫「然うだ。お前さん、まあ珍しい物を持つて居るぢやないか、そりや林檎かね。」

黒「うむ、是かい、こりや林檎さ。好え林檎だらうが。」

夫「好い林檎にも、那樣結構な林檎は多度無い、お前さん何處でお買ひだ。」

黒奴は莞爾と笑つて、

黒「こりや錢などと出したのぢやないかね。」

夫「錢を出さなければ、何爲たのだね。」

黒「はとあ、貰つただ。」

夫「貰つた？ 何處で、那樣物を。」

「女が與れただよ。はとあ。」

夫「女が、何處の女かね。」

黒「それぢや、まあ一番此の林檎の話ぢやないかね。」

と黒奴は彼の前に立寄つて、顔を撫でながら語る所に據れば、名は指されぬが、此の近處に情婦が有る。其者は亭主持で、子までも有る中を己に情立て居る次第であるが、近頃些と加減の悪いを幸に林檎が食ひたとい言つたのは、此のバグダッドに林檎は無い、然う言つたら鼻の下の長い亭主殿の事、何處へ行つてなりと搜して来るは必定、其の留守中に此方を引入れて樂まうと云ふ魂膽とは知らず、のこくとバルソラの御苑まで買込に出掛けた道中が二週間、其間毎日入浸りの夫婦氣取で暮して居た中の面白さ。亭主殿は大枚一セキンと云ふ林檎を三個まで買つて来て、噂の喜ぶ顔が見たかつたであらうものを、固より欲うはない林檎、唯見たばかりで枕頭に轉して在つたのを、今日些と逢ひに行つて、一個貰つて来たのが是で御座い、と林檎を取つて推戴いた黒奴は喜び勇んで走り去つた。

さあ然う聞いては店などを出しては居られぬ、びたくと形付けて、飛ぶが如く吾家に歸つて見ると、女房のすやく寝て居る枕頭に林檎が二個よりは無い。此時彼は怒の髪を逆立て、起まよと言ふまゝに女房

の頭を掴んで引立てた。

「これ、林檎を一個奈何した。」

「はい。」 とは言つたものゝ、女房は引擦り起されるなり林檎の詮議で、夫の憤怒も未だ夢心地。

「はいではない、林檎を一個奈何したと云ふのだ。」 と夫の險相は變つて、眼は血走り、聲は震へて居る

から、知らぬ間に林檎の一個失せたよりは、女房は其の方を駭いたので。何が何やら譯解らず、唯茫然として居

る所を、夫は惜さの一念、腰に帯びたるナイフを引抜き、物をも言はずぐさど突いたる女房の胸先。呼吸絶々

の吭を刺通して、首打落したが、猶壓らず、肢體を四分に研放して、散々に踏躑つたのであります。

是から死體の始末、胸首の破落々々に成つたのを窓懸の古いのに裏んで、之を棕栢の葉で編んだる籠に押込

んで、更に其口を赤の毛糸で縫合せてからに悉皆大籠に入れて、日暮を待つて擔ぎ出したのがチグリス

河、之へ洶然と水葬した。些と御茶の水事件に似て居ります。

(十三)

是から取つて返して吾家の門口に來ると、總領の男の子が歎歎泣きながら彷徨ついで居りますから、

「奈何したのだ。今頃まで何處を遊び行いて居たのだ。」

「阿父さんを捜して行いて居たんだよ。」

「何、何で阿父さんを捜して行いたんだ。」

「私は阿母さんに悪い事を爲たから、誑られると可けないから、阿父さんに謝つてもらはうと思つて、それで方々捜したんだよ。」

「阿母さんに悪い事とは何を爲たのだ。」

「あの、先ね、私ね、それ、此間阿父さんが阿母さんに買つて來た林檎が、阿母さんの枕頭に在つたらう。」

「うゝ、林檎、其の林檎を如何した。」

「那の林檎を一個私が取つてね……。」

「えゝ。」 と父親は駭いたの、駭かないのではない、戦々頭ひ出した。

「那の林檎をお前が、あの、お前が持出したのか。」

「あゝ、阿母さんに黙つて取つたのだ、而して戶外へ持つて行つて玩弄にして居るとね、前面から黒奴が來

やがつて……。」

「黒奴が来た! お前が林檎を持って居ると黒奴が来たんだな。それから奈何した。」

「其の黒奴が突如あたいの持つて居た林檎を引手繰つて逃げて行きやがるから……。」

「うむ、黒奴が其の林檎を取つたのか。」

「あゝ、それから私は一生懸命に追掛けたのだ。而してやうくの事で取捉へて、いくら返してくれと言つても返しやがらないから、私が然う言つたのだ、其の林檎は私のぢやない、阿母さんが鹽梅が悪くて林檎が食べたいと言ふもんだから、阿父さんが方々へ買ひに行つたけれど、何處にも賣つて居ないんで、二週間も掛つてバルソラへ行つて、一個一セキンづつで三個買つて、阿母さんに持つて来た大事の林檎なんで、阿母さんも未だ食べずに居るのを内證で借りて来たんだから、持つて行つて返さないと譴られるから、後生だから返しておくれと言ふと、色々な事を聞いて置いて、而して了局に私の頭を打撲つて、旁々逃げやがるから又追掛けたけれど、足が速くて奈何しても私には追付かないんだ。」

内に歸ると阿母さんに譴られるのは極つて居るから、阿父さんに然う言つて謝つてもらはうと思つて、お店の方へ行つたのに、お店は閉つて居たから、餘所を方々捜したんだけれど、阿父さんの居る所が判らないから、爲方無しに歸つて来たけれど、内へ入ると阿母さんに譴られるから、先から阿父さんの歸つて来るのを待つて居たんだよ。」

と子の物語る一部始終は、自から母が無實の罪を雪ぎて、鹿忽短慮を悔いたる父の涙は身も浮くばかり。

是から女房の死骸が漁師の網に揚つて事露顯し、終に彼の黒奴の詮議に及ぶ談は又面白いのでありまするが、「武藏の名香」と對照するには無用であるから、之を略します。極めて不辯舌の事ゆるお聞辛い事で御座りましたらうが、私は話説をお聞せ申すと云ふよりは、此の二篇の趣向を諸君が自ら對照して、而して得らるゝ所の興味を薦むるのであります。

(をばり)



三十分間。衆議院に出て居れば十分交代の速記者が、二名で以て此の三時三十分間を受持つのであります。

入替り立替り長い間素人講談を御聽に入れて、然ぞかし御退屈、御迷惑の事とお察し申します。水陰君の口演が一時十分から始つて同四十分を終りまし

たから三十分間、鏡花の一時二十五分から二時四十五分に至つたから、是が

劃然一時間、小波君の三時から四時五分と端が付いて、秋濤君の四時七分

から五時に至るのであります。前と入合せて各一時間になる、此の合計三時

決してお大抵ではなからうと考へます。

然し又、之に願れて未熟不鍛錬の辭を鼓して、封切を讀みまする切なさば、速記者の苦勞や、傍聽者の難

儀と日を同うして語るべきものではありません。如何なる大膽不敵の曲者と雖も、始の内は之に出ると、先

づ脚が頭へる、其の顛動が止るかと思ふと聲が頭へる、全で立ちながら瘡を疾つて居るやうな痛苦、小波

君の如きは各位が聽れた所では、然して巧いともお感じなさるまいが、那で吾人が聴くと頗る巧いので、有